

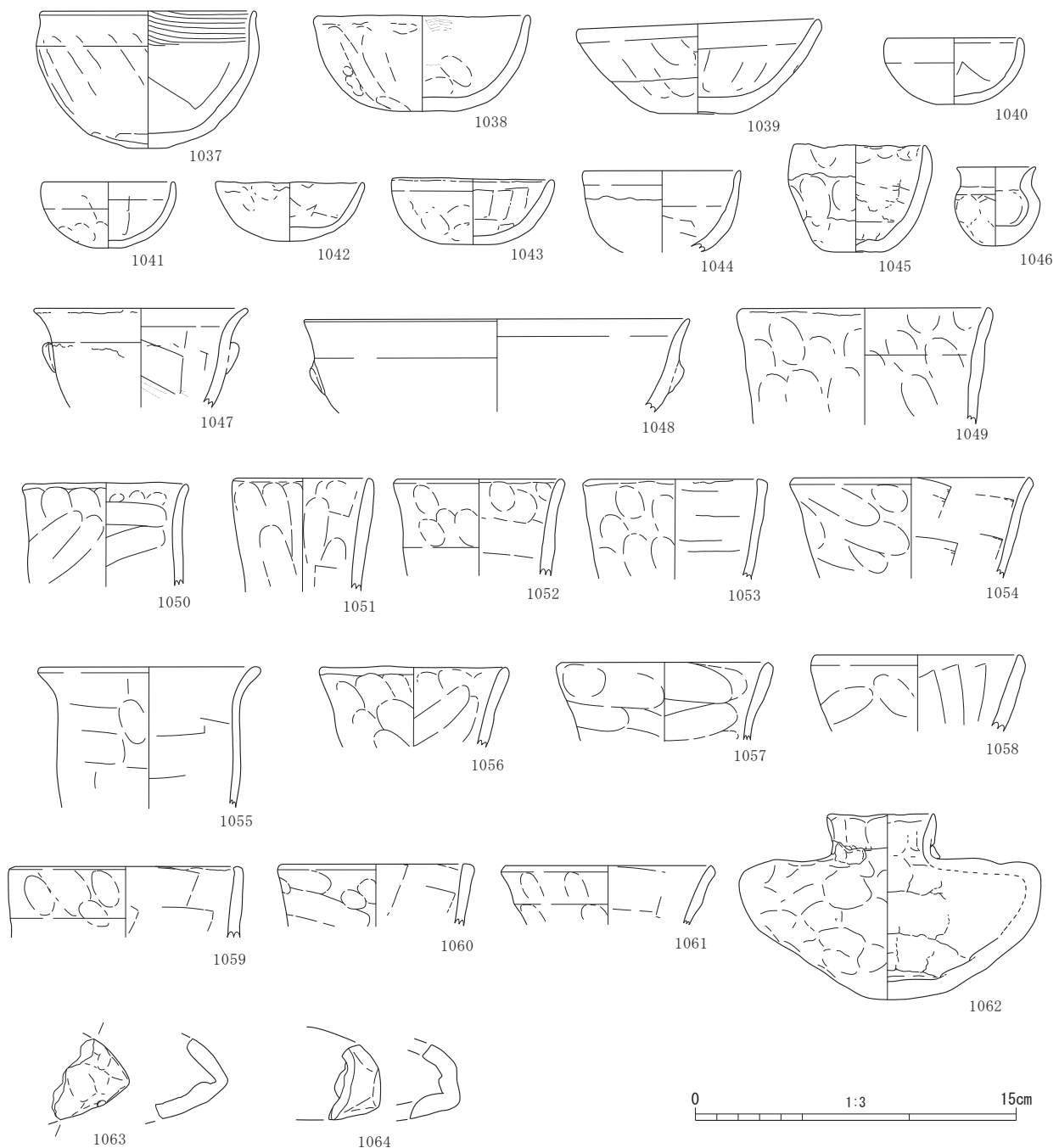


Fig. 246 SX01 中央部 出土遺物 (39)

で耳部が波状である。1001～1005は壺類である。1001～1003は長頸壺と考えられる。1004形状は不明である。瓶の可能性も否定できない。1005は小型の壺と考えられるが詳細な器種は不明である。1006は甕の底部で外面にタタキ調整がなされる。

緑釉陶器 (Fig. 243) SX01 中央部では1007が出土しており、底部と体部の一部が残存している。

土師器 (Fig. 244～246) SX01より出土した1008～1064を示す。器種は坏、有台碗、有台皿、甕、鉢、甗、小型模造品、製塩土器など出土している。1008は内外面に赤彩が施されている有台碗である。1009は有台皿である。1010～1019は坏である。1010・1011は体部から口縁部の立ち上がりやや垂直に近い形状であり、古手の様相を示す坏である。内外面ともに赤彩が施される。1012～1015

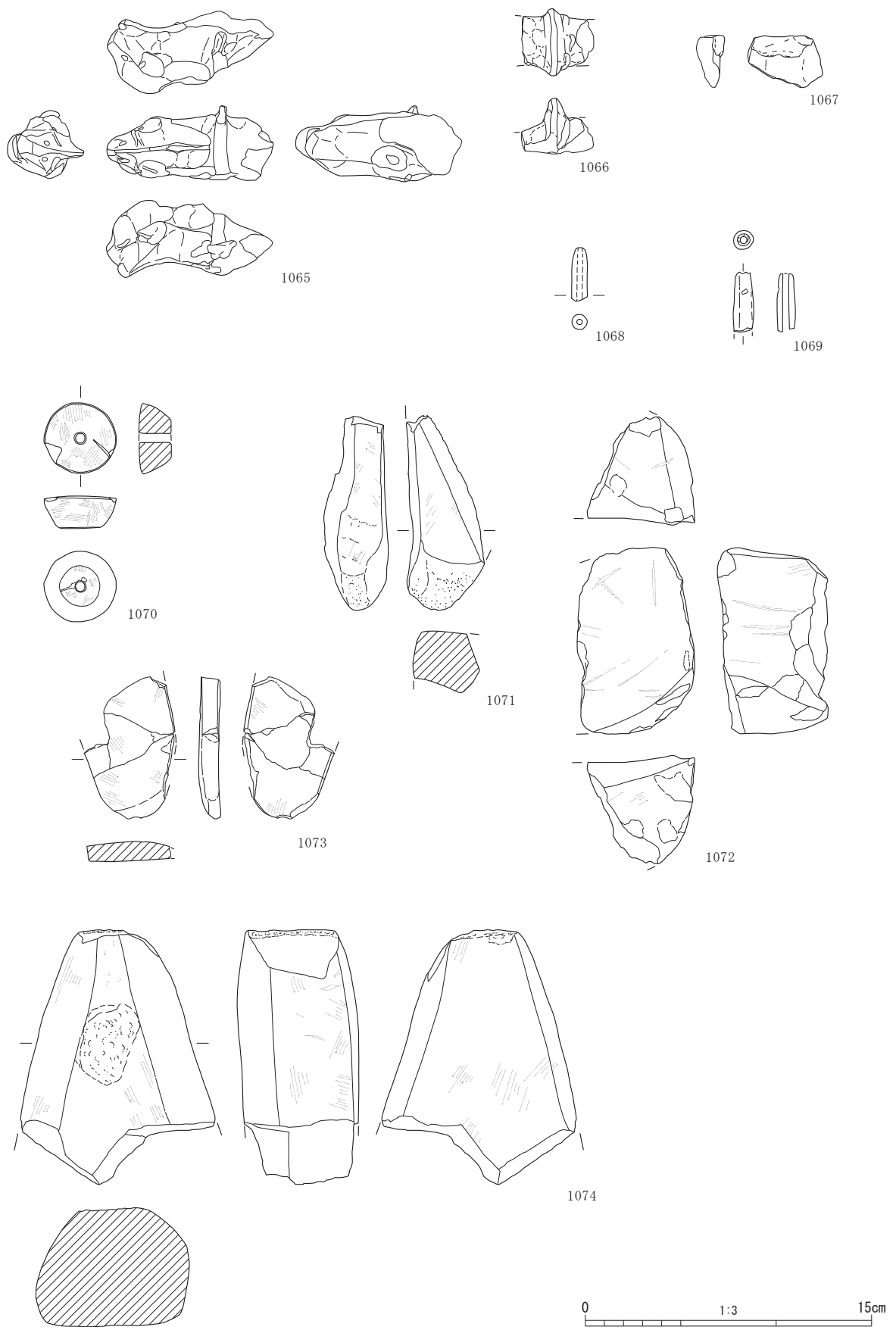


Fig. 247 SX01 中央部 出土遺物 (40)

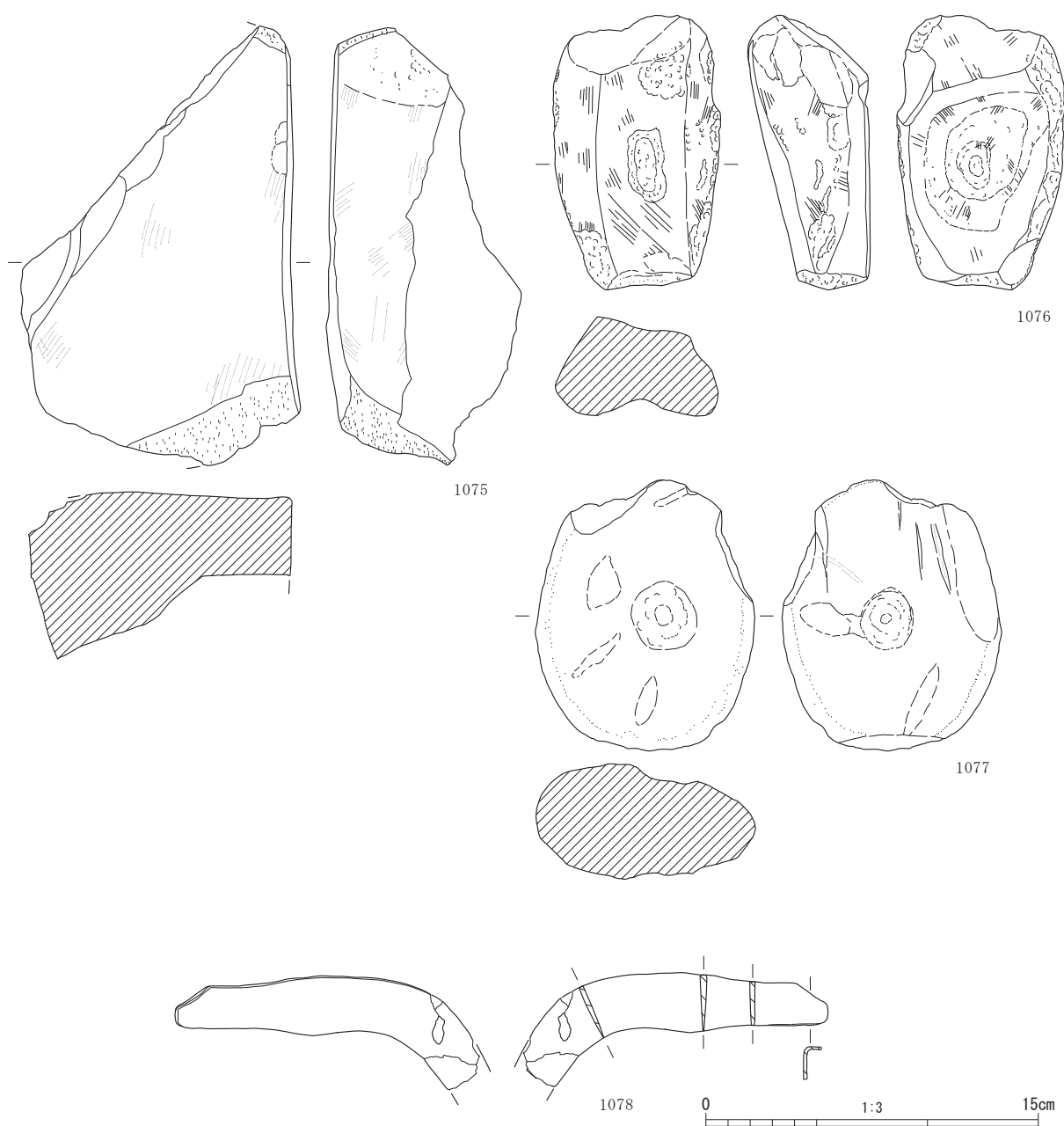


Fig. 248 SX01 中央部 出土遺物 (41)

は内外面に赤彩が施されている。1014 は内面のみ赤彩が施される。1020 は壺の口縁部と考えられ、V層からの混入品と推定される。1021 ～ 1034 は甕である。1021 ～ 1025 は比較的体部が張る形状であるが、1026 ～ 1034 は体部が張らない形状である。1035 は把手付鉢である。1036 は甗で、内外面ともにハケメ調整がなされる。1037 ～ 1048 は小型模造品である。1039 はやや小型の坏である。1037 ～ 1044 は碗形である。1045 は鉢形、1046 は壺形、1047・1048 は底部が欠損しているが甗形と考えられる。1389 ～ 1061 は製塩土器である。1055 は口縁部が外反する形状である。

土製品 (Fig. 246 ～ 247) SX01 中央部より出土した 1062 ～ 1069 を示す。1062 ～ 1064 は革袋形である。1065・1066 は土馬である。1065 は馬の頭部から鞍の前輪部分まで残存している。1066 は鞍

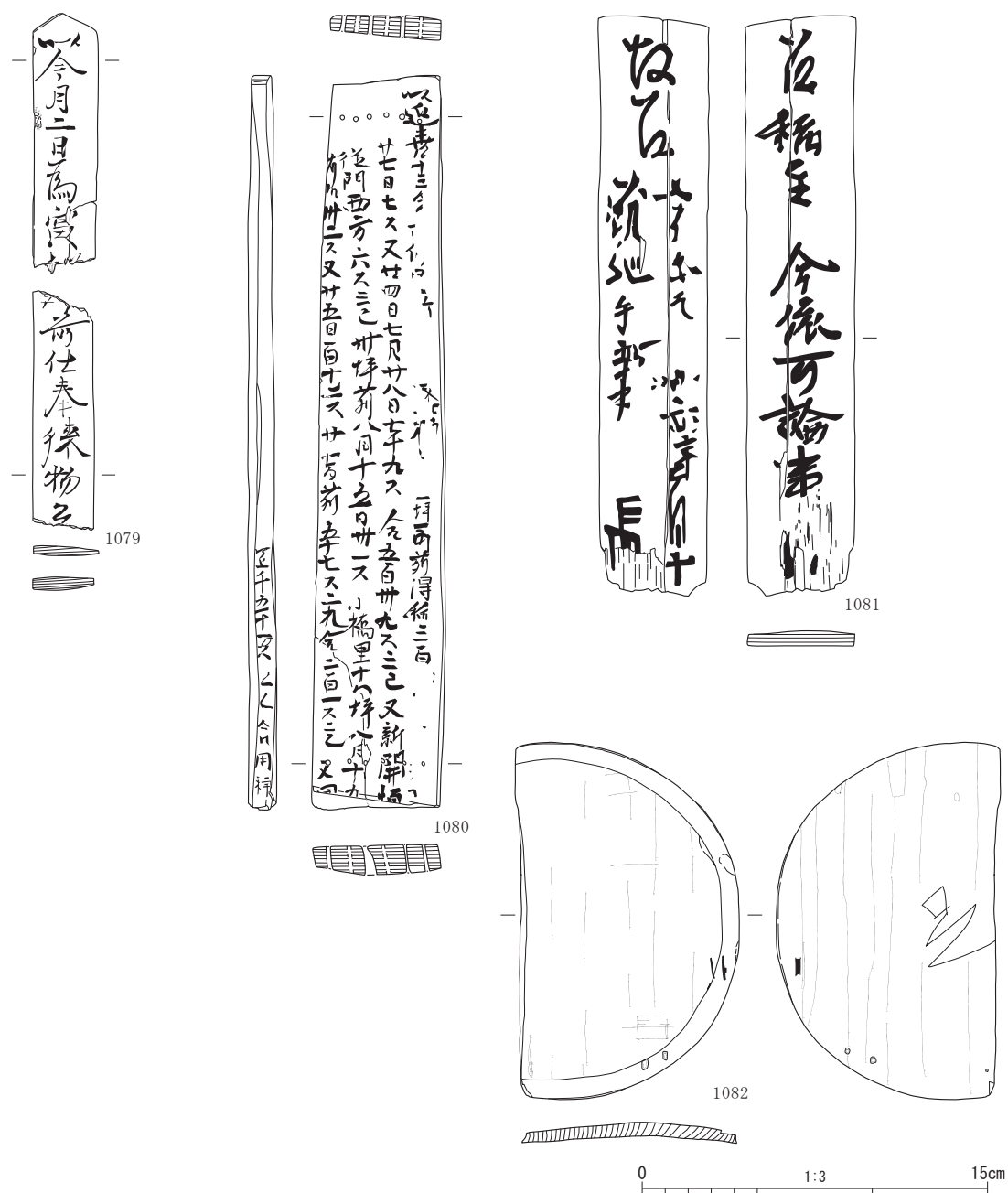


Fig. 249 SX01 中央部 出土遺物 (42)

と考えられる一部が残存している。1067 は土馬や土製支脚の一部と考えられるが詳細は不明である。1068・1069 は土錘である。

石製品 (Fig. 247・248) SX01 中央部より出土した 1070～1077 を示す。1070 は凝灰岩製の紡錘車である。

1071～1076 は砥石である。1071 は砂岩製で砥面は 2 箇所残存している。1072 は砂岩製で砥面は 4 箇所確認される。1073 は凝灰岩製で砥面は 2 面確認される。1074 は砂岩製で砥面が 4 箇所のほか、敲打痕が確認される。1075 は砂岩製で砥面が 2 箇所残存している。1076 は凝灰岩製で砥面のほか、

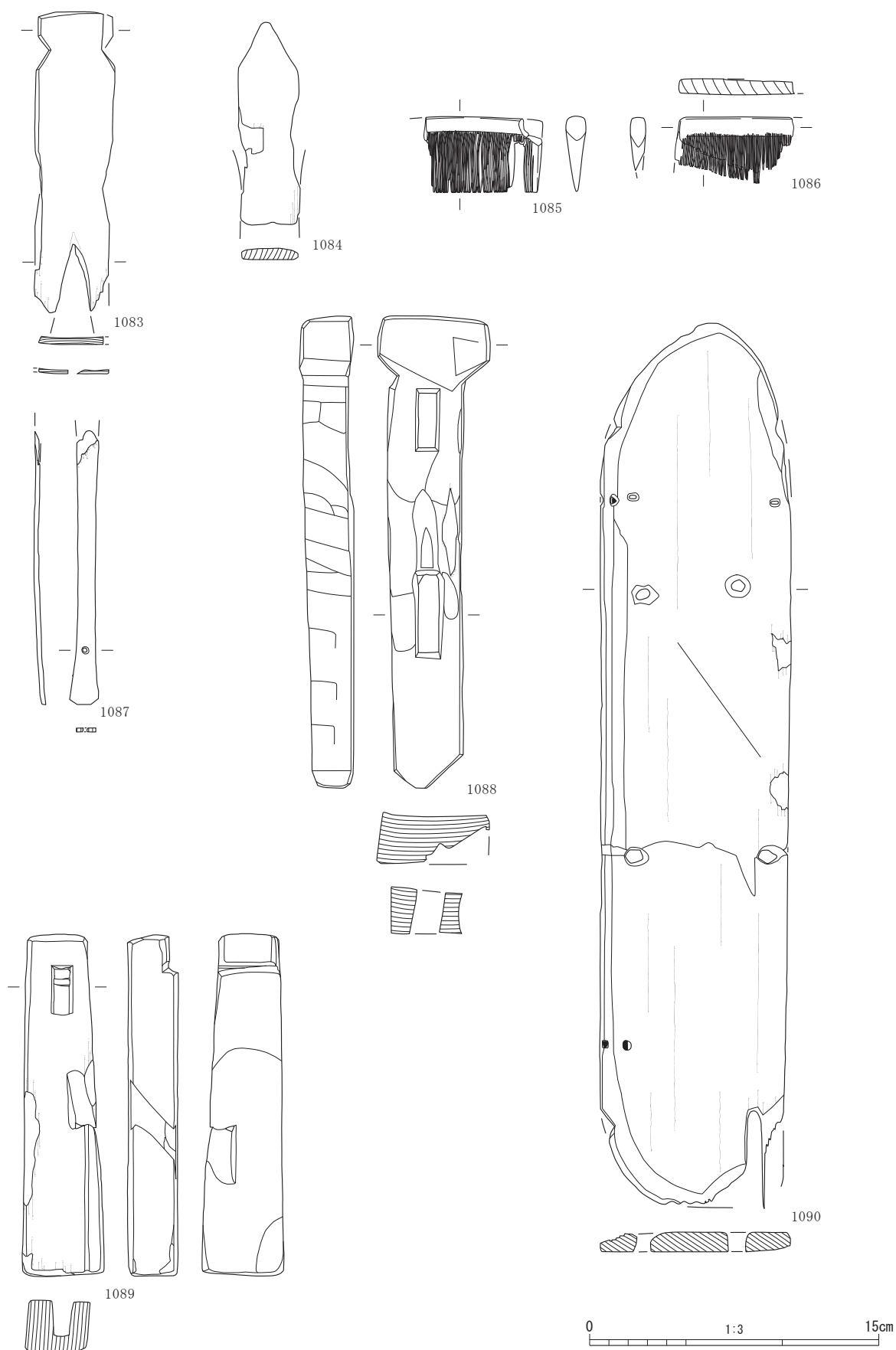


Fig. 250 SX01 中央部 出土遺物 (43)

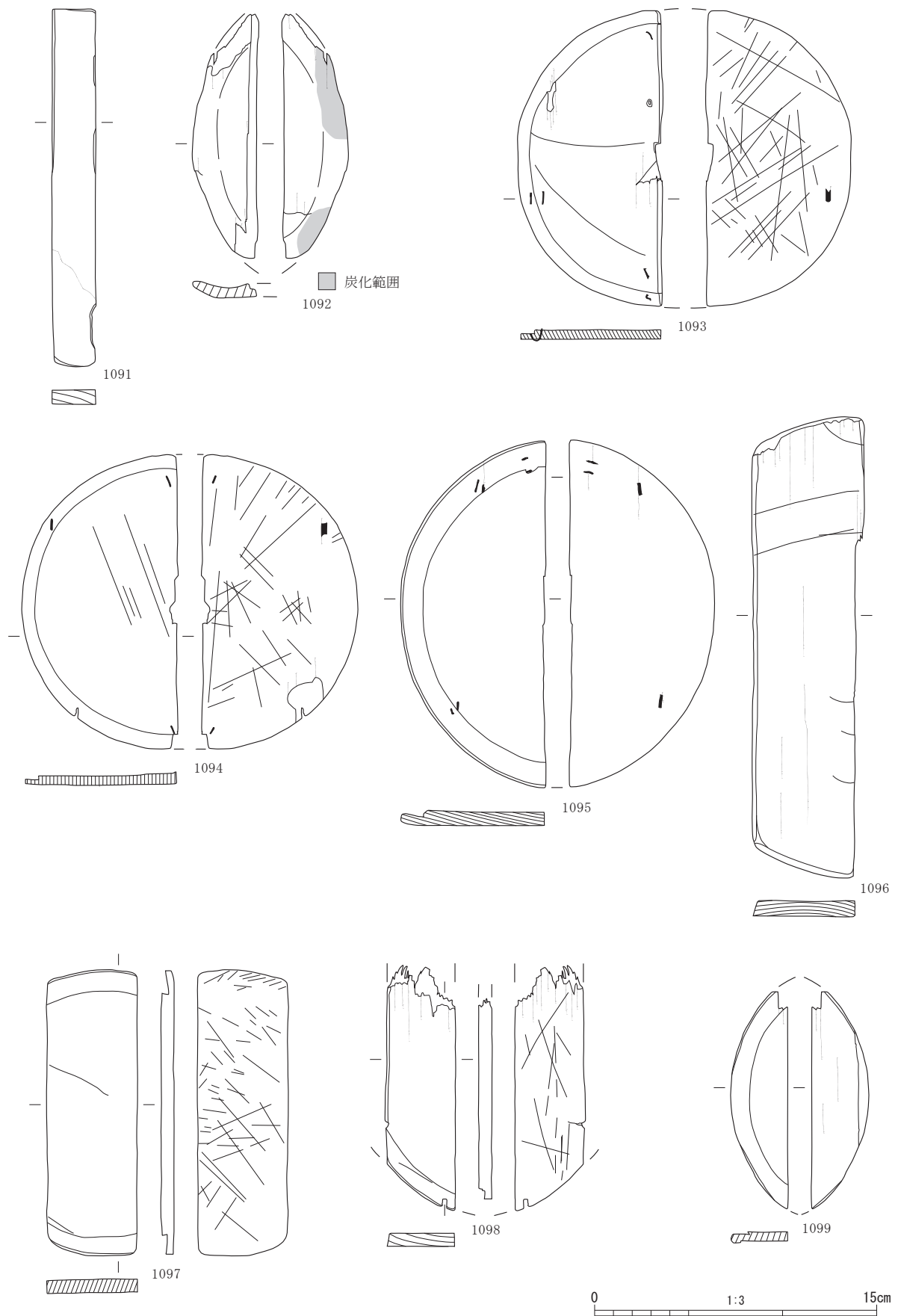


Fig. 251 SX01 中央部 出土遺物 (44)

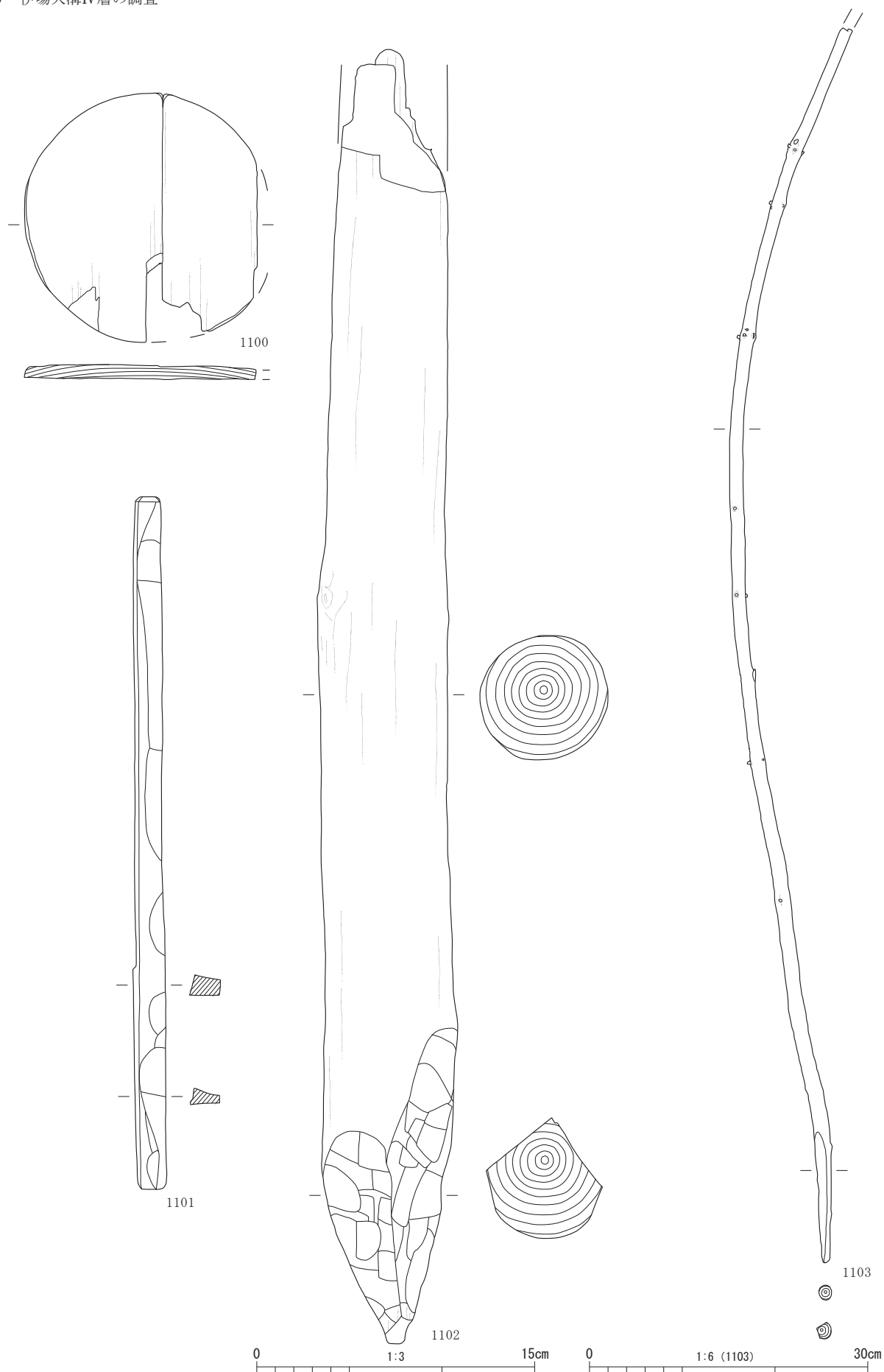


Fig. 252 SX01 中央部 出土遺物 (45)

敲打による凹みが2箇所確認される。1077は安山岩製の凹石である。敲打による凹みが2箇所確認される。

金属製品 (Fig. 248) SX01 中央部より 1078 の 1 点が出土している。1078 は鉄製の鎌刃で、基部が斜めに折り曲げられている。

木簡 (Fig. 249) SX01 中央部より 4 点出土している。V 層で出土した木簡と同じく発見順で番号を付与した。1079 を 20 号木簡、1080 を 21 号木簡、1081 を 24 号木簡、1082 を 32 号木簡とした。第 4 章で詳述するためここでは概要を記述する。

1079 は上部が山形の形状で、中央部が欠損している。「以今月二月」など文字は比較的明瞭に確認できるが、中央部の欠損により間の文字は不明である。1080 は「延喜十三年」が記述されている紀年銘入り木簡である。厚さ 1.3cm で側面にも記述がなされている。1081 は表裏両面に文字が確認される。表面には「召稻主」などの文字が記述されている。1082 は曲物底板中央に「足」が刻書されている。

木製品 (Fig. 250 ～ 252) SX01 中央部より出土した 2083 ～ 1103 を示す。器種は、人形、斎串、櫛、曲物、杭、その他加工材が出土している。

1083 は人形で、下部が欠損している。1084 は斎串で下部が欠損している。1085・1086 は櫛で完形ではないが残存状態は良好である。1087 は扇の歯と考えられ、下部に穿孔がみられる。1088 ～ 1091 は加工材、または加工板である。1088 は上部が両側面に突出する形状で 2 箇所ホゾ穴と考えられる方形の孔が開けられている。1089 は上部に方形の挟りが、側面に斜めに挟られた溝が確認される。1090 は曲物の底板を転用した加工板である。二次加工による穿孔が 6 箇所確認される。1091 は長方形の加工板である。1092 は皿である。欠損により製作技法は不明である。1093 ～ 1100 は曲物の底板である。1101 は加工棒である。1102 は杭である。1103 は先端を加工した杭状の木製品である。土留や木柱の用途ではなく、目印としての杭であった可能性がある。

③ SX01 東部

墨書土器 (Fig. 253 ～ 256) 須恵器、灰釉陶器、土師器ごとに分け、文字でまとめて遺物を掲載している。須恵器、灰釉陶器、土師器に墨書が記されている。西部・中央部に比べると出土数は減少する。墨書は「得」や「足」などの 1 文字墨書が大半を占める。

1104 ～ 1114 は須恵器に墨書が記されている。1104 は箱坏の底部に「栗原驛」、「山」が記されている。栗原驛は伊場遺跡群周辺に存在したと推定される駅家で、今までの推定を裏付ける資料となる。1105 は平頂蓋に文字が記されているが判読はできなかった。1106・1107 は有台碗に「太」が記されている。1106 は底部に、1107 は体部と底部にそれぞれ記されている。1108 は有台皿で、底部に「太」が記されている。1109 は糸切碗で底部に「太」が記されている。1112 は有台碗で内面に「足」が記されている。1110 ～ 1114 は箱坏の底部に文字が記されているが明確に判読できない。1111 は欠損により不明瞭であるが「印」の可能性がある。1114 は判読が困難であるが「常」と考えられる。1113 は有台碗の底部に記号が記されている。

1115 ～ 1128 は灰釉陶器に墨書が記されている。1115 ～ 1117 は碗の体部に「得」が記されている。1118 ～ 1122 は碗に「足」が記されている。1118 ～ 1120 は体部に、1121 は体部及び底部に、

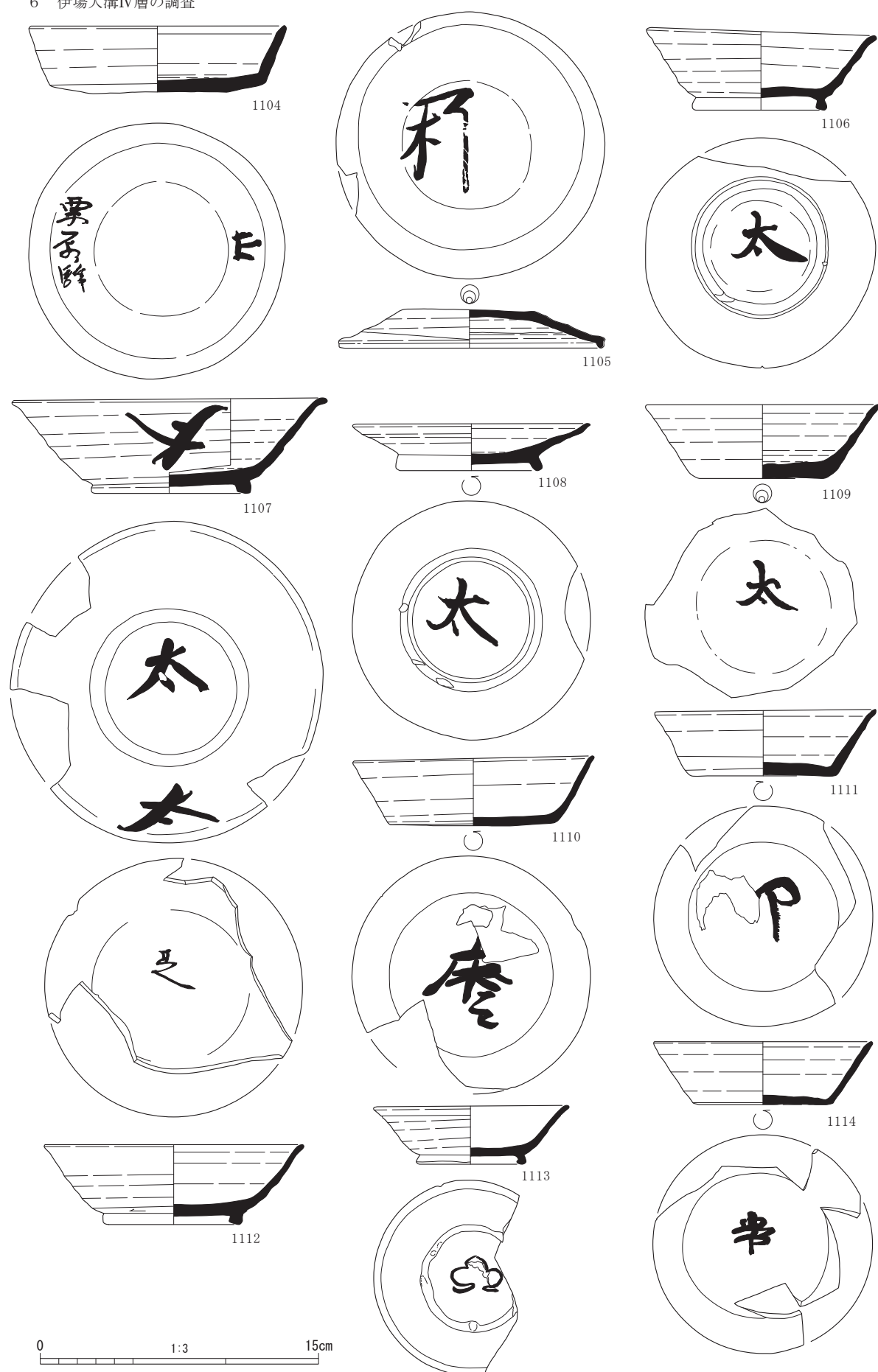


Fig. 253 SX01 東部 出土遺物 (1)

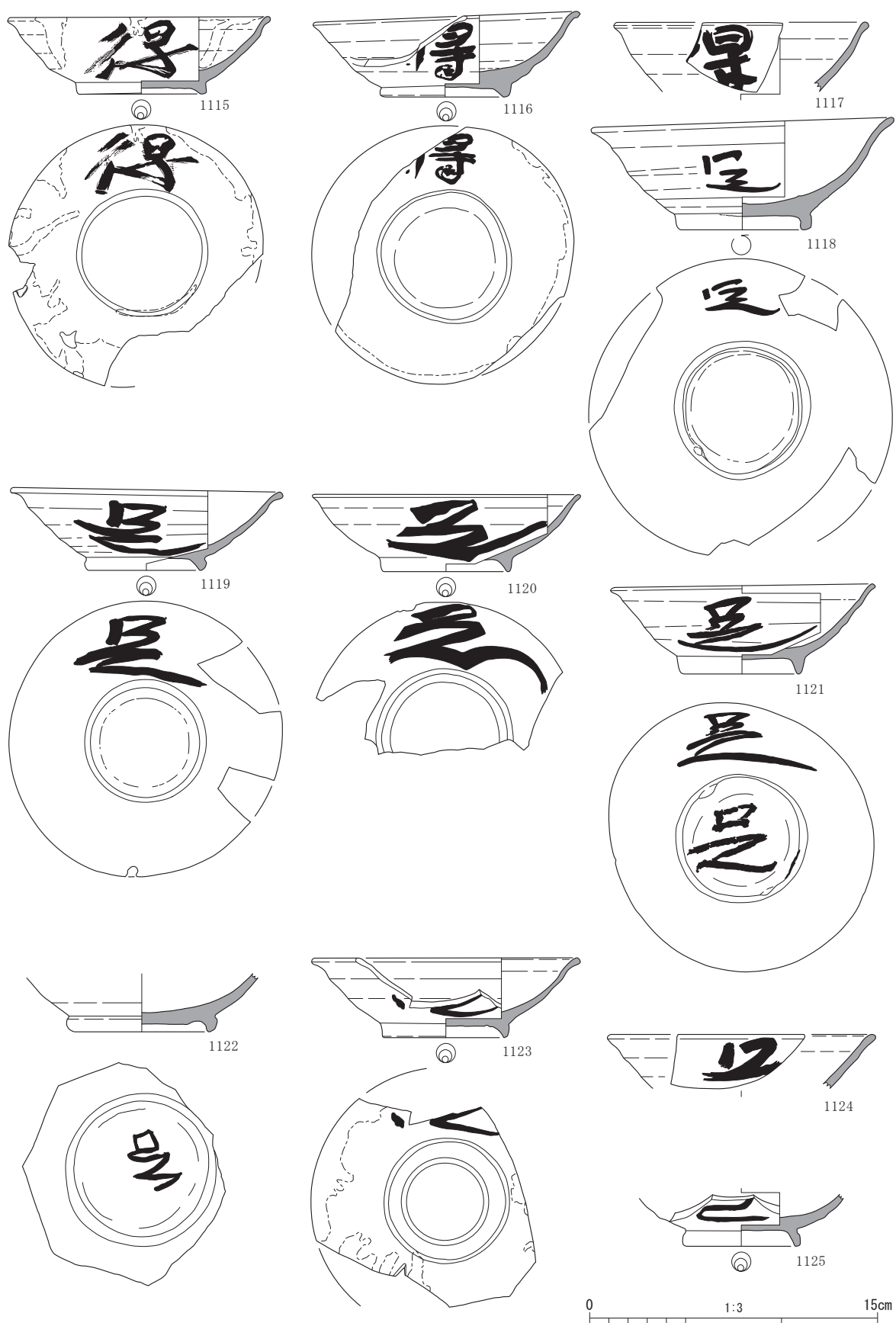


Fig. 254 SX01 東部 出土遺物 (2)

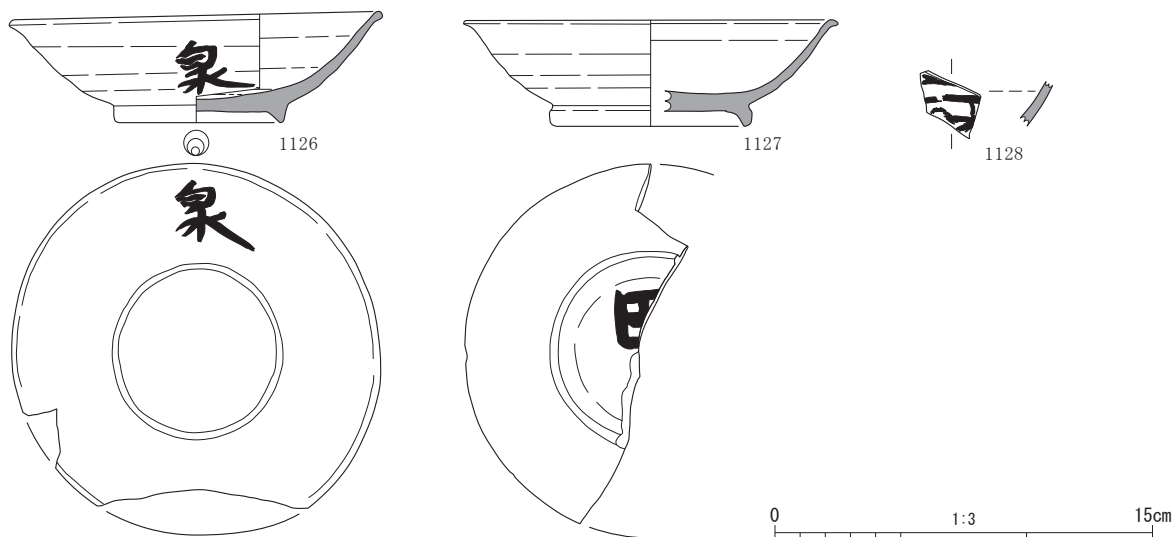


Fig. 255 SX01 東部 出土遺物 (3)

1122 は底部にそれぞれ記されている。1123・1124 は欠損により不明瞭であるが、碗の体部に「足」と考えられる文字が記されている。1125 は欠損により判読は困難であるが「足」の可能性はある。1126 は碗の体部に「泉」が記されている。1127～1128 は欠損により判読できなかった。

1129～1139 は土師器に墨書が記されている。1129 は有台碗の底部に「太」が記されている。1130 は残存する形状から有台皿と考えられる。底部に「太」が記されている。1131～1132 は坏の底部にそれぞれ墨書が記されている。1132 は「富」、1133 は「印」、1134 は「足」と考えられる文字が、1135 は「安」が、1136 は「印」に墨書がそれぞれ記されている。1137～1139 は坏の破片と考えられ、それぞれ文字が記されている。1137 は「足」と考えられる文字が、1138 は「常」、1139 は判読できない。

須恵器 (Fig. 257・258) SX01 東部より出土した 1140～1159 を示す。器種は坏蓋類のほか、壺類、甕が出土している。

1140・1141 は摘蓋である。1141 は摘み部が高い形状であり新手の様相を示す。1142 は平頂蓋である。形状からみると9世紀前半に位置づけられるであろう。1143 は有台碗である。1144～1148 は箱坏である。1147・1148 は糸切痕がみられ、新手の様相を示す。1149～1151 は皿である。1150 は欠損により不明瞭であるが、ヘラ記号が確認される。

1152～1158 は壺類である。1152 は広口壺で、体部に補修痕とみられる痕跡が残る。1153～1156 は長頸壺である。1153 は肩部が張り出し屈曲する形状である。1154 は長頸壺の口縁部である。1155・1156 は口縁部が欠損している。肩部が張り出し屈曲する形状である。1157 は短頸壺である。外面体部にタタキ調整がなされている。1158 は小型の壺である。1159 は甕である。外面体部にはタタキ調整がなされており内面体部に同心円状の当て具痕が確認される。

灰釉陶器 (Fig. 259) SX01 東部より出土した 1160～1175 を示す。器種は、碗、長頸壺が出土している。

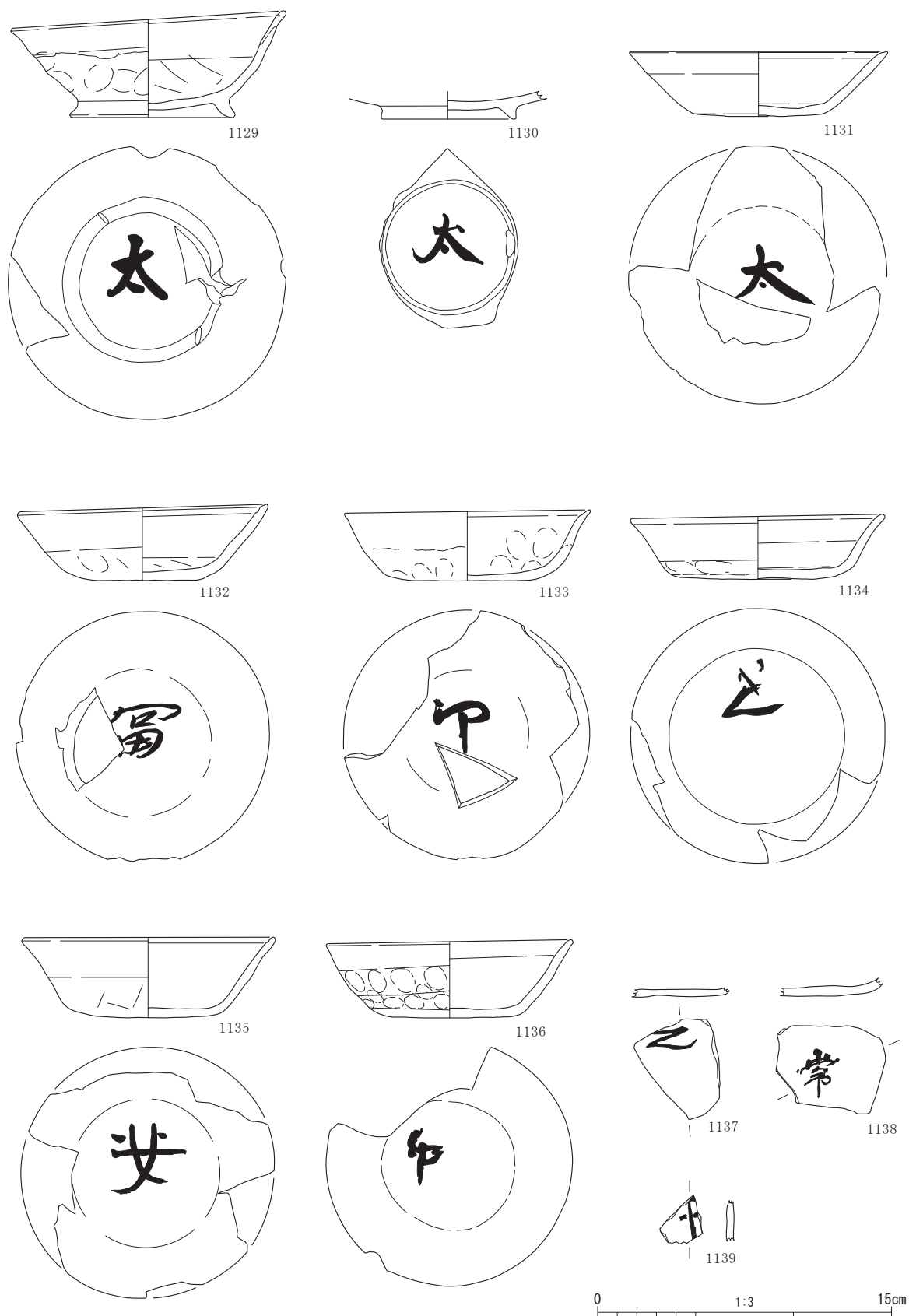


Fig. 256 SX01 東部 出土遺物 (4)

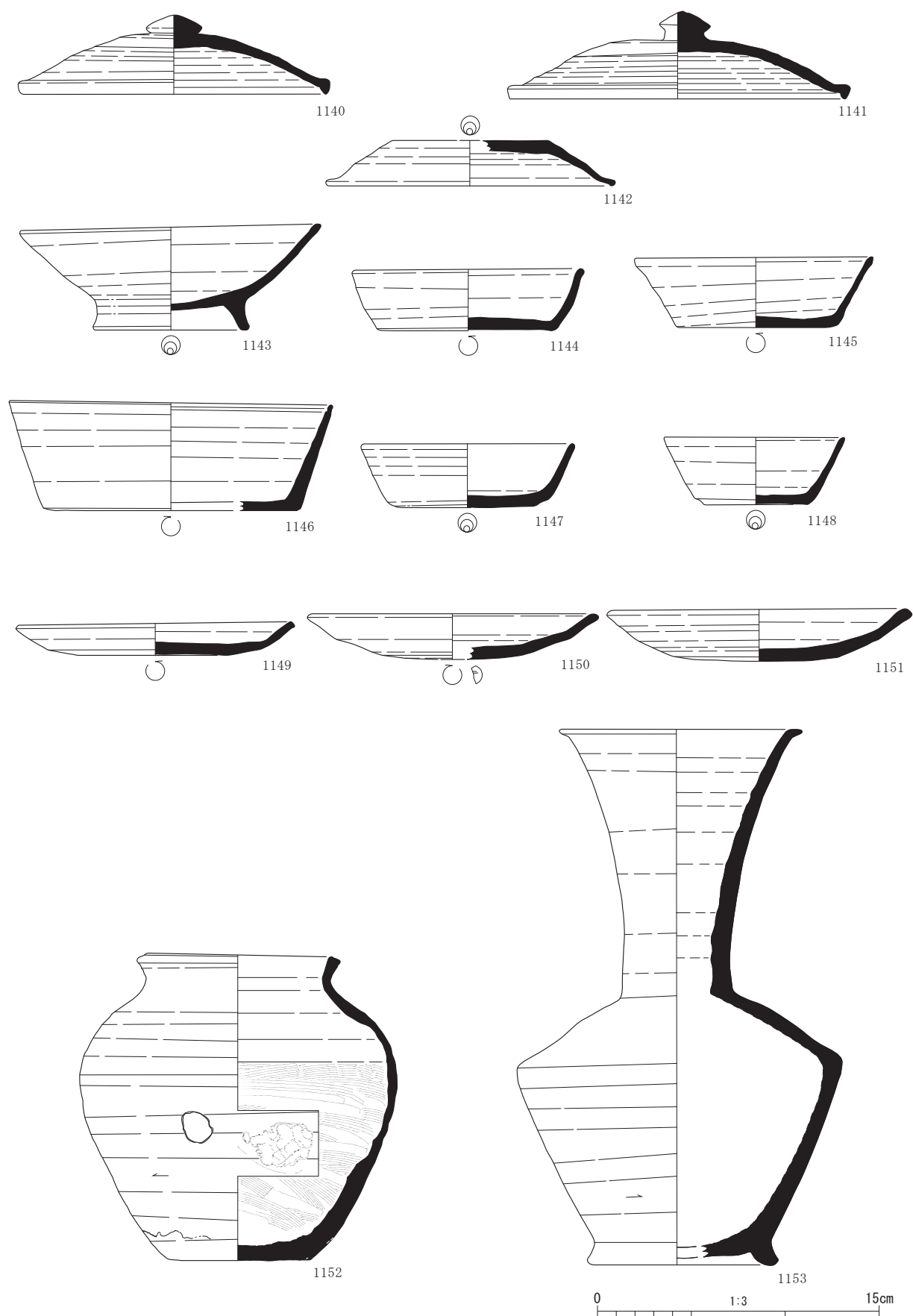


Fig. 257 SX01 東部 出土遺物 (5)

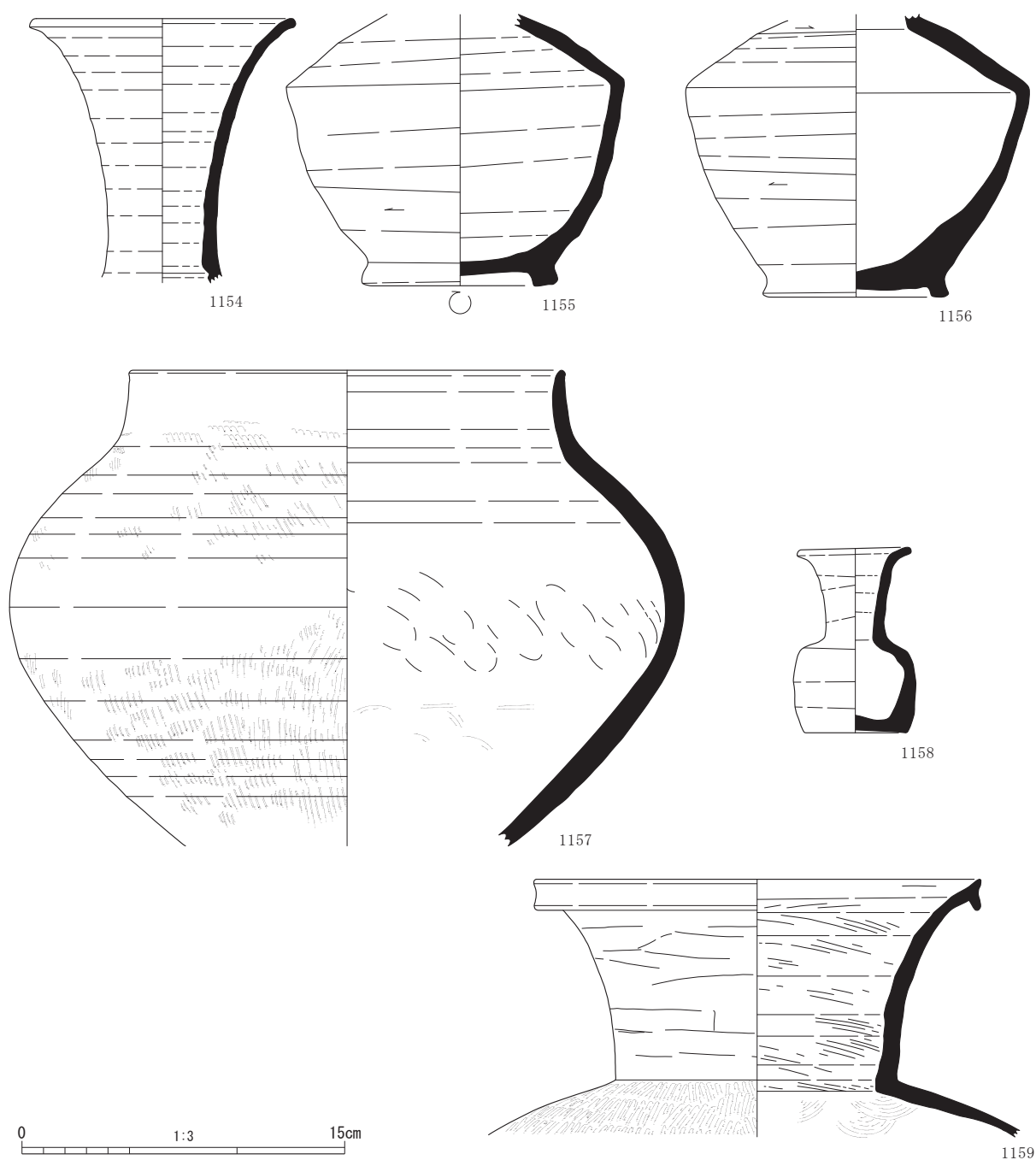


Fig. 258 SX01 東部 出土遺物 (6)

1160～1172は碗である。施釉方法はハケヌリやツケガケが確認される。底部は糸切痕が確認される個体が多い。1173・1174は無台碗で、底部は糸切未調整である。1175は長頸壺である。肩部は丸みを帯びた形状である。

土師器 (Fig. 260) SX01 東部より出土した 1176～1198を示す。器種は、坏蓋、有台皿、坏、壺、甕が出土している。

1176は蓋で外面は赤彩が施される。8世紀後葉～9世紀初頭に位置すると考えられる。1177は有台皿で、体部から口縁部にかけて残存する。内外面ともに赤彩が施される。1178～1191は坏で

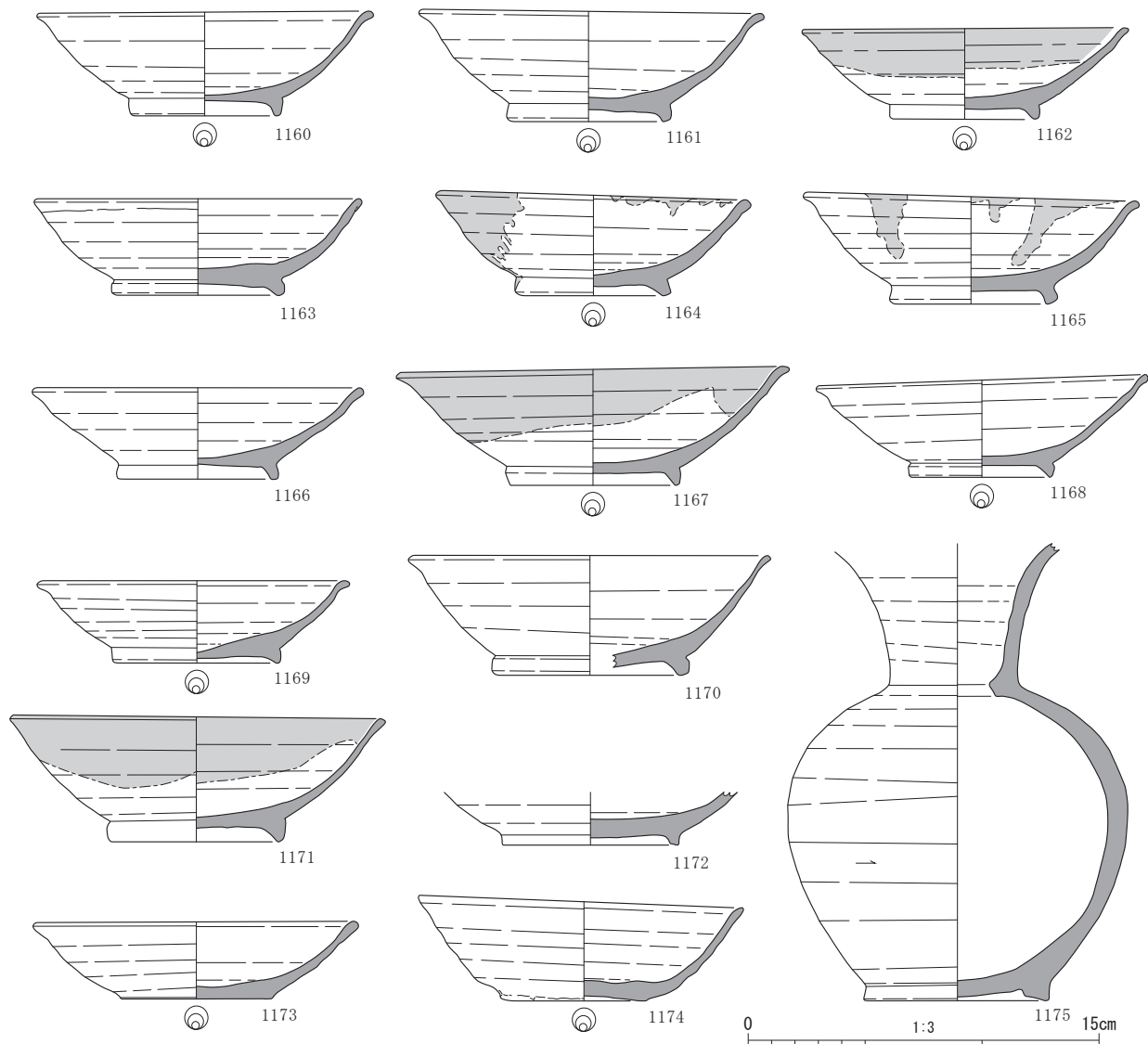


Fig. 259 SX01 東部 出土遺物 (7)

ある。1178 は外面上半と内面全面に赤彩が施される。1179・1180、1183～1186 は内外面ともに赤彩が施される。1182 は外面上部と内面全体に、1187 は内面のみ赤彩が施される。1189 は外面底部および内面底部に不規則な線刻がみられる。

1192 は壺である。形状から古手の様相を示すためV層からの混入品と考えられる。1193～1196 は甕である。1193 は外面体部にハケメ調整が施され、内面は板ナデが確認される。1194・1195 は甕の口縁部である。1196 は体部上半から口縁部が残存しており、鉢形に体部が広がり口縁部が外反する形状である。1197 は口縁部が欠損しているため不明瞭であるが甕形と考えられる。小型の把手付碗可能性もある。1198 は製塩土器である。

土製品 (Fig. 261) SX01 東部からは1点出土している。1199 は土馬の尾と考えられる。

石製品 (Fig. 261) SX01 東部からは3点出土している。1200 は凝灰岩製の砥石で、砥面が2箇所ほど確認される。1201 は粘板岩製の不明石製品である。砥面がみられるため砥石の可能性はある。

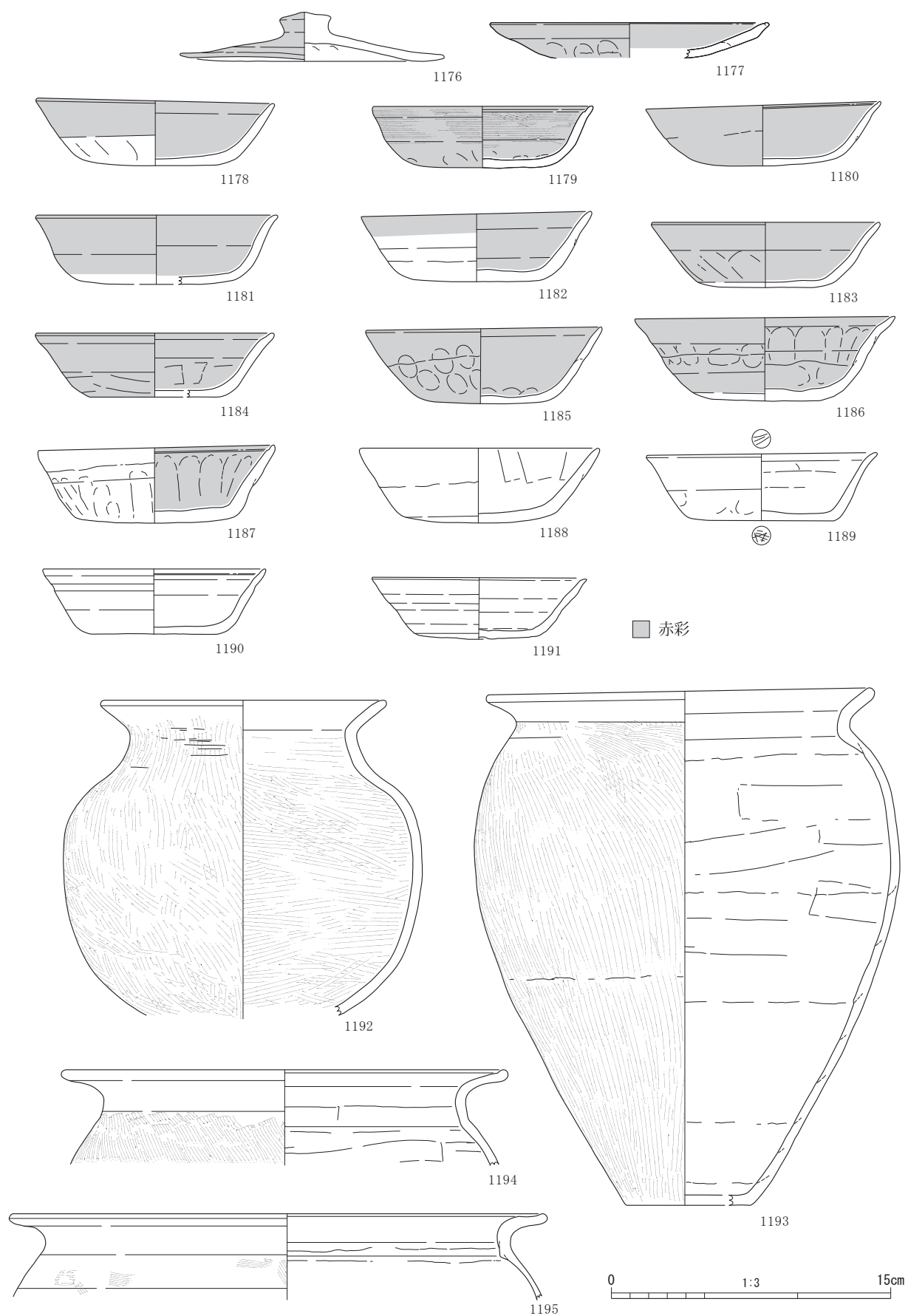


Fig. 260 SX01 東部 出土遺物 (8)

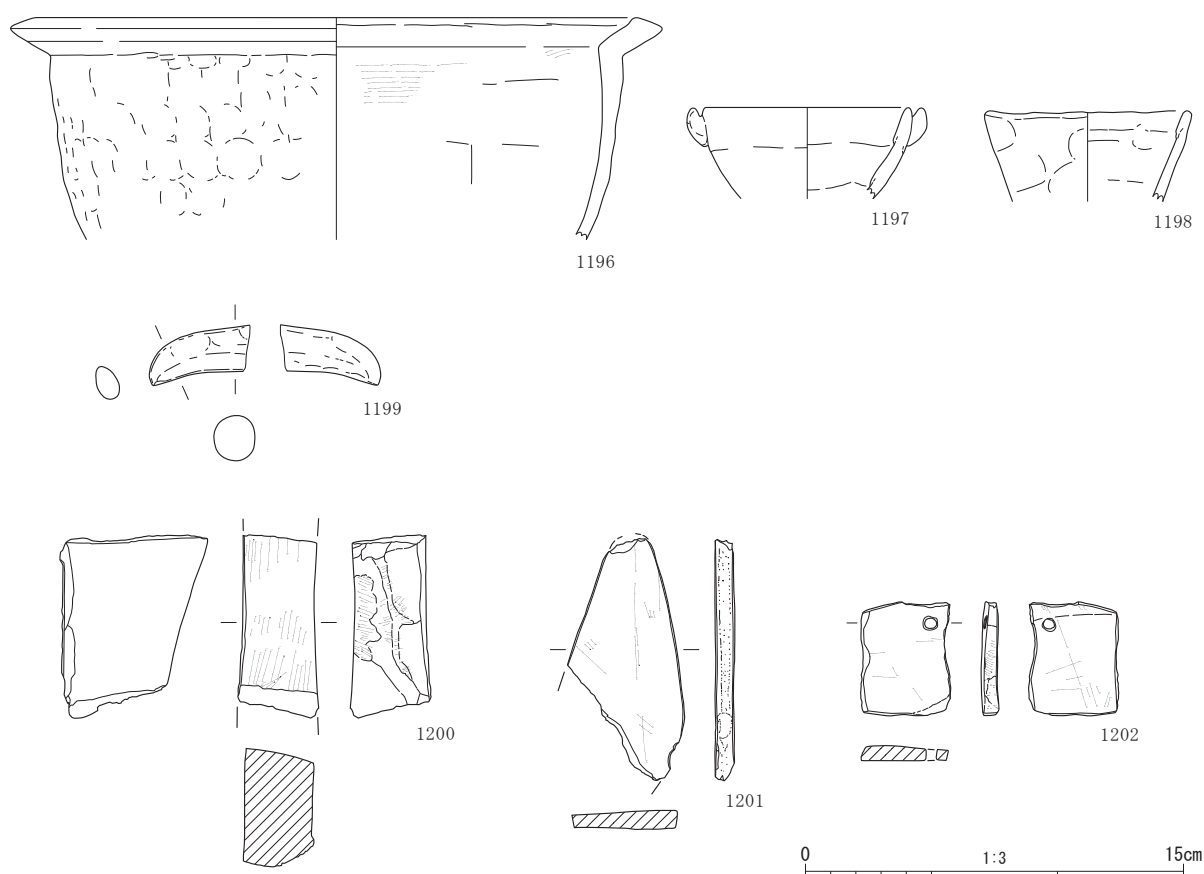


Fig. 261 SX01 東部 出土遺物 (9)

1202 は粘板岩製の有孔砥石である。穿孔が 1 箇所確認される。

木製品 (Fig. 262 ~ 265) SX01 東部より出土した 1203 ~ 1221 を示す。器種は、斎串、舟形、横槌、柄、鋏、曲物、そのほか加工板、加工棒が出土している。

1203・1204 は斎串である。1203 は両側面からの削り出しの痕跡は確認できが削り出された部分は欠損している。1205 は舟形である。内部が方形状にくり抜かれ、上下端部は段差が削り出されている。1206・1207 は横槌である。1207 は身の部分に使用痕と考えられる痕跡が確認される。裏面が全体に渡り欠損しており、炭化している。1208 は斧柄である。1209 は鎌柄である。柄尻にすべり止めである山形の突起が削り出される。柄上部は欠損により不明瞭であるが、鎌刃基部を差し込むためと考えられる孔があったと推定される。上部の残存部では穿孔が確認される。1210 は鋏である。中央部に 2 箇所方形の孔が確認される。1211 は用途不明の有孔加工板である。中央部に斜めの穿孔が確認される。1212 は用途不明の加工板である。天板と推定される部材の一部に二次転用を目的とした切り出し途中の加工が確認される。1213 は有孔加工棒である。上部に穿孔が確認される。1214 は加工棒である。下部がへら状に削り出される。1215 は加工板である。側面に L 字状に加工される。1216 ~ 1219 は曲物である。1216・1217・1219 は曲物の底板である。1219 は二次加工と考えられる穿孔が 3 箇所みられるため転用された可能性がある。1218 は曲物の側板である。1220・1221 は加工棒である。1220 は断面形が方形状に切り出され上部に挟りが確認される。1221 は円形状に加工される。

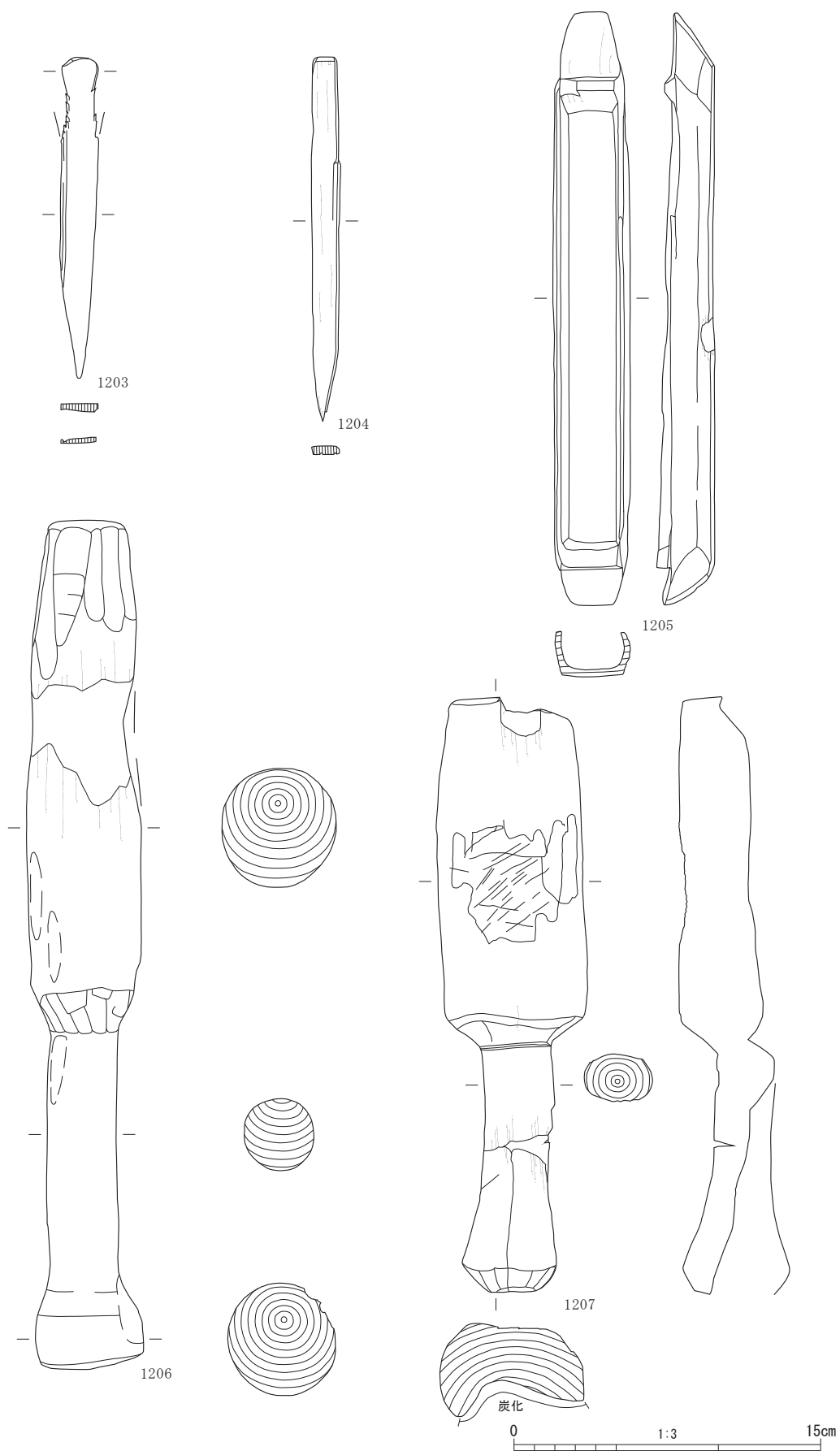


Fig. 262 SX01 東部 出土遺物 (10)

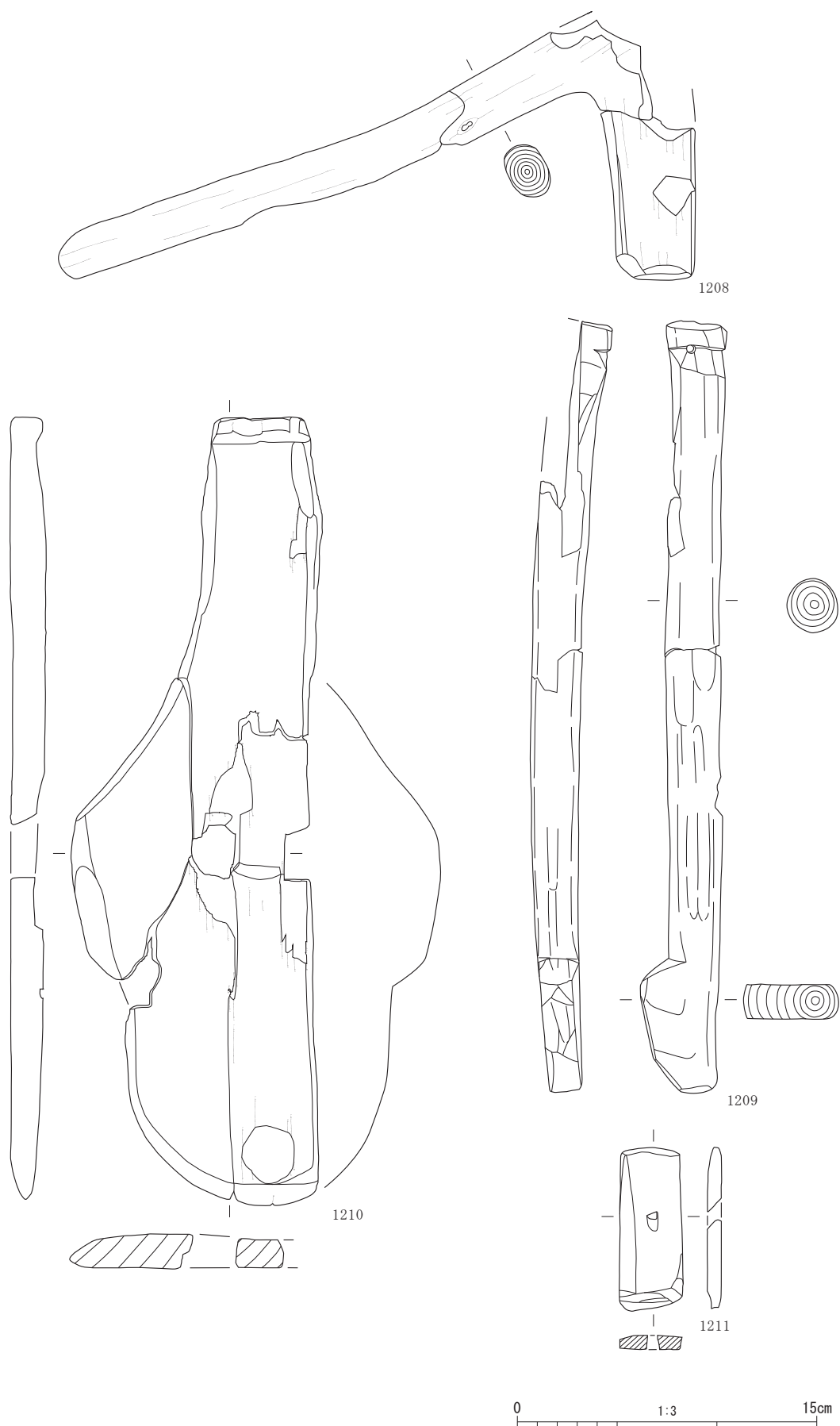


Fig. 263 SX01 東部 出土遺物 (11)

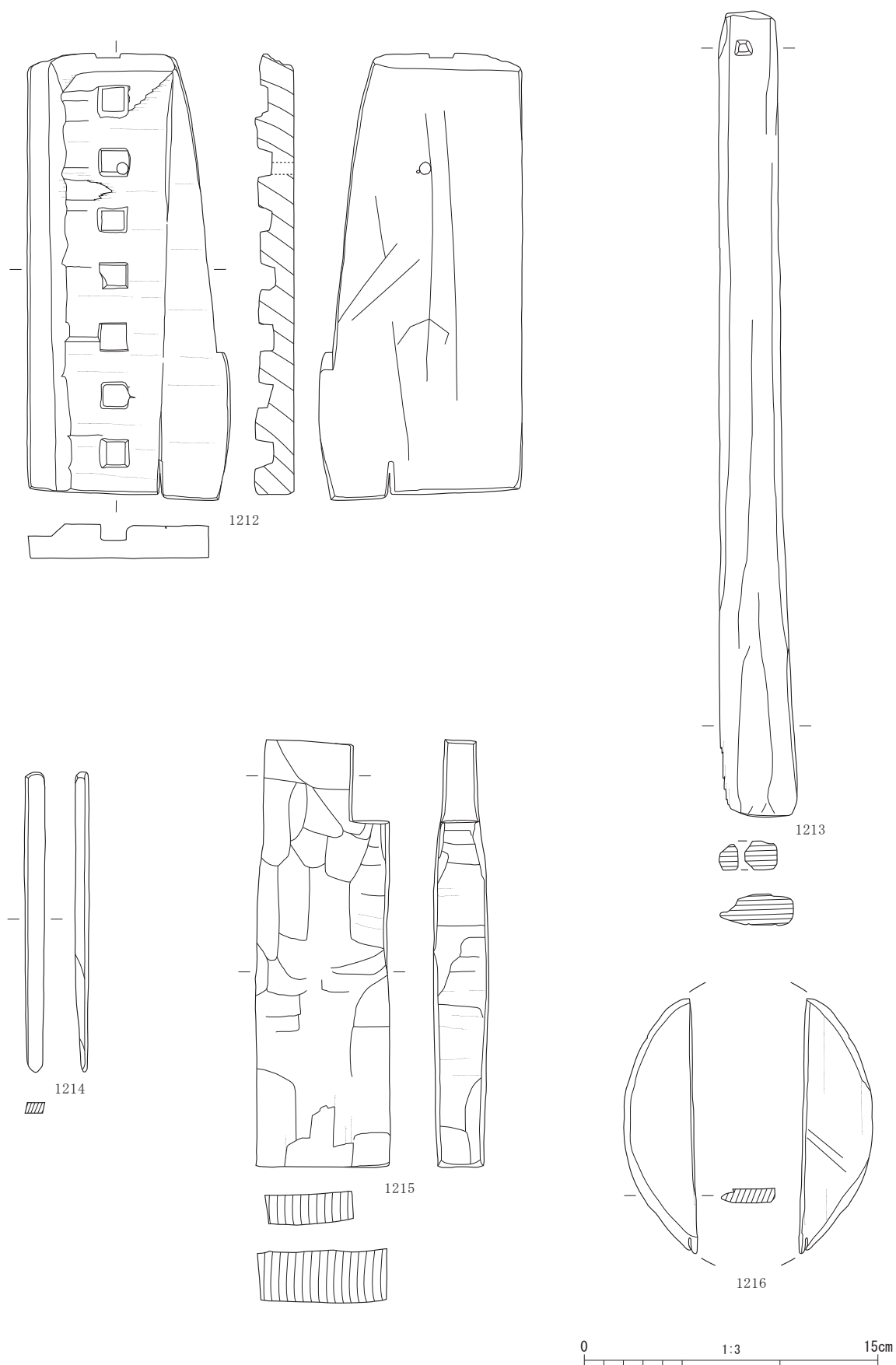


Fig. 264 SX01 東部 出土遺物 (12)

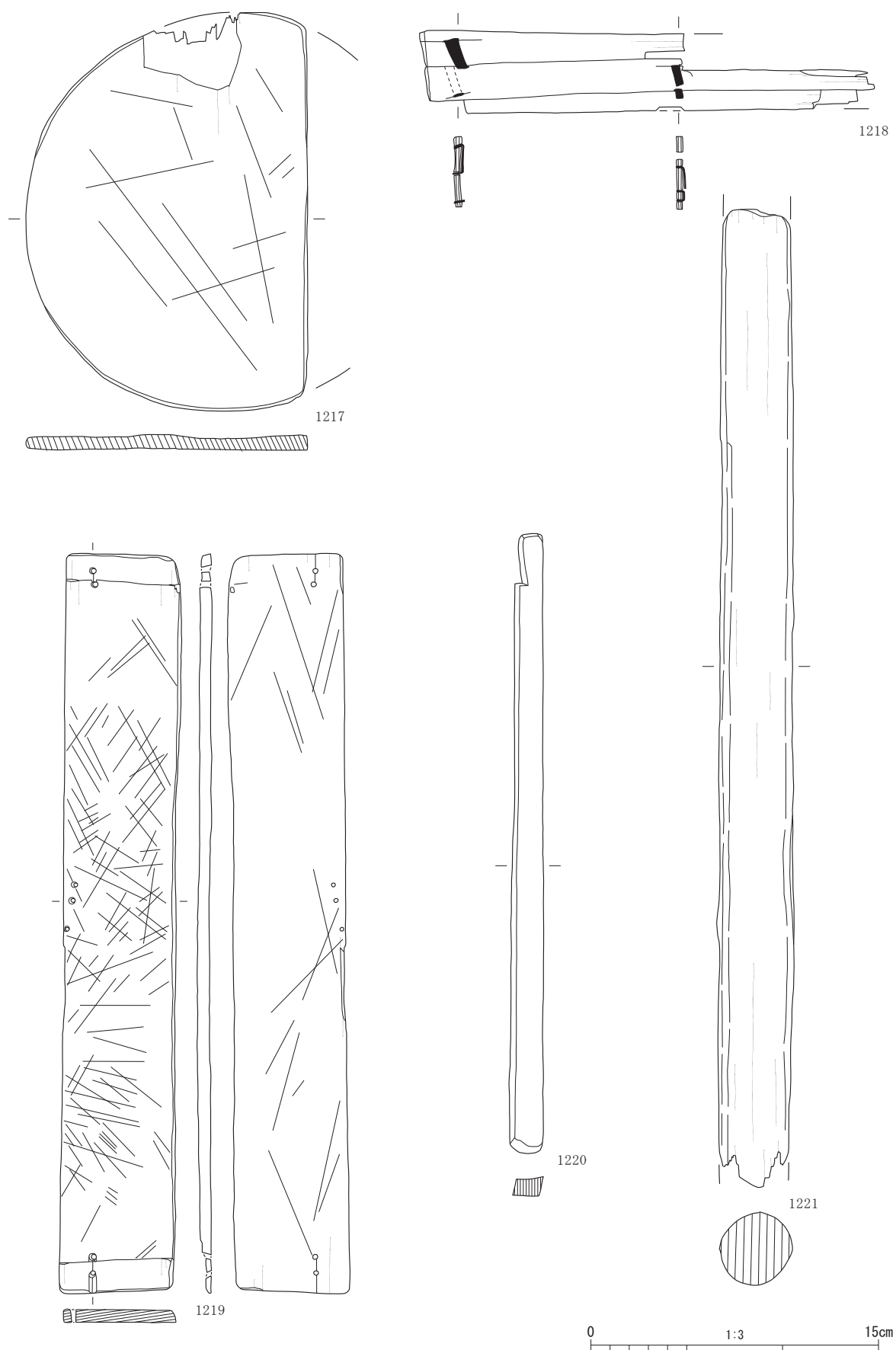


Fig. 265 SX01 東部 出土遺物 (13)

(5) 杭列状遺構

SX02 (Fig. 266) 調査区北西の大溝に直交する位置で杭列を検出した。また、杭列の下流に構造物と推定される丸木材が検出される。杭列は杭のサイズが不均一で根入れが浅い杭が多いこと、杭が不規則に打ち込まれていることから栈橋などの上部構造を持つ構造物の可能性は低い。ただし、北岸から南岸に至る約 11.4 m に渡り杭が打ち込まれており、大溝の下流に影響を及ぼすほどの構造物であることがうかがえる。

SX01 とほぼ同じ位置で検出されており、SX01 で出土している遺物が杭列を境に上流では密度が高く、下流では低くなる。SX01 で前述したとおり、東部では遺物の量が減少することからも裏付けられる。これらのことから杭列上流部を中心に遺物の投棄が行われていたことが推定される。

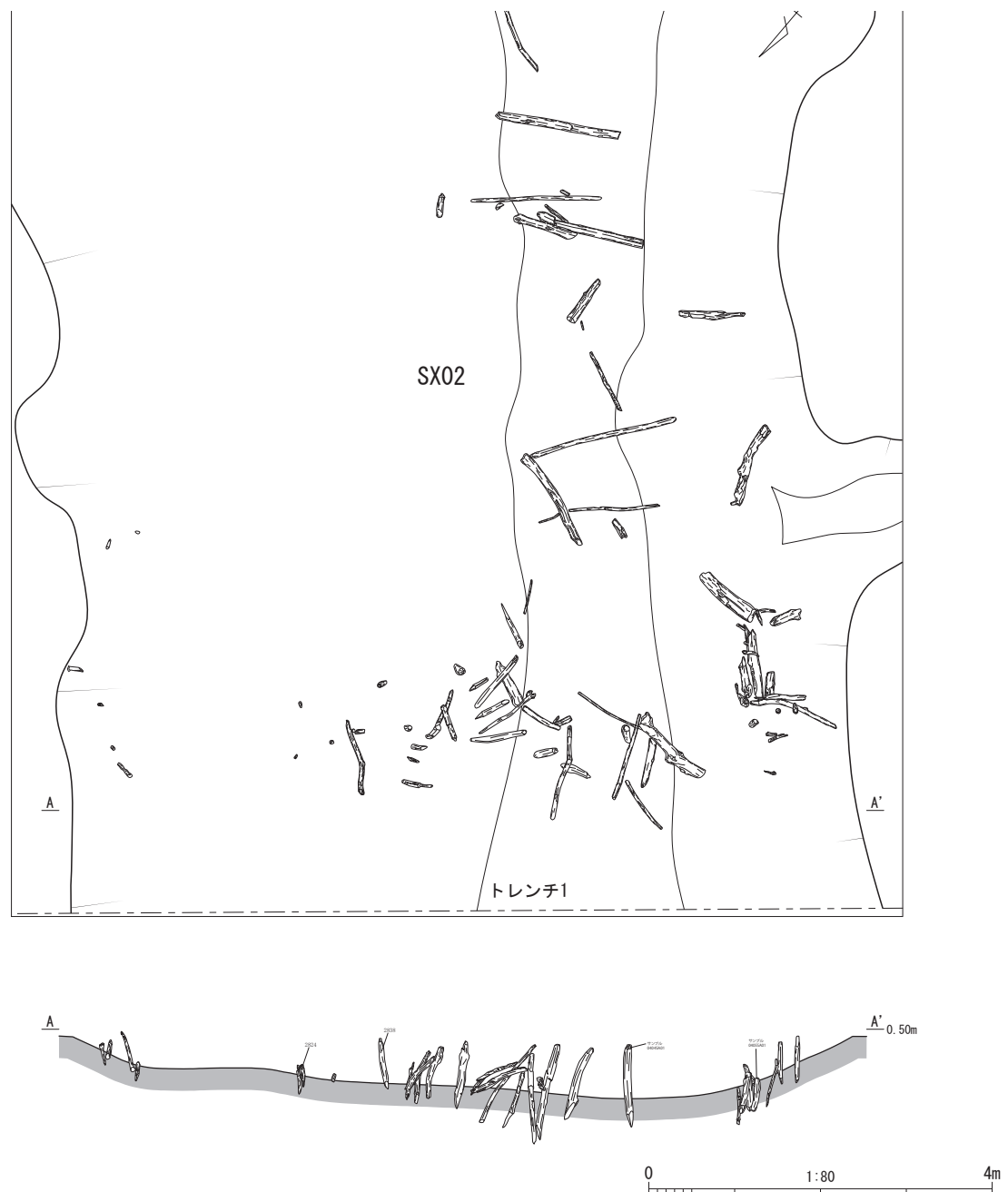


Fig. 266 SX02 実測図

(6) 貝塚

SS01 (Fig. 267 ~ 269) 調査区南東部、大溝最南端の南岸に位置する。長さ 5.20 m、幅 2.18 m で南岸から大溝底部にかけて不整な楕円形で広がる。貝層の厚さは約 39cm である。

遺物は、墨書土器、須恵器、土師器、土製品、木製品が出土している。IV層で検出された SX01 やほかの貝塚では灰釉陶器が多数出土しているのに対して、SS01 では出土しておらず、ほかの遺構とは一線を画す。また、「川辺古刀自女」と人名と考えられる墨書土器などがまとまって出土する。貝塚の形成時期は灰釉陶器が出土しないことと須恵器の形態から 8 世紀後葉と考えられ、ほかの貝塚よりも形成時期が古いと推定される。

1222 ~ 1229 は須恵器に墨書が記されている。1222 ~ 1224 は摘蓋である。1222・1223 は「川辺古刀自女」が記されている。1224 は摘部が高い形状で新手の様相を示す。内部に「竹田人万呂」が記されている。1225 は無台碗の体部に「富」と考えられる文字が記されている。1226・1227 は箱坏で、1226 は底部に×の記号と考えられる墨書が記されている。1227 は底部に墨書が記されているが判読できない。1228 は無台碗の底部に「子足人」が記されている。1229 は皿の底部に朱墨で「大」が記されている。1230 ~ 1240 は須恵器である。1230・1231 は摘蓋である。1232 ~ 1234 は箱坏である。1235 は高盤で脚部が欠損している。1236 ~ 1238 は無台碗である。1239 は糸切碗である。1240 は壺で体部上半から口縁部が欠損している。

1241・1242 は土師器である。1830・1829 は皿で内外面ともに赤彩が施される。1243 は陶質の土馬の脚部と考えられる。

1244 は木製品で舟形である。上下部に V 字状の袢りが確認される。

SS02 (Fig. 267・271) 調査区南東部、大溝南岸寄りに位置する。長さ 3.37 m、幅 2.36 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 19cm である。V層中で検出された SS08 は SS02 の直下に位置する。

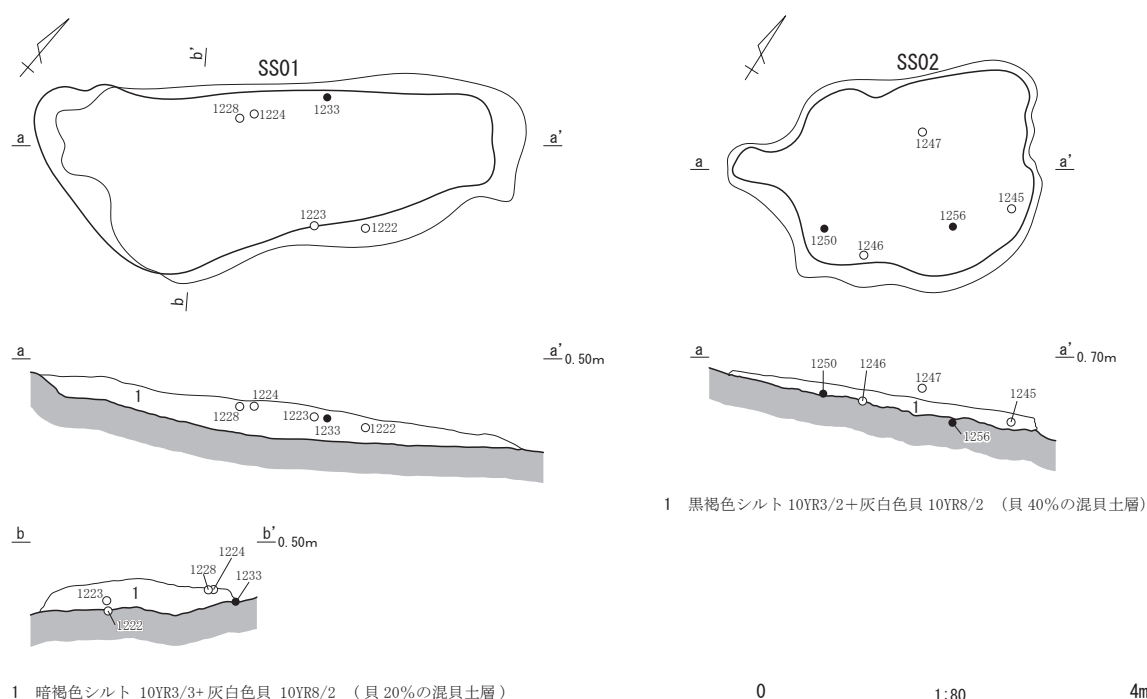


Fig. 267 SS01・SS02 実測図

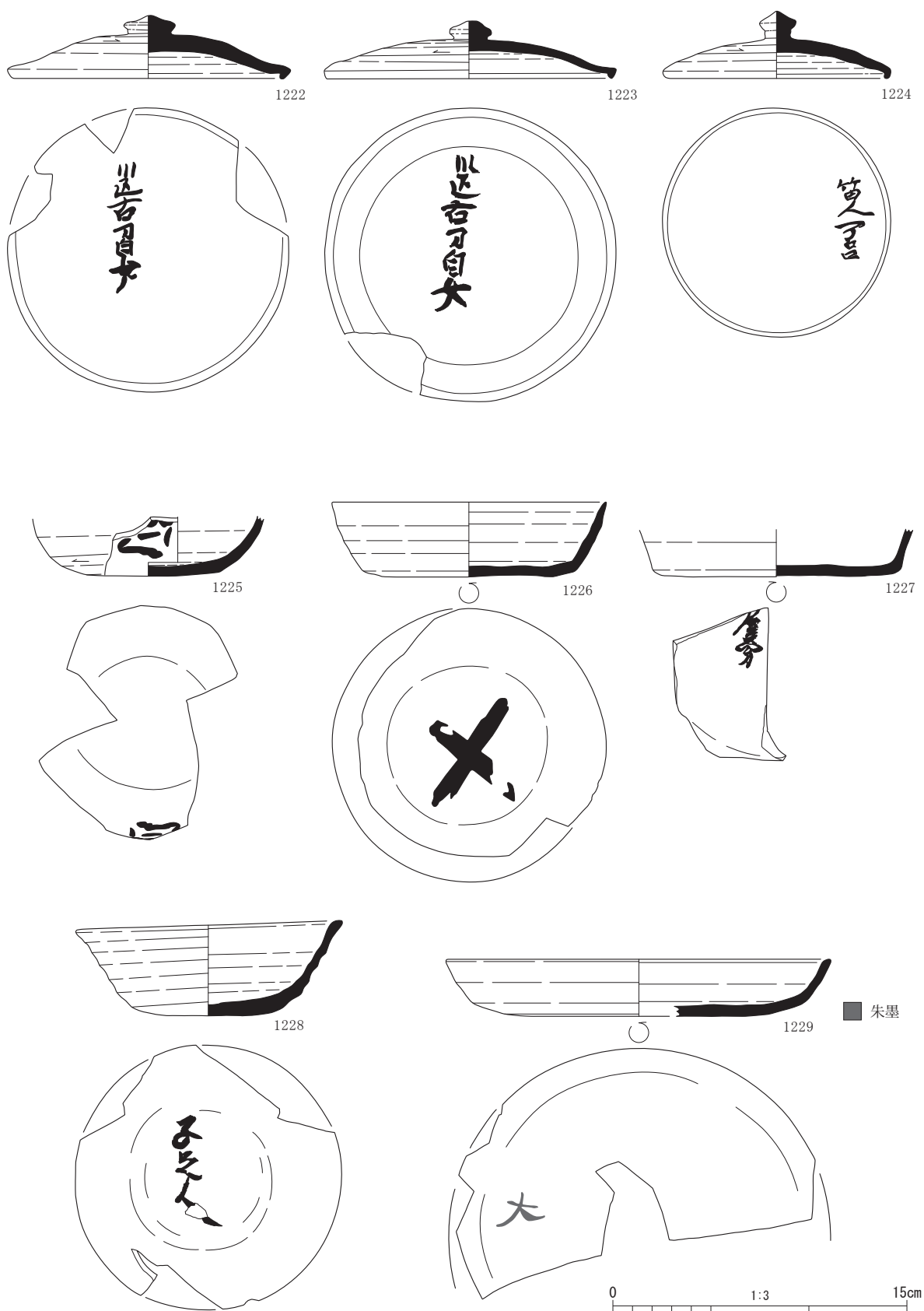


Fig. 268 SS01 出土遺物 (1)

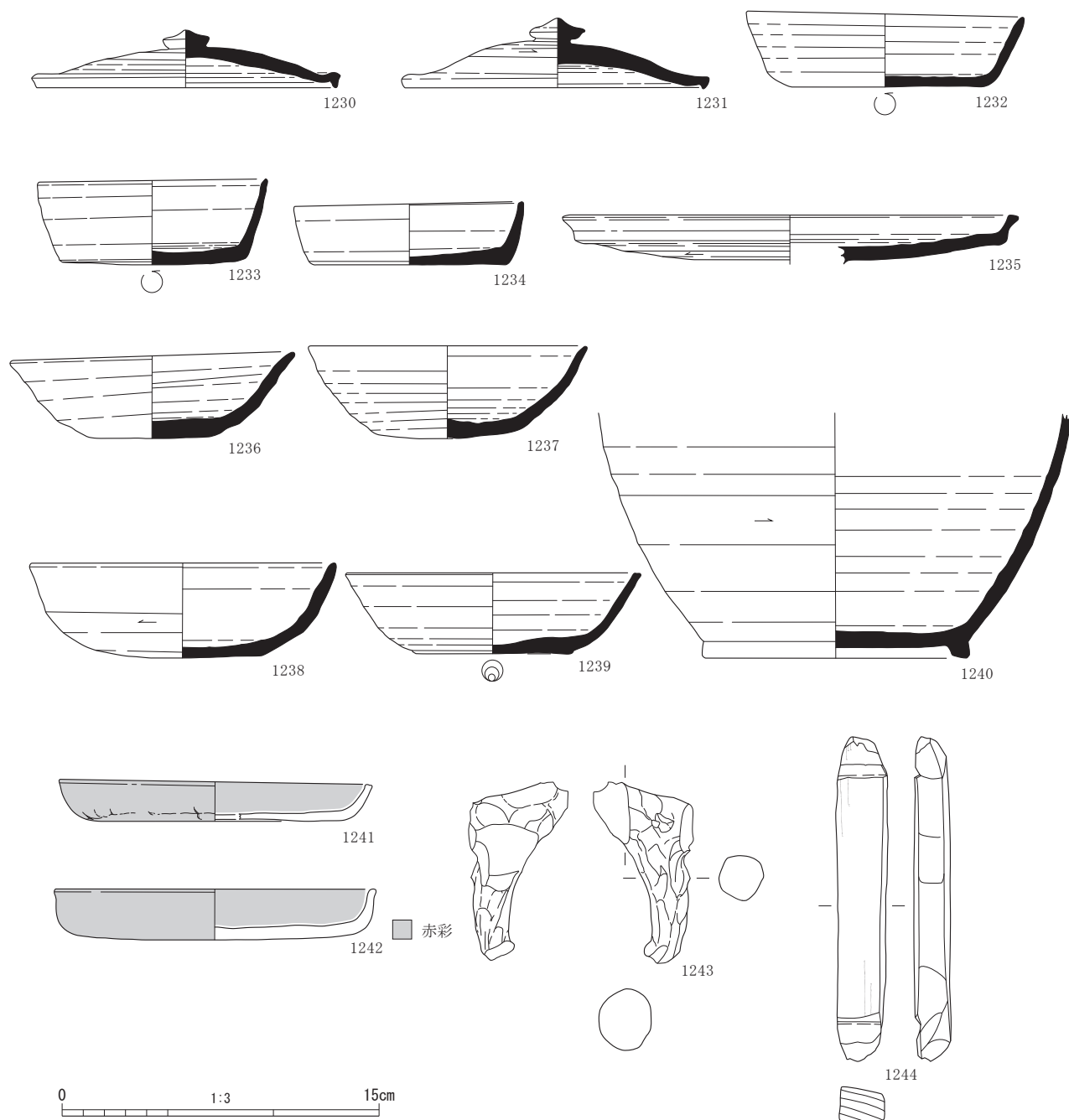


Fig. 269 SS01 出土遺物 (2)

遺物は墨書土器、須恵器、灰釉陶器、土師器、金属製品、木製品が出土している。

1245 ～ 1248 は墨書土器を示す。灰釉陶器のほか、土師器に墨書が記されている。1245・1246 は灰釉陶器の碗に墨書が記されている。1245 は底部に「足」が、1246 は体部に 2 文字記されているが判読できない。1247 は灰釉陶器の皿の底部に「足」が記されている。1248 は土師器の坏で、底部に「加」が記されている。

1249・1250 は須恵器である。1249 は有台坏身、1784 は無台碗である。

1251 ～ 1255 は灰釉陶器の碗である。底部に糸切痕、ヘラケズリの痕跡がみられる。すべて無釉

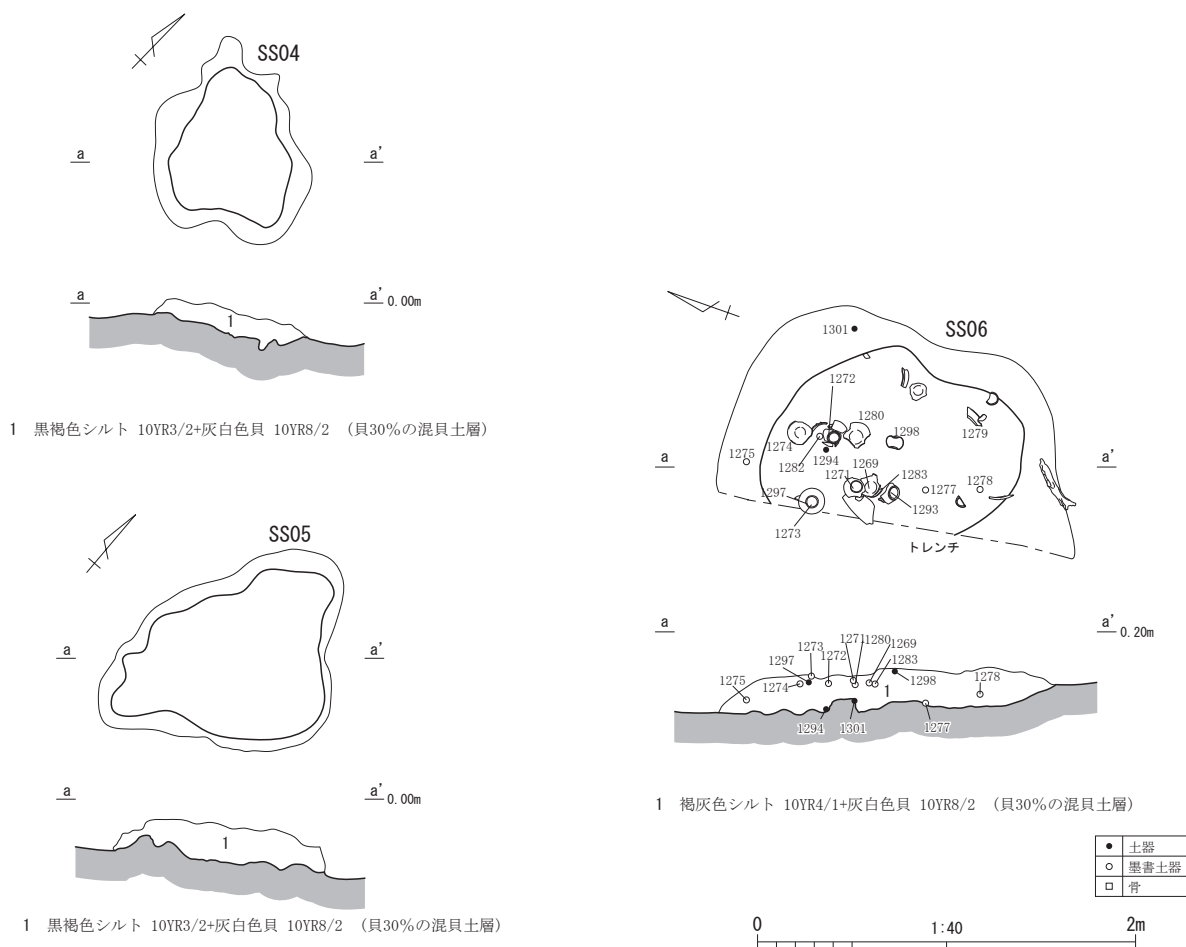


Fig. 270 SS04・SS05・SS06 実測図

である。1256 は土師器の坏である。1257 は鉄製の和釘である。木製品は 2 点出土しており、1258・1259 とともに加工板である。

SS04 (Fig. 270・271) 調査区北西部の SX01 内で検出した貝塚である。長さ 1.10 m、幅 8.31 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 12cm である。隣接して SS05 が位置する。遺物は、灰釉陶器、製塩土器が出土している。

1260 ～ 1262 は灰釉陶器の碗である。1262 は墨書が記されているが欠損により判読はできない。1263 は製塩土器で口縁端部が内側に屈曲する形状である。

SS05 (Fig. 270・272) 調査区北西部の SX01 内で検出した貝塚である。長さ 1.39 m、幅 1.03 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 20cm である。隣接して SS04 が位置する。遺物は墨書土器、灰釉陶器が出土している。木製品は 1267 の加工棒が出土している。

1264 ～ 1266 は灰釉陶器の碗である。1264 は体部の 2 箇所に墨書が記されている。「足」のほか 2 文字が記されており、「万」のみ判読できる。1265 は無釉であるが、1266 の施釉方法はツケガケである。

SS06 (Fig. 270・273・274) 調査区北西部、大溝北西検出した貝塚である。長さ 1.94 m、幅 1.10 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 21cm である。SX01 で最も遺物の密度が高い位置で検出されているため、SS06 から多数の遺物が出土している。特に墨書土器を多数含む。遺物は墨書土器、灰釉陶器、土師器、木製品が出土している。

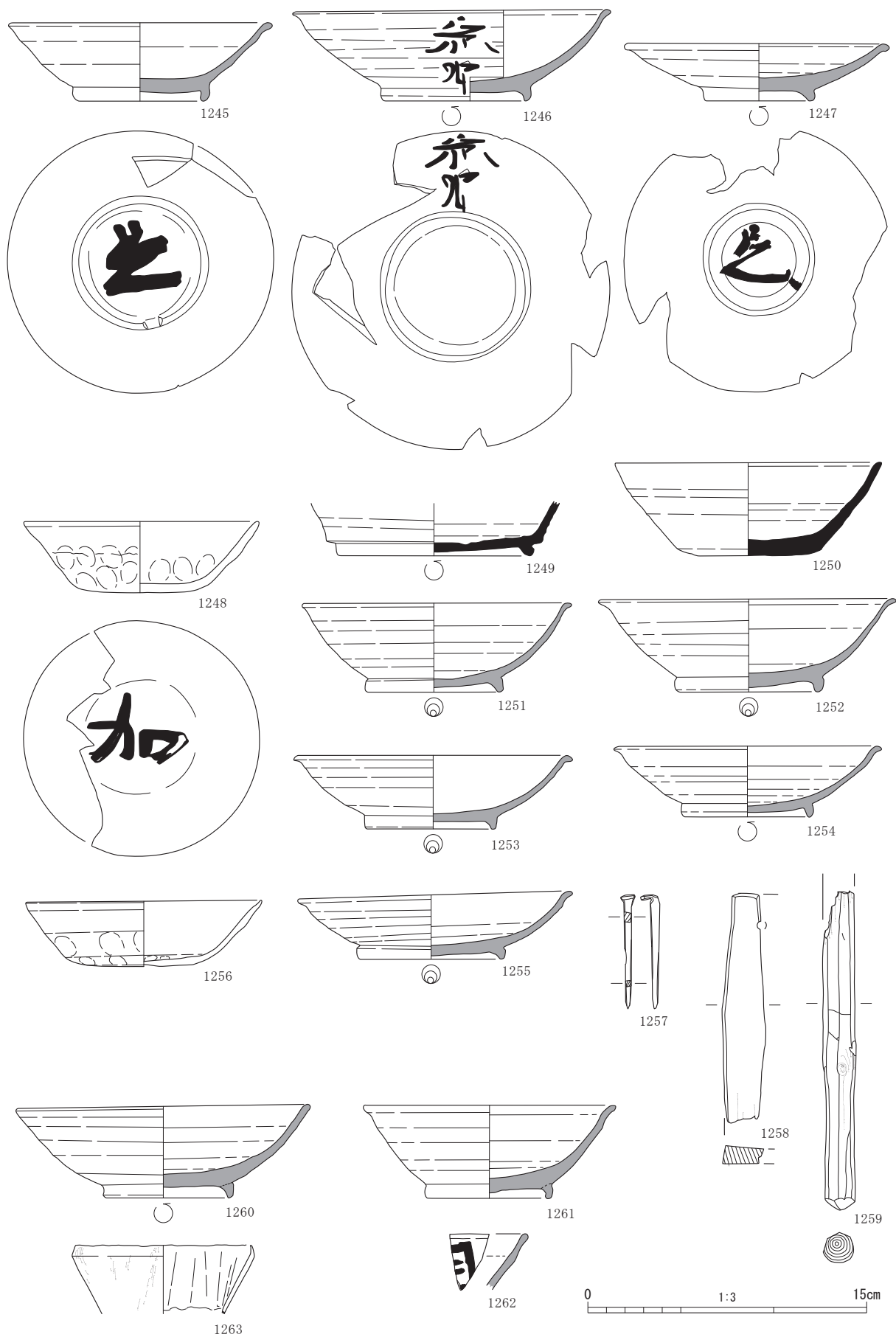


Fig. 271 SS02・SS04 出土遺物

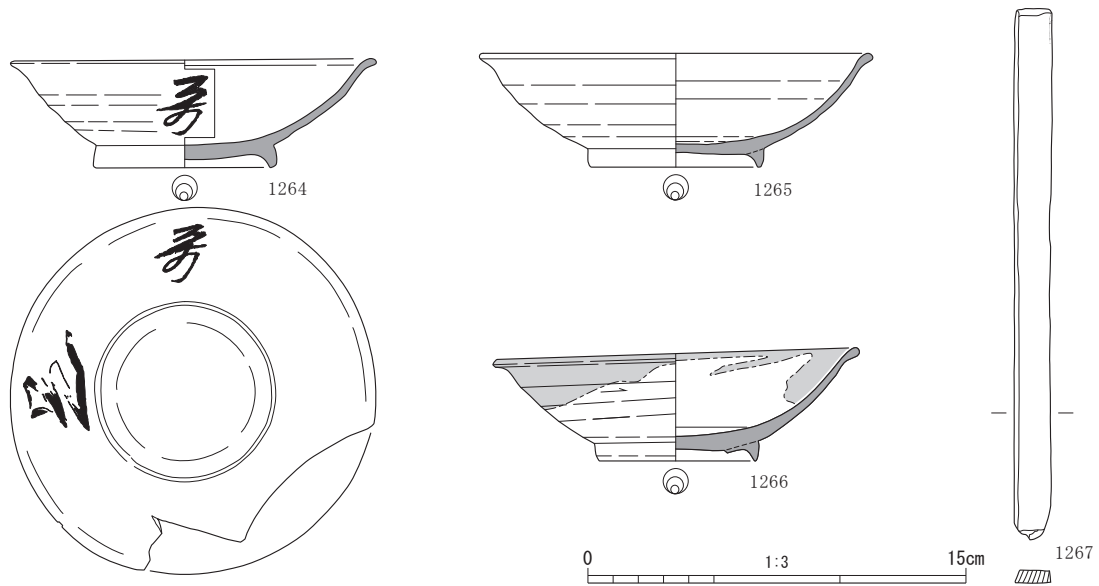


Fig. 272 SS05 出土遺物

1268～1290は灰釉陶器に墨書が記されている。1268は輪花碗の体部に「得上」が記されている。1269は碗の体部に「得上」が記されている。1270～1274は碗の体部に「得」が記されている。1271は体部に2箇所「得」が確認される。1275・1276は碗に「西」が記されている。1276は体部及び底部に「西」が記されている。1277は碗の体部に「仁」が、1278は碗の体部に「平」がそれぞれ記されている。1279は碗の体部に「卒」が記されている。1280は碗の体部及び底部に「六万」が、1281は体部に「加万」がそれぞれ記されている。1282は碗の体部に、3箇所朱墨で文字が記されているが判読できない。1283～1290は墨書が確認されるが、欠損により文字の判読が困難である。1287は欠損により不明瞭であるが「足」である。

1291～1302は灰釉陶器を示す。1291～1297は碗である。無釉、底部糸切りが多い傾向である。1298・1299は耳皿である。1298は無台の耳皿である。1302は甕である。底部が平底で体部外面にタタキ調整がなされる。内面には同心円状の当て具痕が確認される。

1303～1308は土師器である。1303～1307は甕である。1306・1307は体部が張り出さない形状である。1308は製塩土器の脚部である。木製品は1309が出土しており、楕円形の形状の加工板である。

(7) 枝溝

SD311 (Fig. 276～277) 調査区北西の大溝南岸に接続する。長さ10.66 m、幅2.25 m、深さ0.3 m。堆積土は、2～3層、褐灰色～黒褐色に灰色系のブロックを含む。断面では、V層で検出されたSD313を切る検出状況を示す。

遺物は、墨書土器、灰釉陶器、土師器、製塩土器、木製品が出土している。SX01に隣接しているためか多数の墨書土器が出土している。

1310～1327は灰釉陶器に墨書が記されている。1310～1314は碗に「足」が記されている。1312は欠損により不明瞭であるが「足」と考えられる。1315は碗の外面底部と内面に墨書が記されている。内面は「寺」と記されているが、外面底部の文字は判読できなかった。SX01で出土し

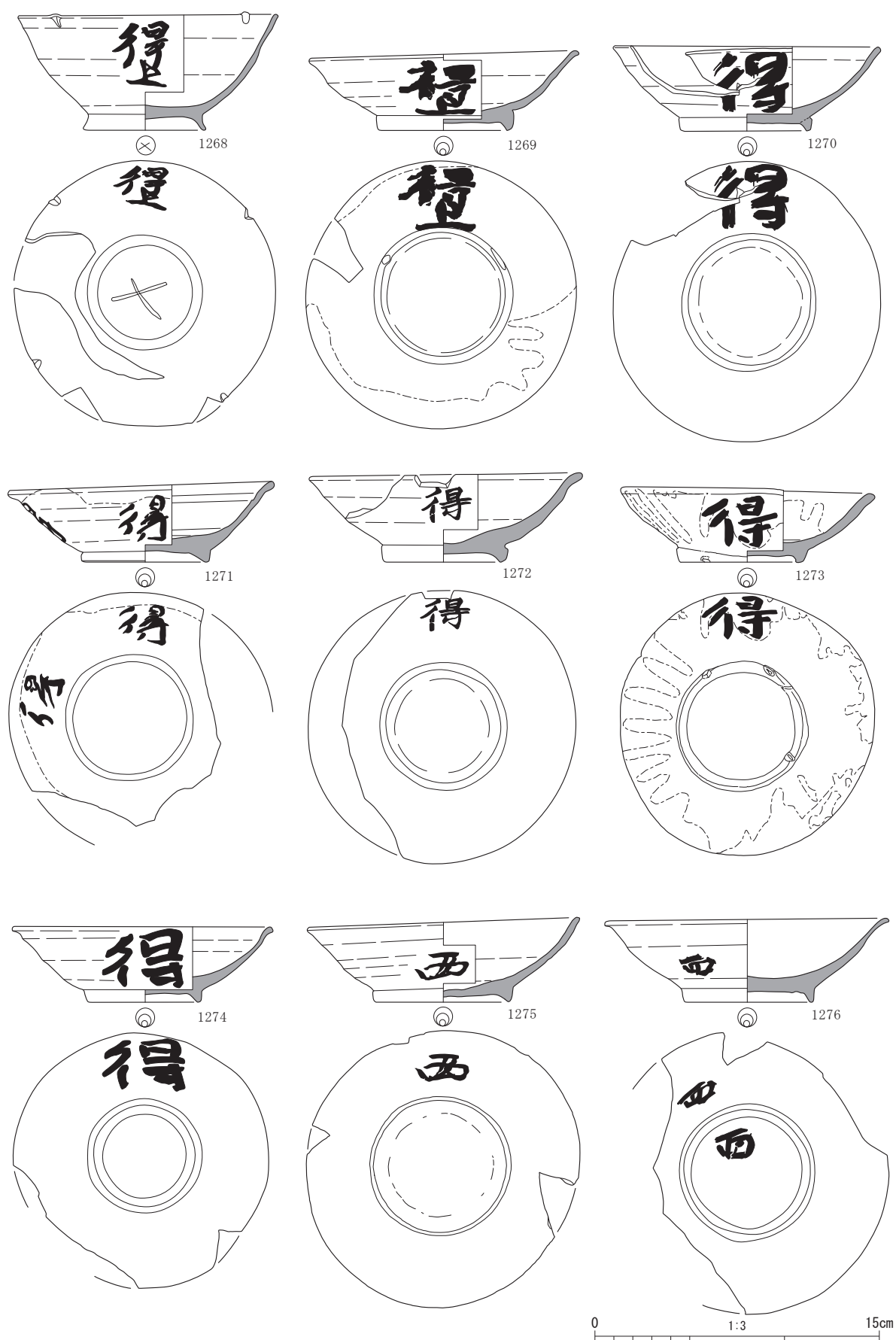


Fig. 273 SS06 出土遺物 (1)

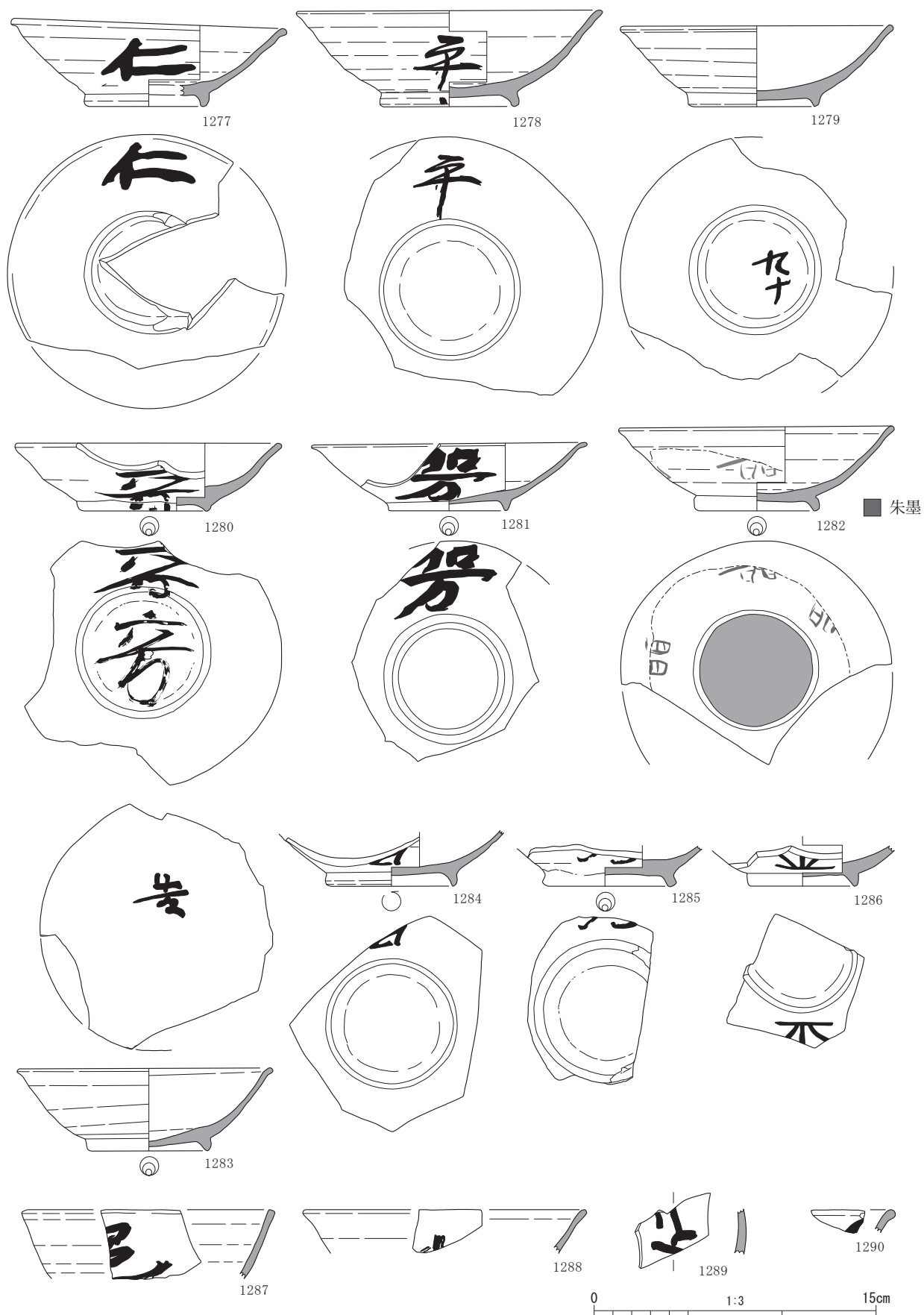


Fig. 274 SS06 出土遺物 (2)

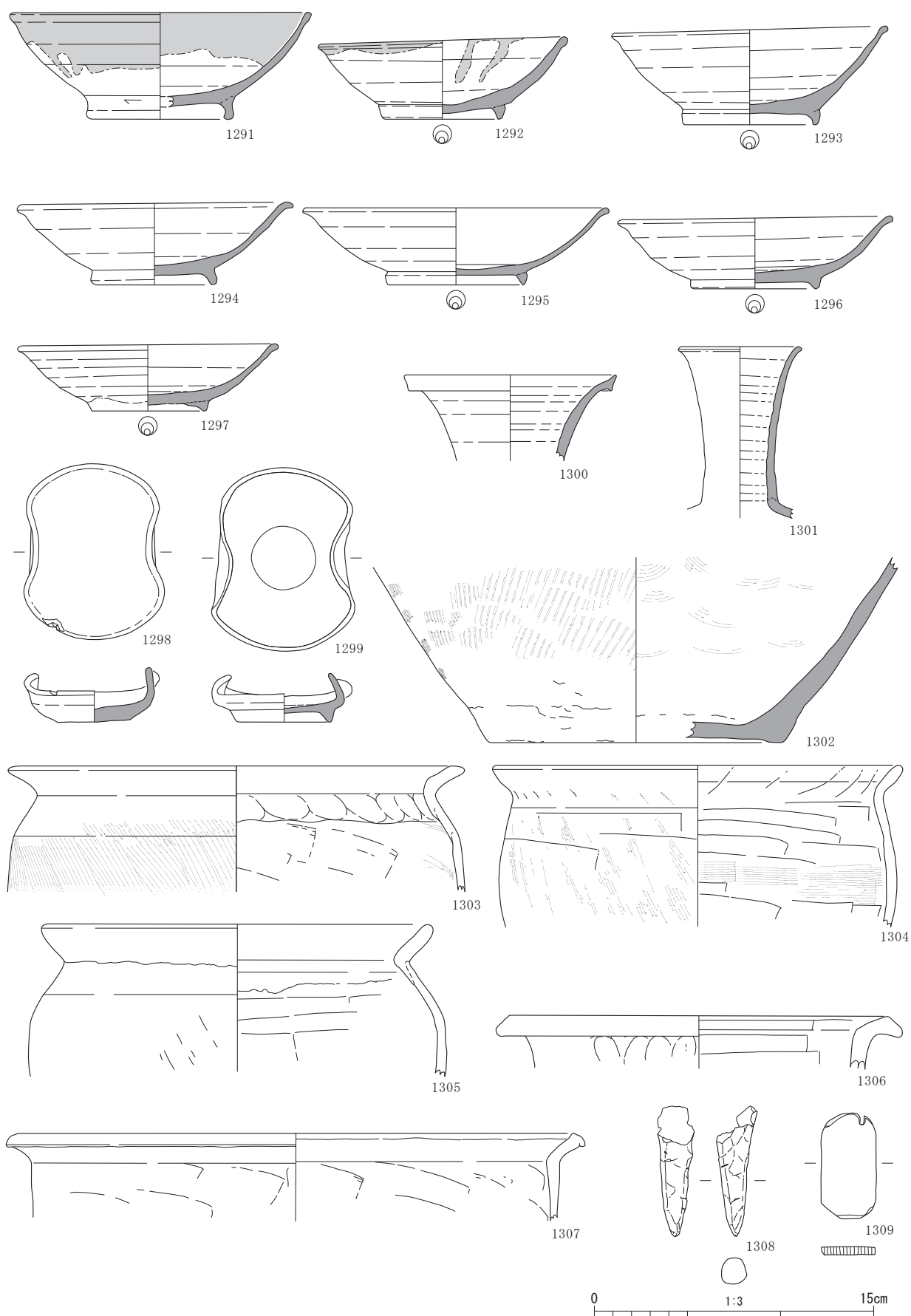


Fig. 275 SS06 出土遺物 (3)

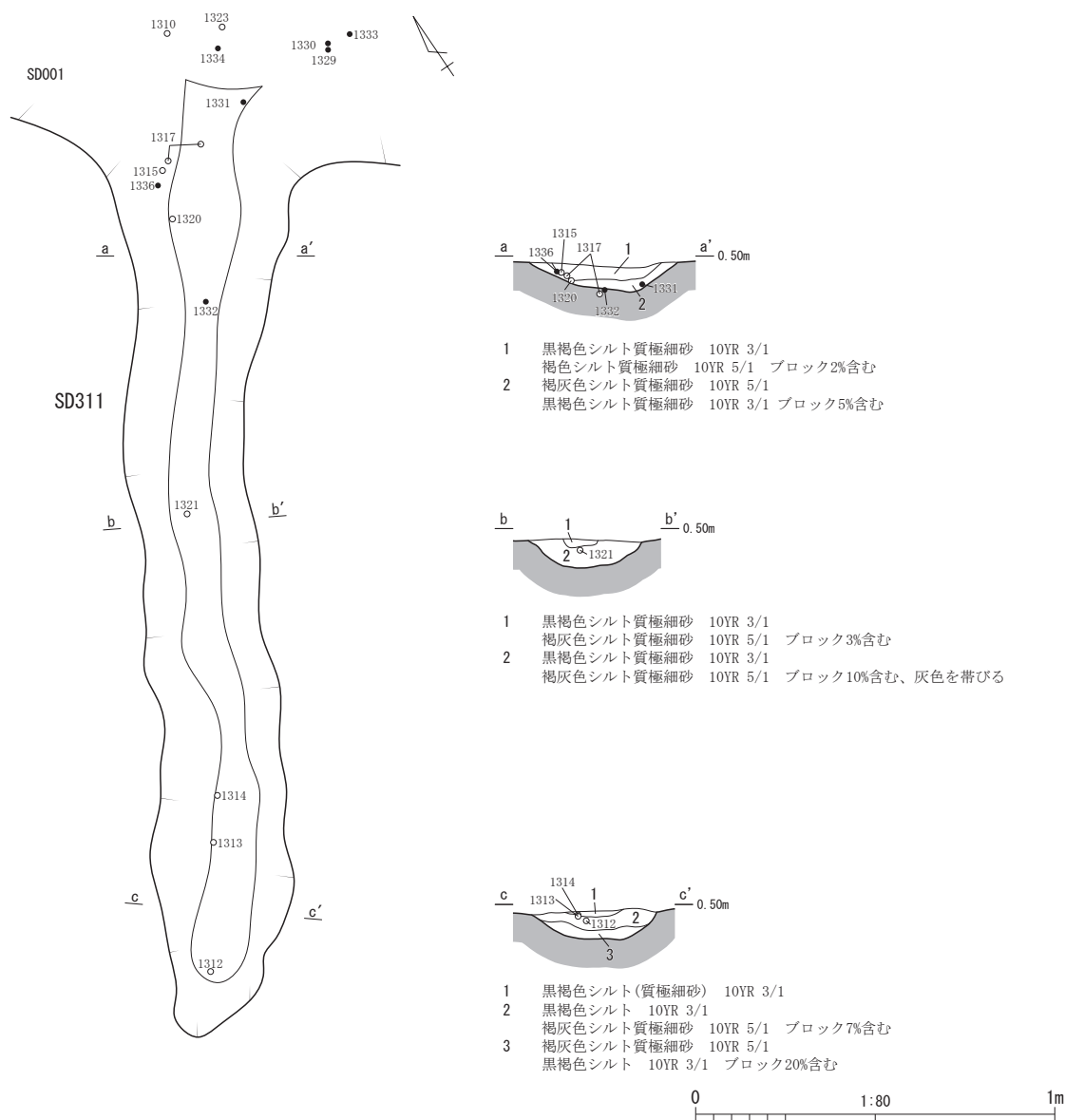


Fig. 276 SD311 実測図

た 683 と同様の形態で墨書が記されている。1316 は碗の体部及び底部に「財入」が記されている。1317 は碗の体部及び底部に「和」が記されている。1318 は碗の体部に 2 箇所墨書が記されており、「得上」「足」がそれぞれ記されている。1319 は碗の底部に「太」が記されている。1320 ～ 1326 は文字が判読できなかった墨書土器を示す。1322 は欠損により不明瞭であるが「足」の可能性がある。1327 は土師器の坏と考えられ、墨書が記されているが判読はできない。

1328 ～ 1335 は灰釉陶器である。1328 ～ 1332 は碗で、底部にヘラケズリ、糸切痕や無釉のものも確認される。1333 は輪花碗である。1334 は無台碗、1335 は無台皿である。1335 は体部が屈曲する形状である。

1336 ～ 1345 は土師器である。1336 は硯の一部と考えられる。全体が黒色で、丁寧なミガキ調整が施される。1337 は甕である。外面体部はハケメ調整がなされる。1338 ～ 1345 は製塩土器である。

1346 ～ 1348 は木製品である。1346 は曲物で底板と側板の一部がともに出土している。1347 は有孔板材で上下部に穿孔と切り込みが確認される。1348 は加工板で一部炭化が確認される。

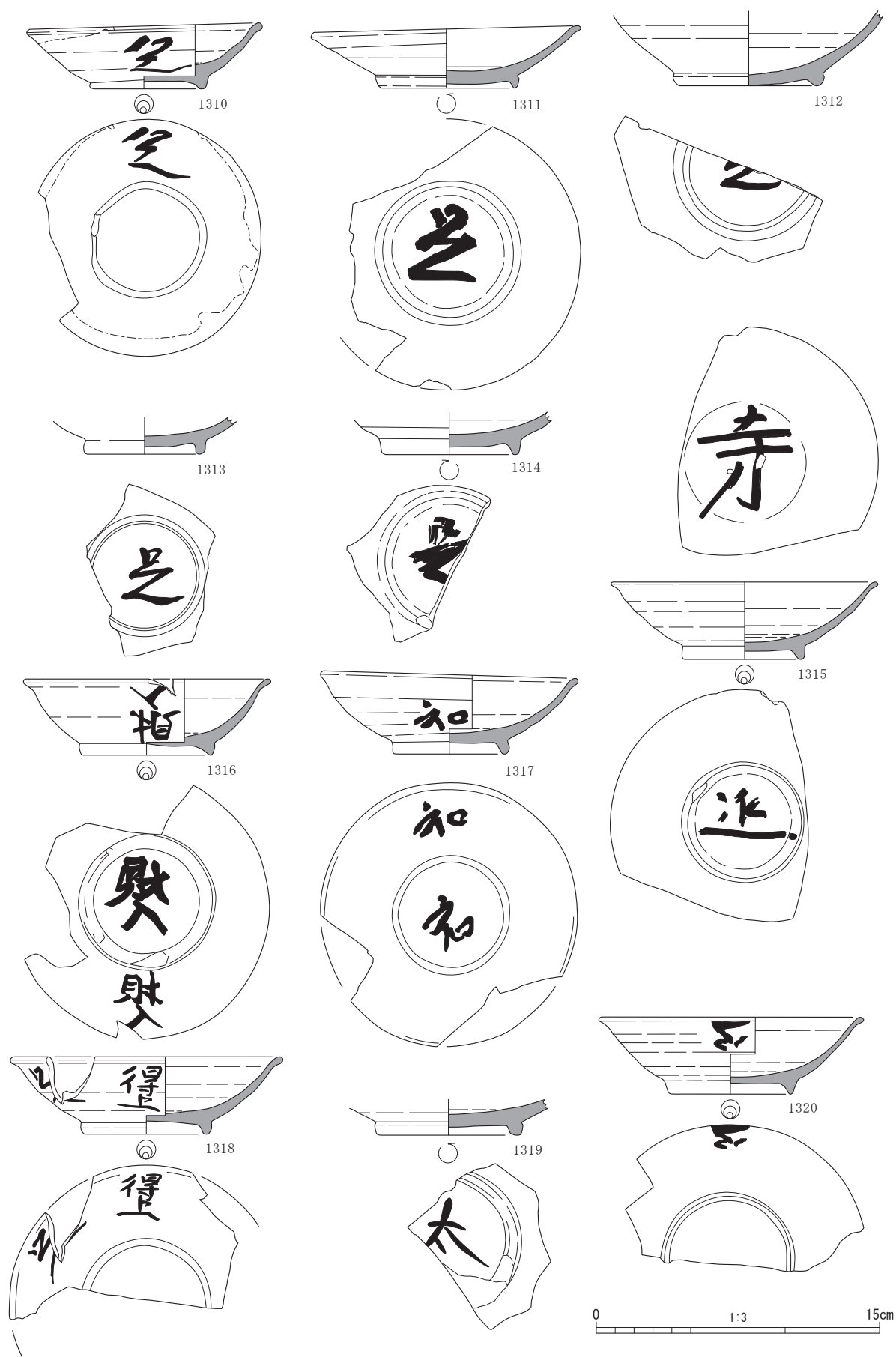


Fig. 277 SD311 出土遺物 (1)

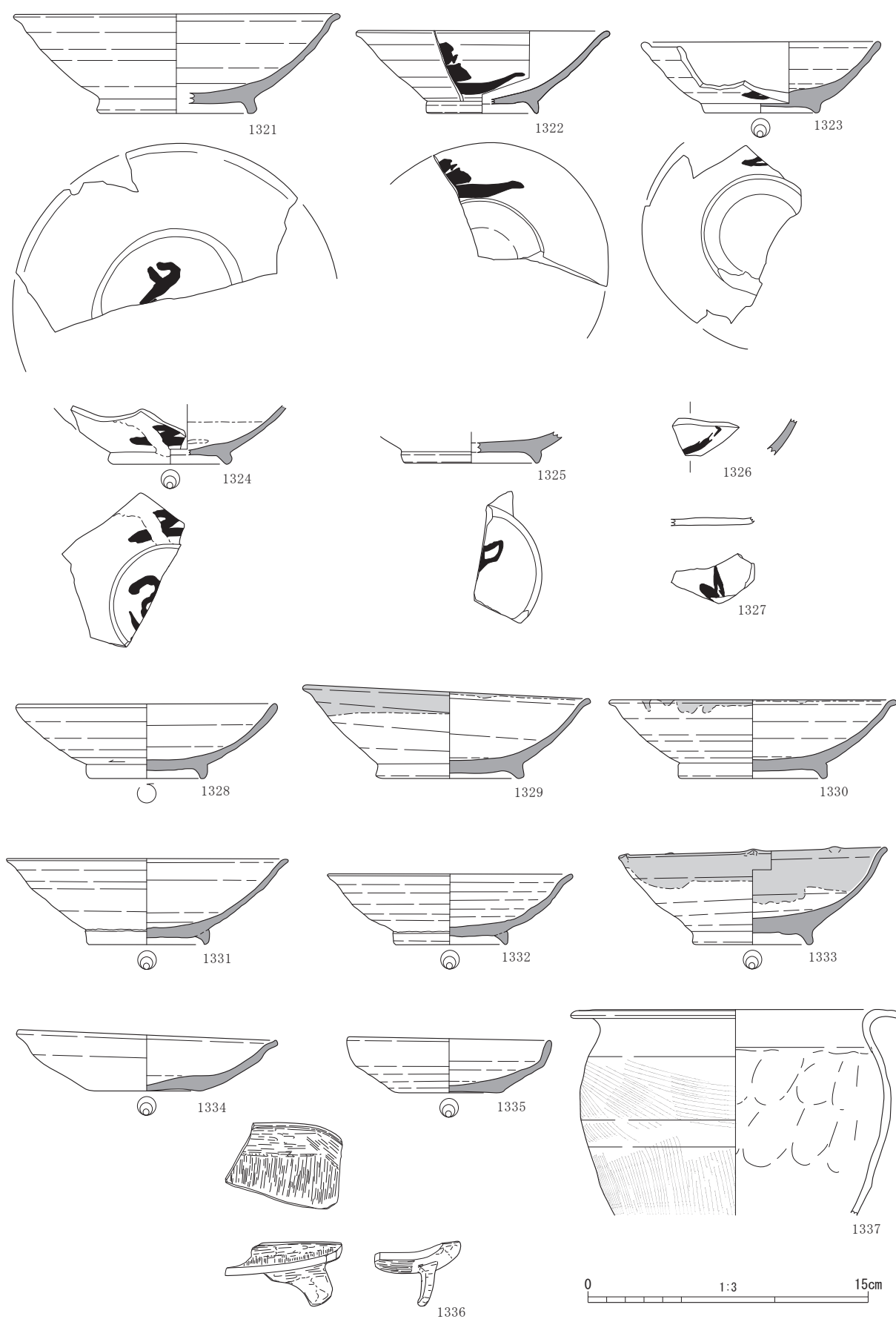


Fig.278 SD311 出土遺物 (2)

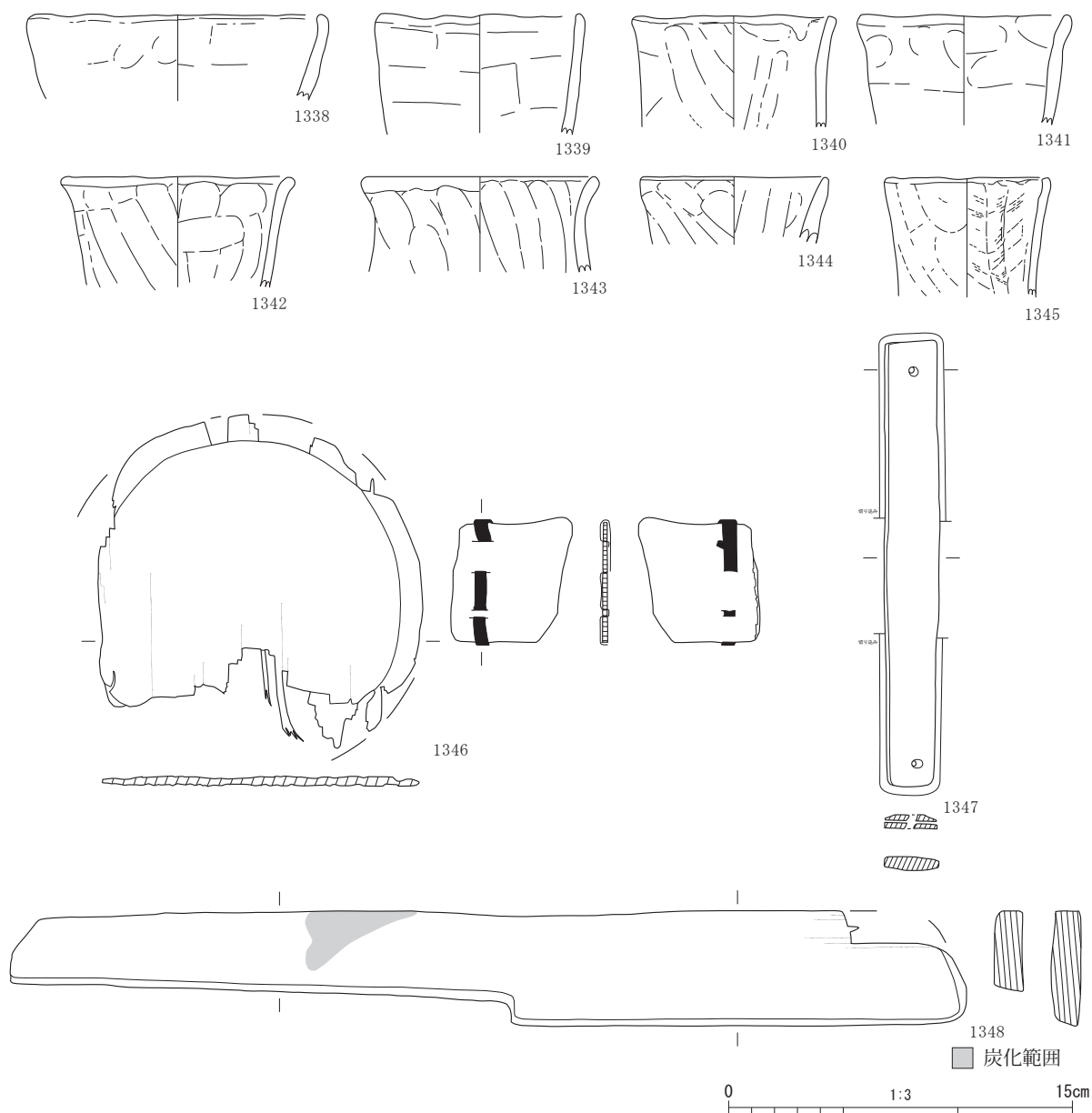


Fig. 279 SD311 出土遺物 (3)

(8) IV層出土遺物

概要 土器集積遺構 (SX01) と貝塚 (SS01、SS02、SS04、SS05、SS06) を除くIV層中からの出土遺物を示す。須恵器、灰釉陶器、土師器が主体であるが、その中に墨書土器が多数出土している。SX01と比較して、須恵器が割合として多い傾向であり、灰釉陶器はやや減少している。また、人面墨画が確認される土師器の甕が出土している。木簡はSX01に近い位置で1点出土しており、SX01から流出したと考えられる。木製品も多数出土しており、人面墨画が確認される人形や舟形、曲物など出土している。

墨書土器 (Fig. 280 ~ 286) 1349 ~ 1419はIV層から出土した墨書土器である。1349 ~ 1360は須恵器に、1361 ~ 1407は灰釉陶器に、1408 ~ 1419は土師器にそれぞれ墨書が記されている。須恵器に記されている墨書は人名と考えられる文字が確認される。灰釉陶器は、記されている墨書の大半が1文字書きである。

1349～1360は須恵器に墨書が記されているものである。器種は摘蓋、盤、皿、糸切碗、箱坏、無台碗が出土している。

1349は摘蓋である。内面に人名と考えられる「川辺古刀自女」が記されている。1350は盤である。底部に欠損により不明瞭であるが3文字確認でき、「川前」が判読できる。1351・1352は皿で、1351は底部に欠損により不明瞭であるが2文字確認でき、「女」が判読できる。1352は底部に墨書が確認されるが文字の判読はできない。1353は平頂蓋の転用硯である。底部に欠損により不明瞭であるが「常」と考えられる。1354・1355は糸切碗である。1354は底部に「太」が記されている。1355は体部及び底部に「土」と考えられる文字が記されている。1356～1359は箱坏と考えられる。1356は底部に欠損により不明瞭であるが4文字確認でき、「部得女」が判読できる。1357～1359は欠損により判読は困難である。1360は無台碗で内面に5つの丸記号が並んで記されている。

1361～1407は灰釉陶器に墨書が記されているものである。器種は碗、皿、無台皿が出土している。1361・1362は碗の体部に「足」が記されている。1363～1367は碗の底部に「足」が記されている。1368は碗の体部及び底部に「足」が記されている。1369は碗の体部に墨書が記されており、欠損により不明瞭であるが「足」と考えられる。1370は碗の体部に墨書が記されている。「足」とも読み取れるが判然としない。1371は皿の底部に「足」が記されている。

1372～1374は碗の体部に「得」が記されている。1375～1380は碗の体部に「得上」が記されている。1381は碗の内面に「得上」が記されている。1382は碗の底部に「賀」が記されている。1383は皿で底部が高台より突出した形状である。体部に「賀」が記されている。1384は無台皿の体部と底部にかけて「賀」が記されている。1385・1386は碗の体部に墨書が記されており、1385は「寺」が、1386にも「寺」と考えられる文字が記されている。1387は碗の底部に「富」が記されている。1388は碗の底部に「甲」が記されている。1389は体部に「朋万」が記されている。1390は碗の底部に「夫」が記されている。1391は碗の体部に「有」が記されている。1392・1393は碗の体部に墨書が記されており、1392は「仁」が、1393は欠損により不明瞭であるが「仁」と考えられる文字が記されている。1394は碗の底部に「和」が記されている。1395～1397は碗の体部に文字が記されている。1395は「平」、1396は「上」、1397は「紀」がそれぞれ記されている。1398～1407は墨書が確認されるが文字が判然としないものを示す。1400は碗の底部に2文字確認され、「万」と考えられる文字が確認される。1405は欠損により不明瞭であるが碗の底部に「甲」と考えられる文字が確認される。

1408～1419は土師器に墨書が記されている。器種は有台碗、坏が出土している。

1408は有台碗である。内面全体に赤彩が施されており、外面底部に「和」が記されている。1409～1412は坏に「足」が記されている。1409は体部に、1410～1412は底部にそれぞれ記されている。1413は坏の体部及び底部に「仁」が記されている。1414は坏の体部に「木」が記されている。1415は坏の底部に「主」が記されている。1416～1419は坏に墨書が記されているが文字が判然としないものを示す。1417・1418は内面全体に赤彩が施される。1418は体部に墨書が記されておりかすれて不明瞭であるが「足」と考えられる。

須恵器 (Fig. 287～290) 1420～1502はIV層から出土した須恵器である。器種は摘蓋、転用硯、

有台坏身、箱坏、無台碗、鉢、盤、皿、壺類、甕など出土している。

1420～1428は摘蓋である。1421は天井部にヘラ記号が確認される。1427・1428は内面全面に墨痕が確認されることから転用硯と考えられる。1429～1436は有台坏身である。1429は体部から口縁部にかけて碗形の形状をなす。1437～1465は箱坏である。1463は体部から口縁部に向かって広がる形状である。1466～1478は無台碗である。1466・1467は底部が平坦な形状である。1473は底部にヘラ記号が確認される。1477・1478は口縁端部が明瞭に外反する。

1479・1480は鉢である。1479はやや碗形の形状であり口縁端部が外反する。1481は盤である。1482～1484は皿である。1482は小型の皿と考えられる。1485～1487は高坏である。1487は低脚坏で脚部に4箇所穿孔が確認される。

1488～1498は壺類である。1488は広口壺である。1489～1496は長頸壺である。1489は無台でIV層中でも古手の様相を示す。1491・1492は肩部が屈曲する形状である。1497・1498は壺の底部で、1627は無台である。1499～1502は甕である。1499は外面に緻密なタタキ調整がなされており、内面上半には同心円状の当て具痕が確認される。1500は外面に緻密なタタキ調整が施されている。1501・1502は甕の口縁部である。

灰釉陶器 (Fig. 291) 1503～1522はIV層から出土した灰釉陶器である。器種は碗、皿、大碗、長頸壺が出土している。出土数はIV層で検出されたSX01よりも大幅に減少する。

1503～1516は碗である。底部はヘラケズリ、糸切痕が確認される。施釉が確認されるものは423の1点のみである。1517～1519は皿である。1520は有段皿である。内面に1段確認される。1521は口径が約24cmの大皿である。1522は長頸壺である。

土師器 (Fig. 292～294) 1656～1666はIV層から出土した土師器である。赤彩が施されている坏、皿が多数出土している。また、人面墨画が確認される甕が出土している。

1523～1532は坏である。1523・1523は内外面ともに赤彩が施されており、外面はミガキ調整がなされている。1523は内面に暗文が確認される。V層からの混入品、あるいはIV層でも古手である可能性がある。1526・1531は内面と体部から口縁部に赤彩が施される。1530・1532は内面に赤彩が施される。1533～1535は有台碗である。1533は外面にミガキ調整がなされている。底部に意図的に記されたと推定される円状の痕跡が確認される。1533・1534は形状から古手の様相を示す。1536は皿である。内外面ともに赤彩が施される。1537～1539は台付皿である。1537～1539は外面にミガキ調整が施されており、内面に暗文が確認される。1537には内外面ともに赤彩が施されている。1540は鉢で、内外面ともに赤彩が施される。1541～1546は甕である。1545は、短胴甕である。1546は甕の体部に人面墨画が記されている。残存部分で確認できる部位として両目、片耳、鼻、口及び髭が確認できる。1547は碗に人面墨画と考えられる墨画が記されている。1548～1561は小型模造品である。1548～1557は碗形である。1558～1560は高坏形である。1561は壺形である。1562～1566は製塩土器である。1566は脚部である。

土製品 (Fig. 294) 1567・1568の2点を示す。1567は動物を模した形状で、胴体の一部と脚が残存している。伊場大溝での出土傾向から土馬と推定される。1568は尾と考えられる。

その他の遺物 (Fig. 294) 1569は安山岩製の敲石である。中央と側面全周に敲打痕が確認される。

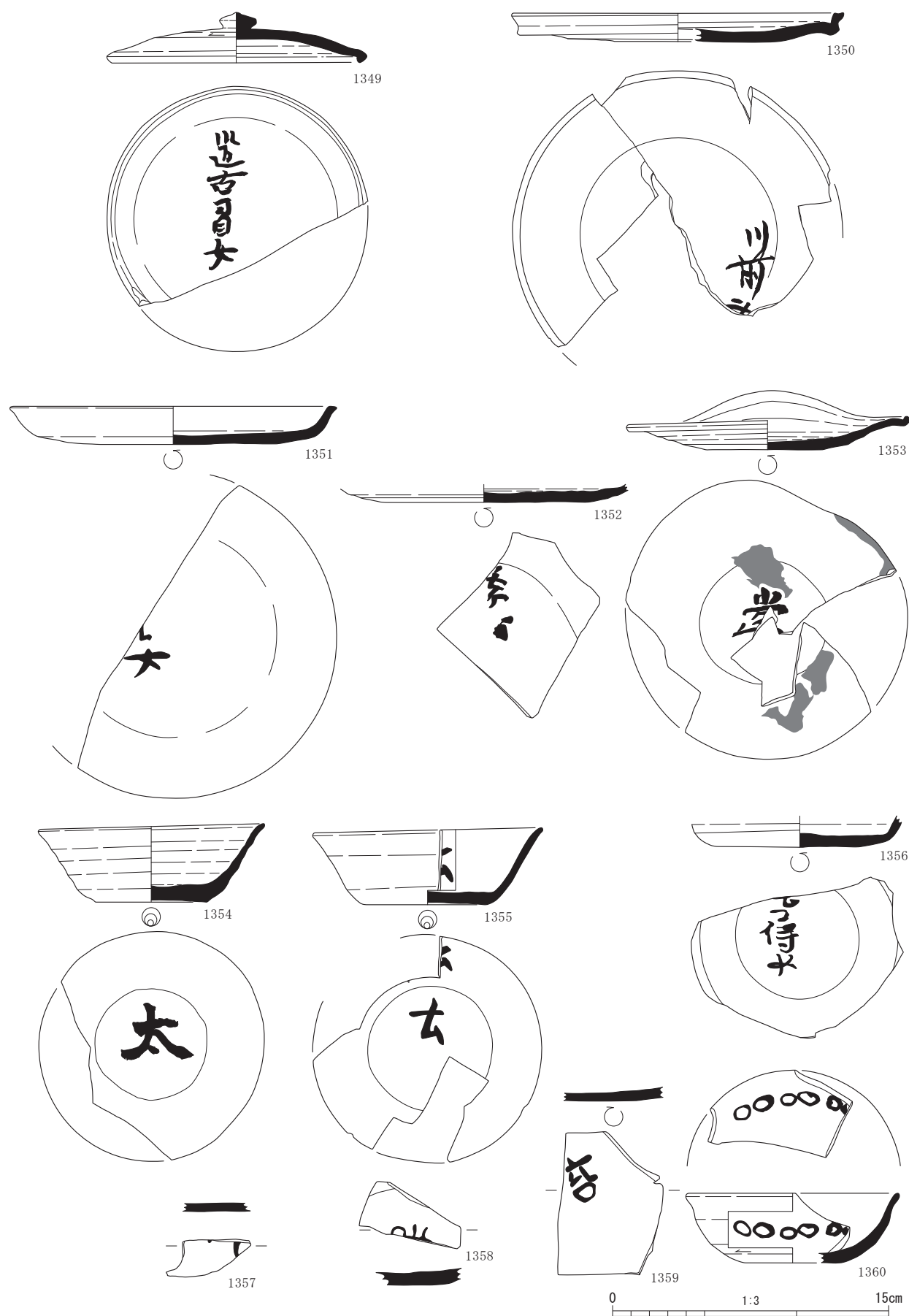


Fig. 280 IV層 出土遺物 (1)

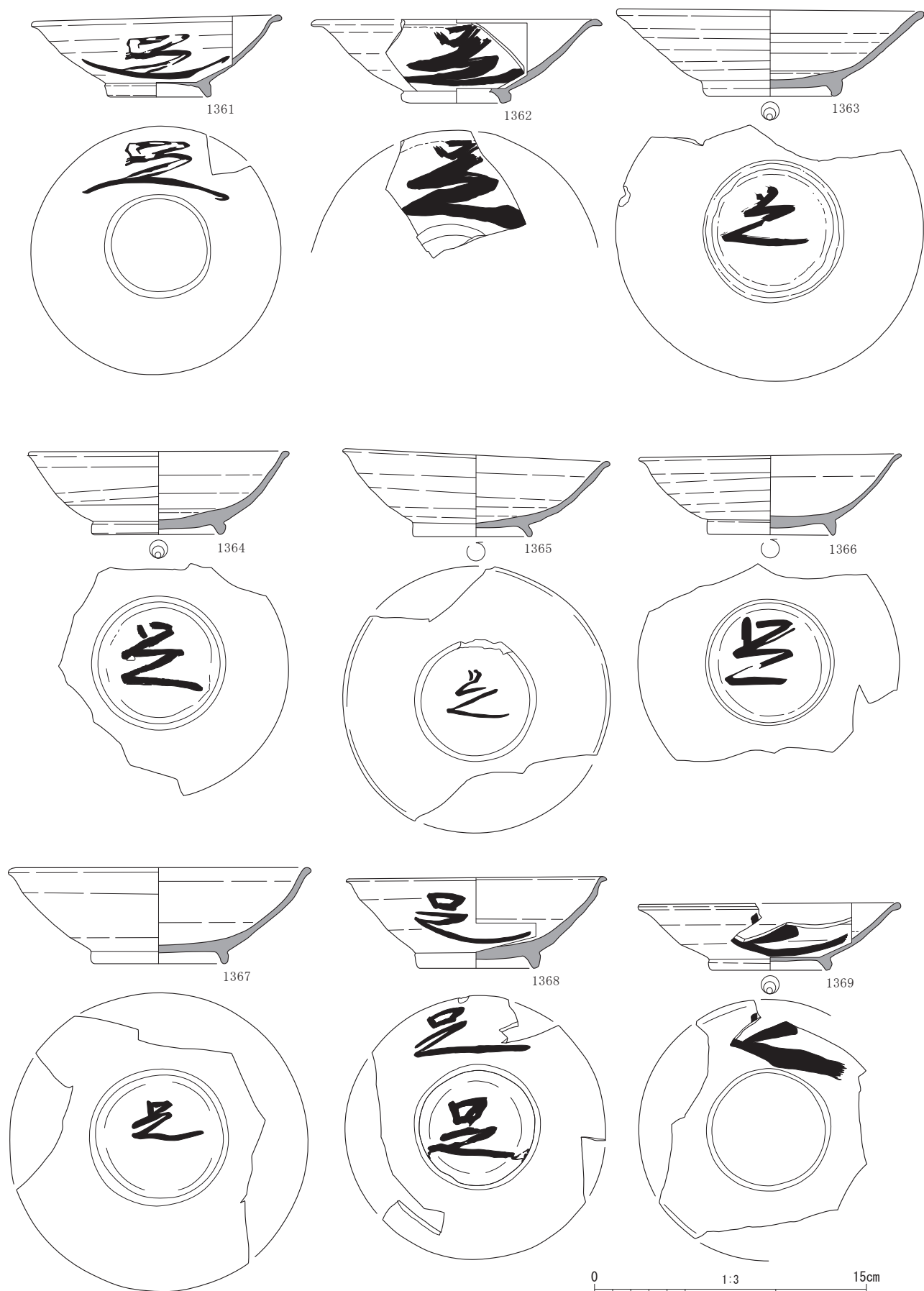


Fig. 281 IV層 出土遺物 (2)

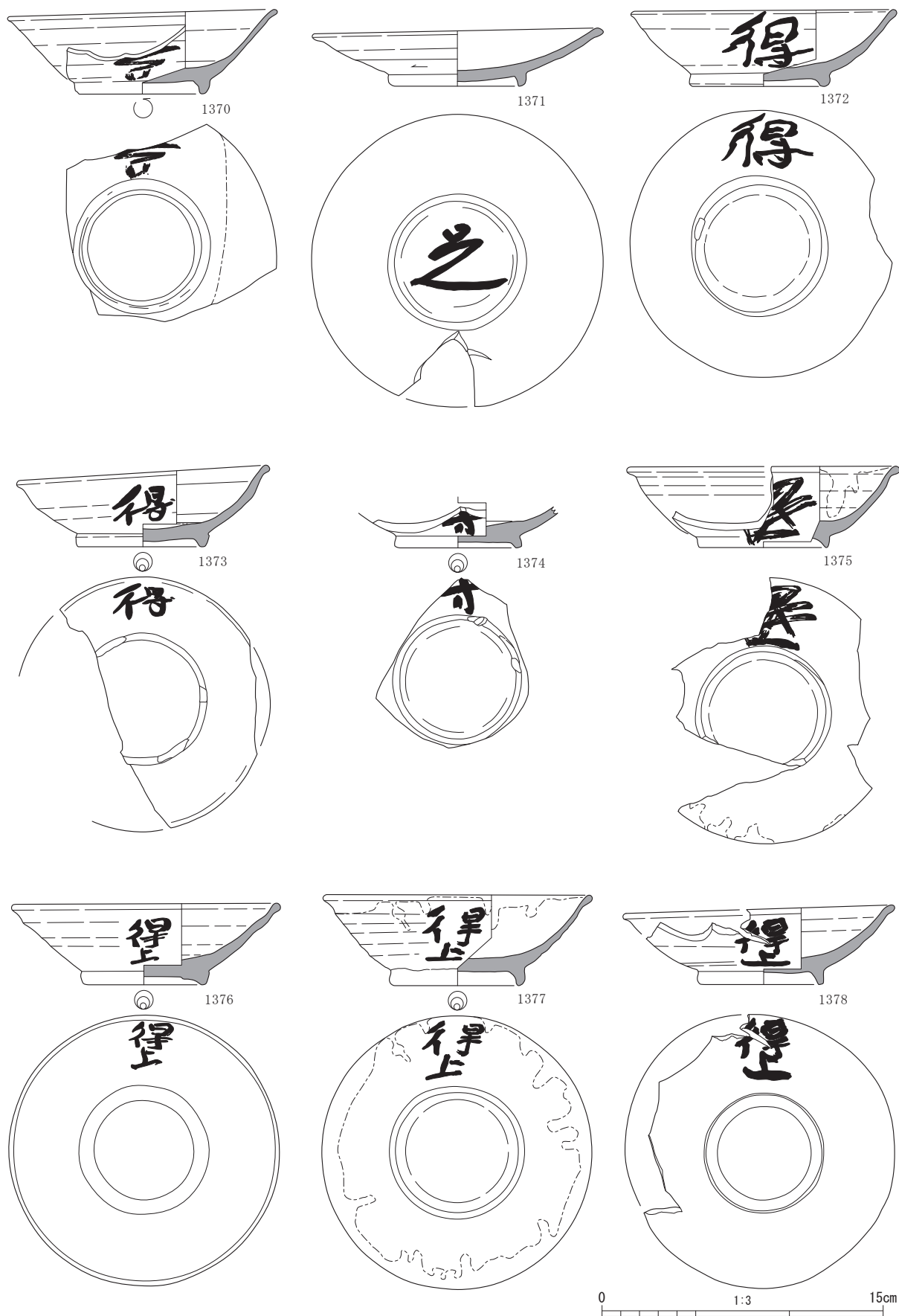


Fig. 282 IV層 出土遺物 (3)

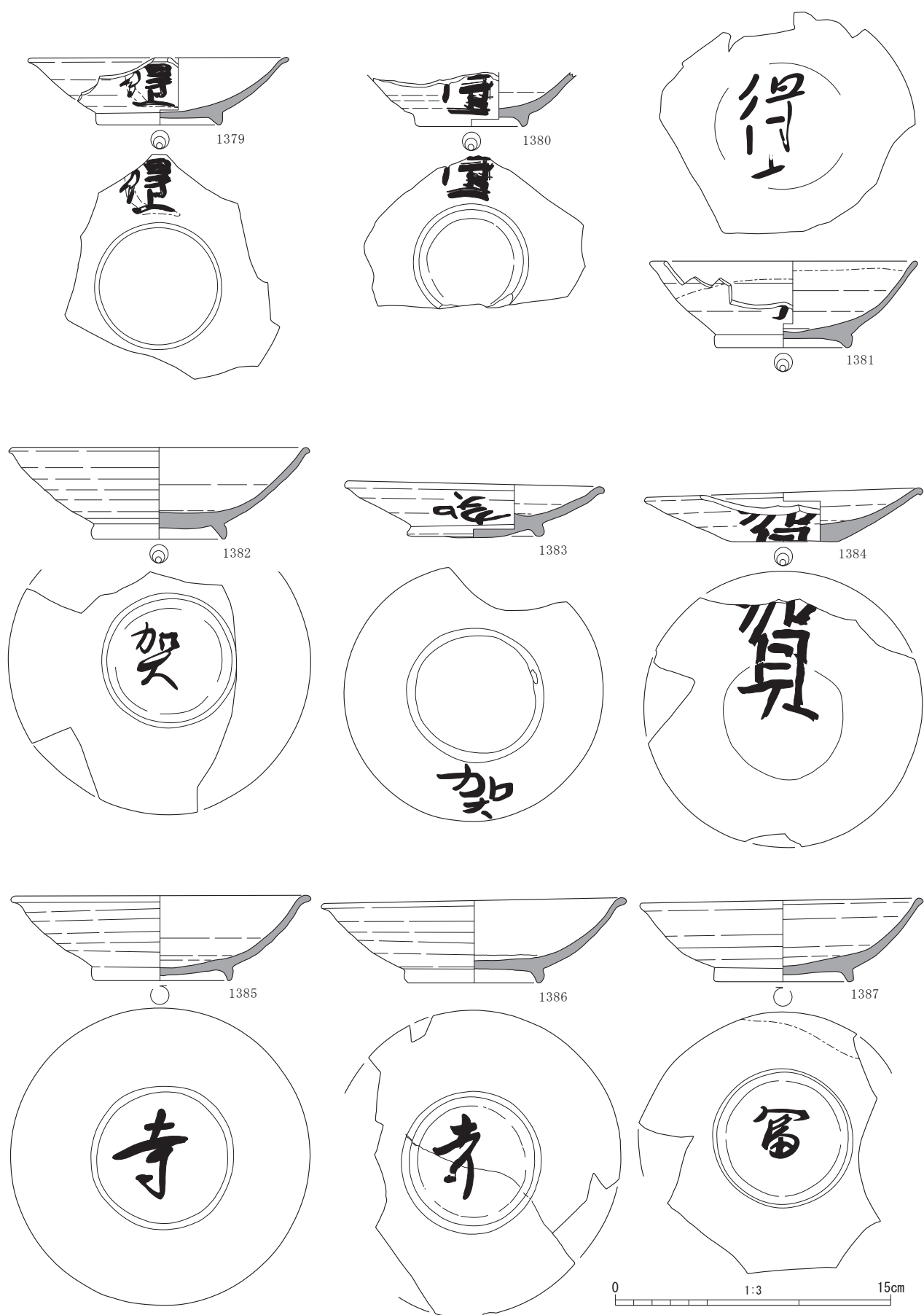


Fig. 283 IV層 出土遺物 (4)

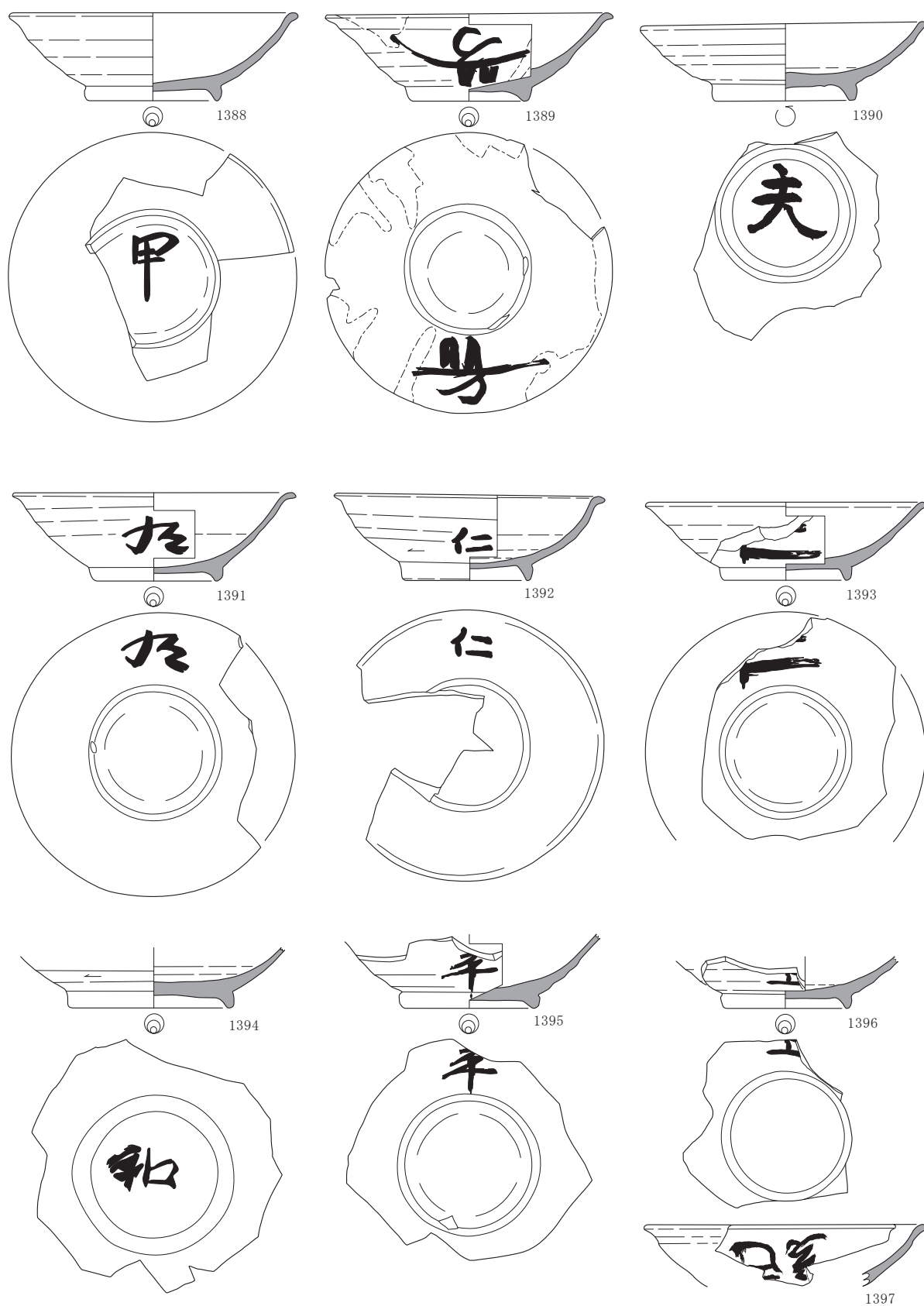


Fig. 284 IV層 出土遺物 (5)

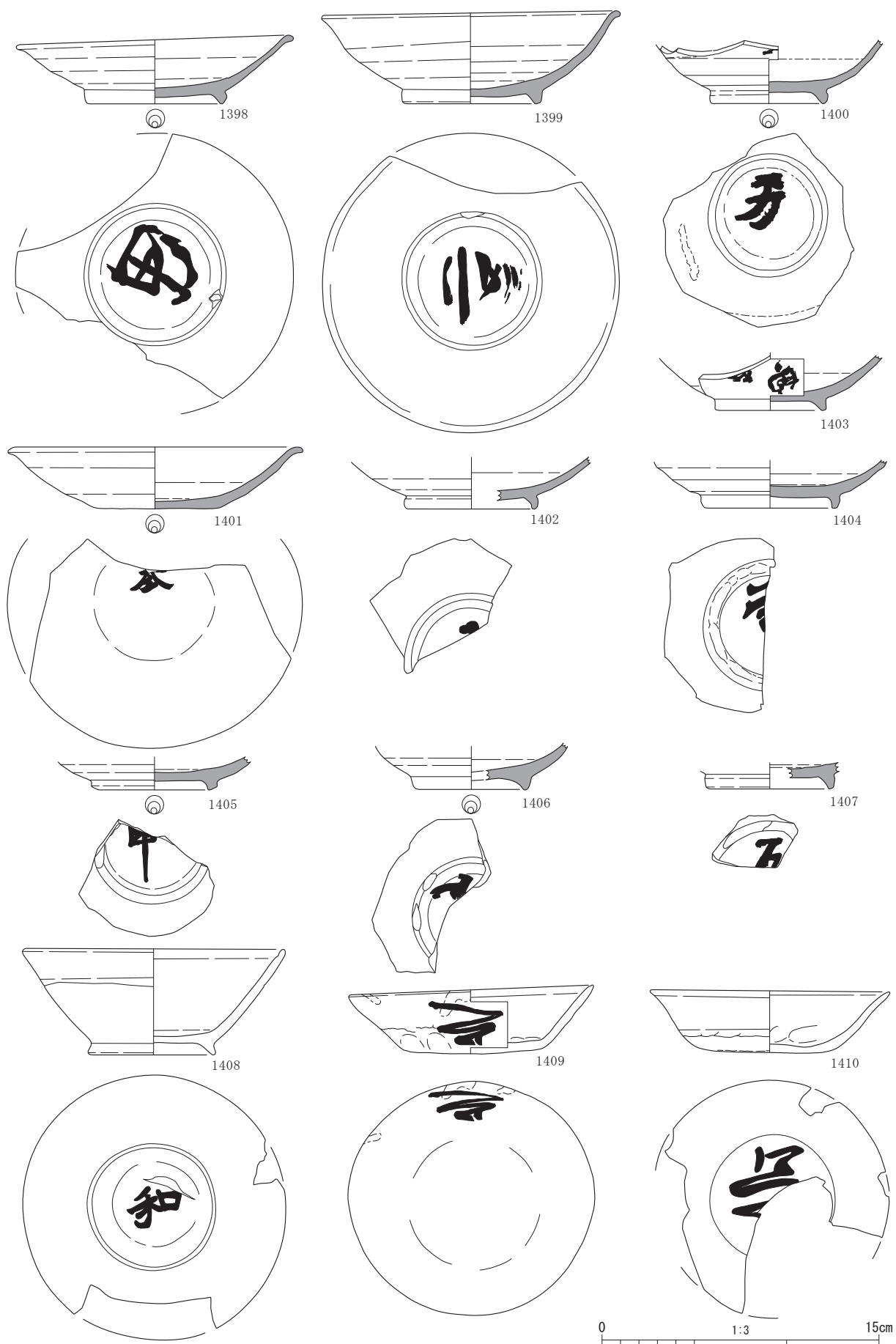


Fig. 285 IV層 出土遺物 (6)

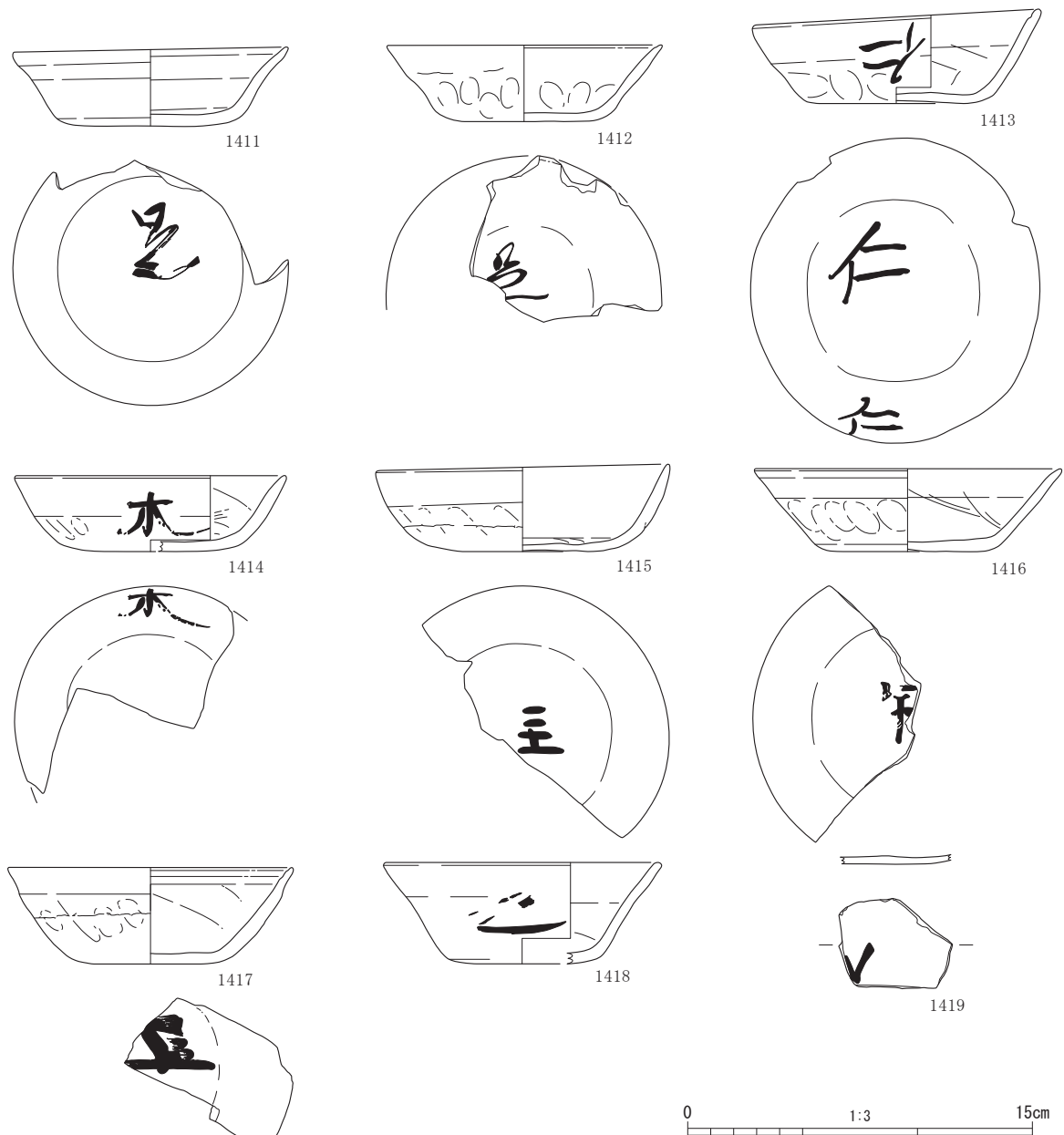


Fig. 286 IV層 出土遺物 (7)

1570 は骨製の紡錘車と考えられる。

木簡 (Fig. 295) IV層中より1点出土している。発見順で番号が付与されているため梶子22号(1571)とした。1571は上部が欠損している薄板材の両面に墨書が記されている。ほとんど文字の判読は困難であるが「嶋」と考えられる文字が確認される。

木製品 (Fig. 295 ~ 297) 1572 ~ 1596はIV層から出土した木製品である。器種は人形、船形、柄、曲物、加工板、加工棒、杭、建築部材が出土している。

1572・1573は人形である。1572は墨痕が確認できるが描かれている内容については不明である。1573は人面が記されている。眉、目、鼻、口のほか、墨痕が確認できるが内容については不明である。1574は舟形である。1575は馬形と考えられる。上部に2箇所、下部に1箇所抉りが確認される。1576は刀子の柄である。

1577は有孔加工板である。薄板材の上下部に穿孔が確認される。1578は上部に穿孔が確認で

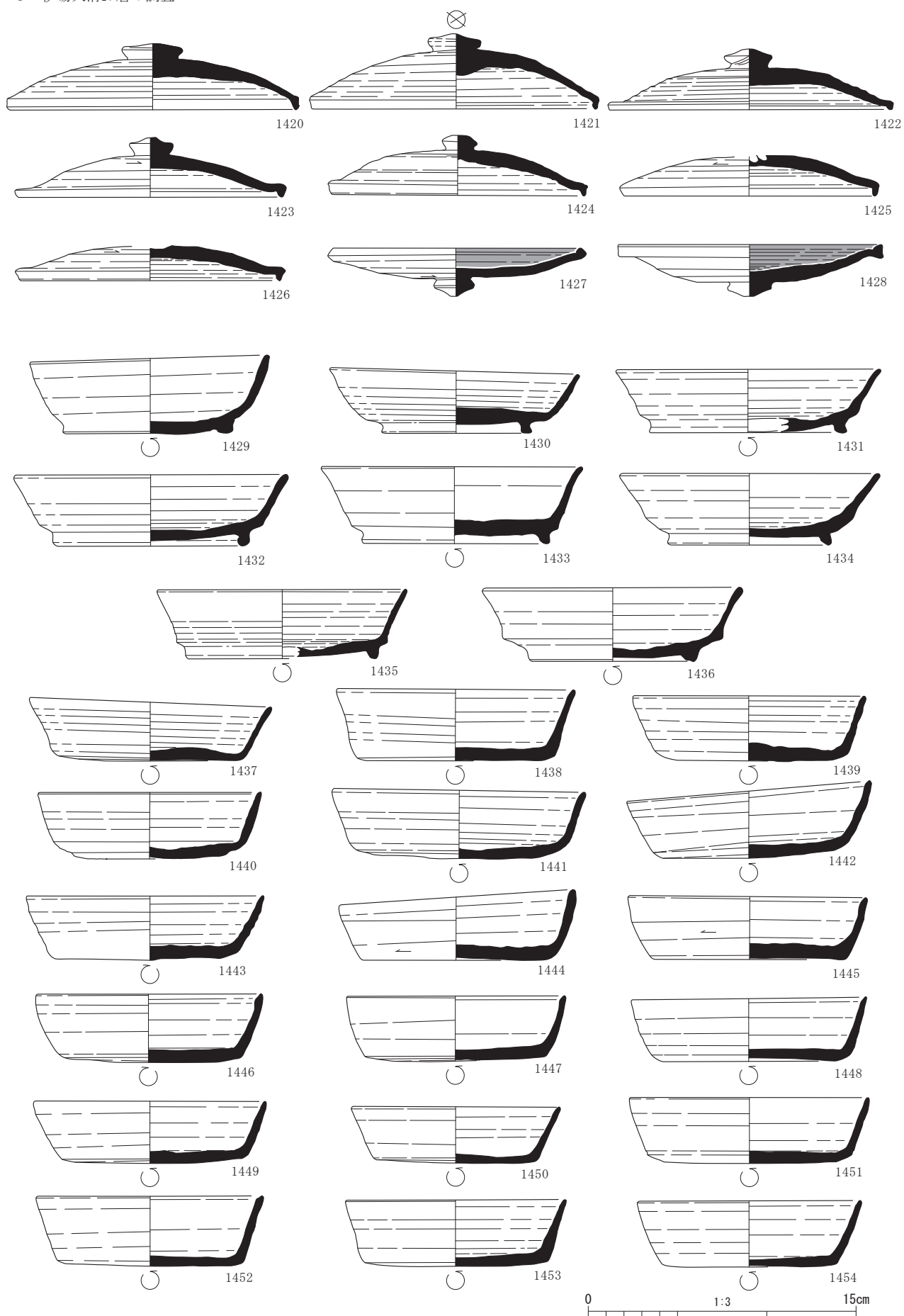


Fig. 287 IV層 出土遺物 (8)

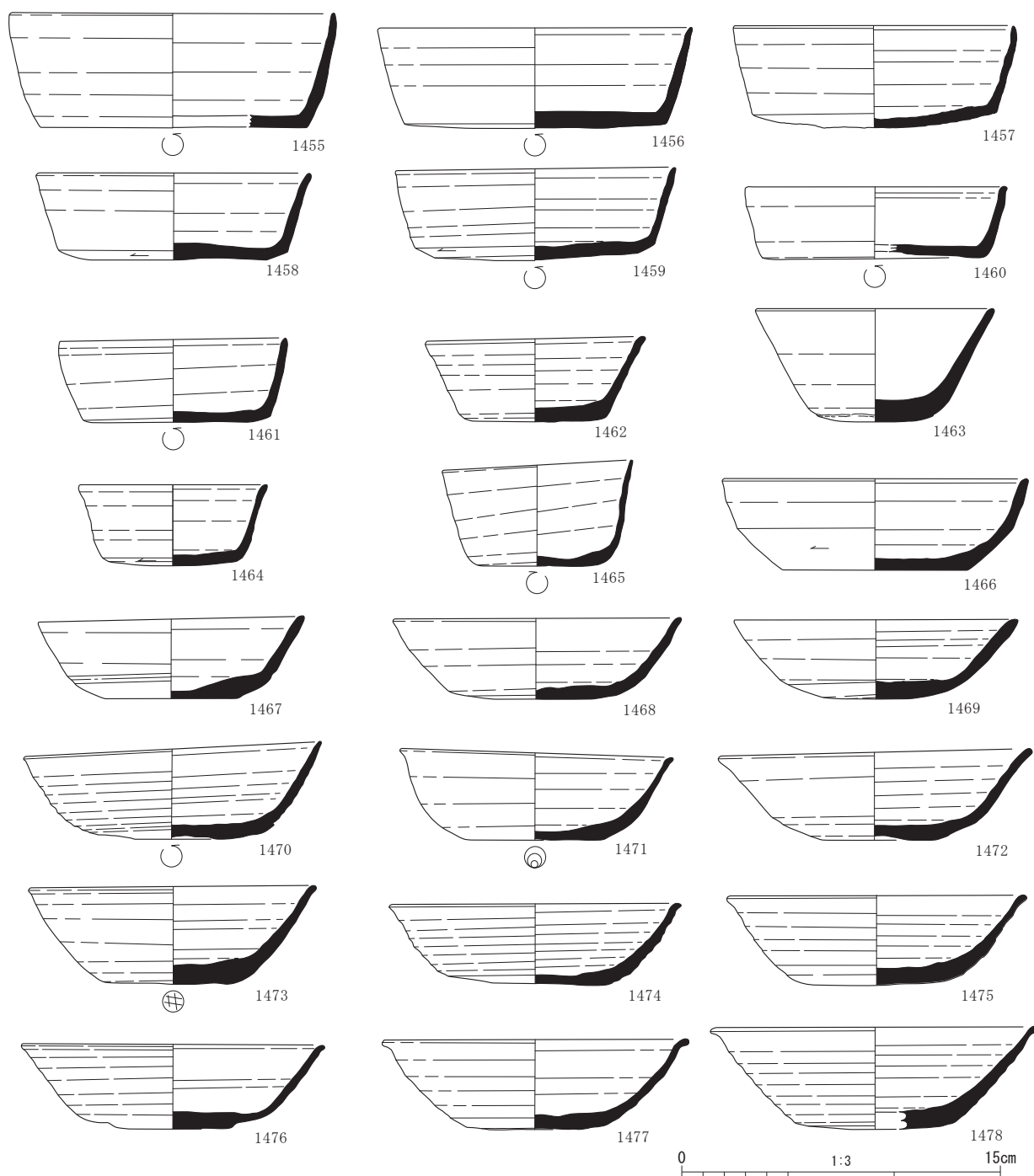


Fig. 288 IV層 出土遺物 (9)

き、用途は不明であるが、刷毛の柄のような形状である。1579・1580 は板材に穿孔が確認される。1581 はやや厚めの材に方形状の穿孔が確認できる。また、上部にU字状の抉りが削り出される。1582～1584 は加工板である。1583 は欠損により不明瞭であるが、平串状の形状であると考えられる。1584 は断面形が台形状になるよう加工されている。1586～1588 は曲物である。1589 は挽物皿である。1593～1595 は大型の曲物の一部である。1596 は建築部材と考えられる。

(9) 小結

IV層ではSX01 より大量の墨書土器が出土しており、木簡が4点と「足」が線刻された曲物が出

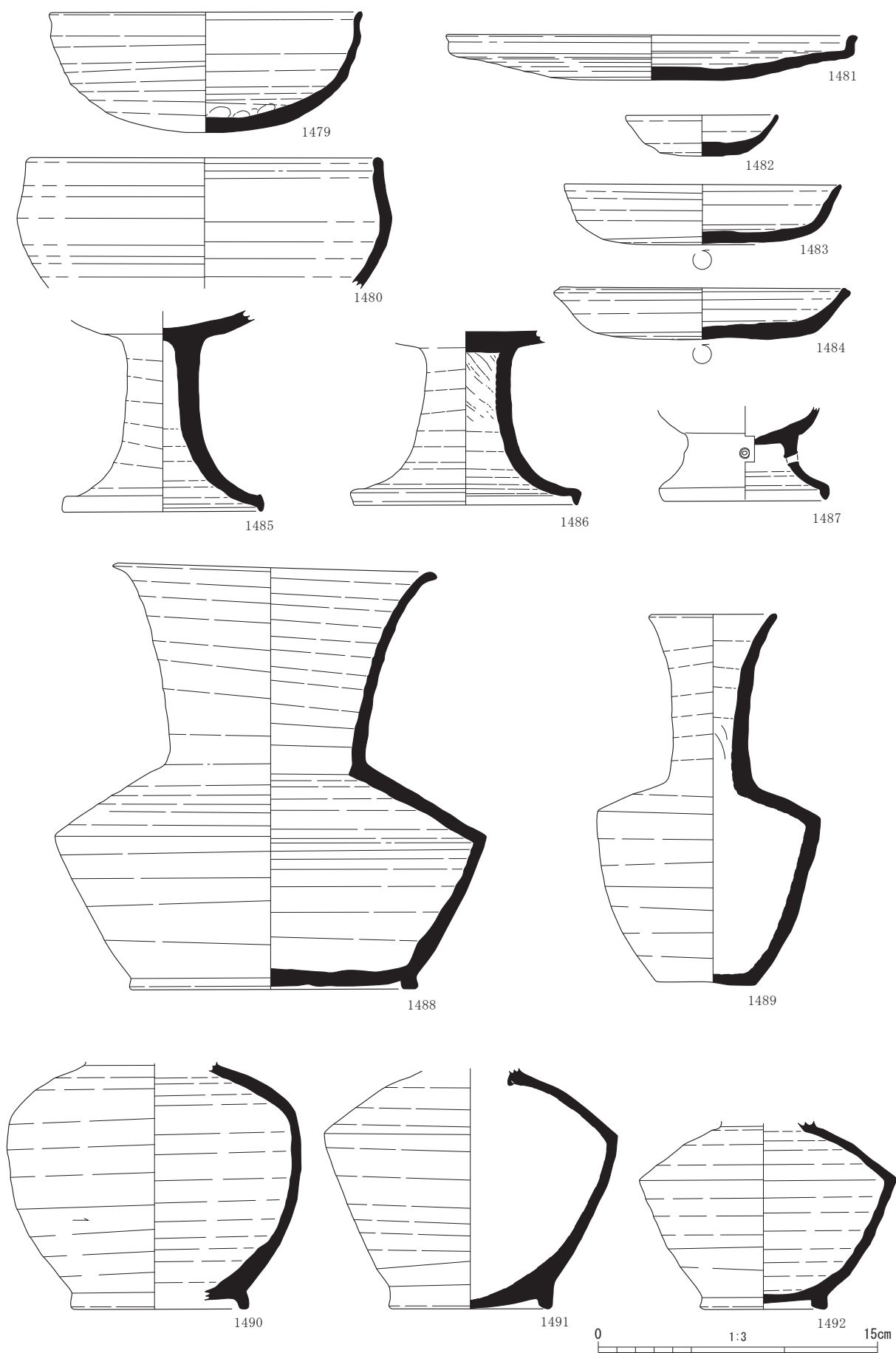


Fig. 289 IV層 出土遺物 (10)

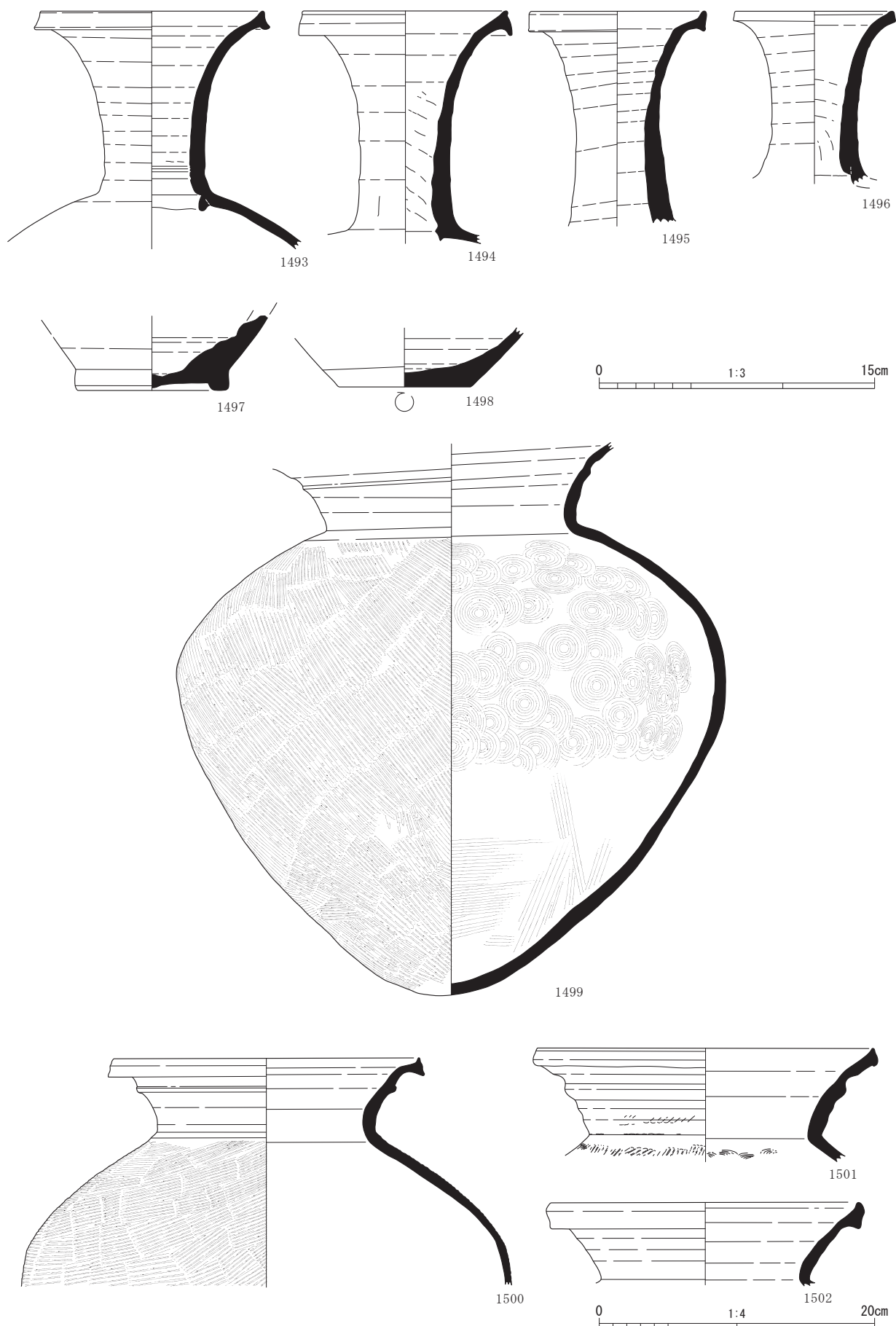


Fig. 290 IV層 出土遺物 (11)

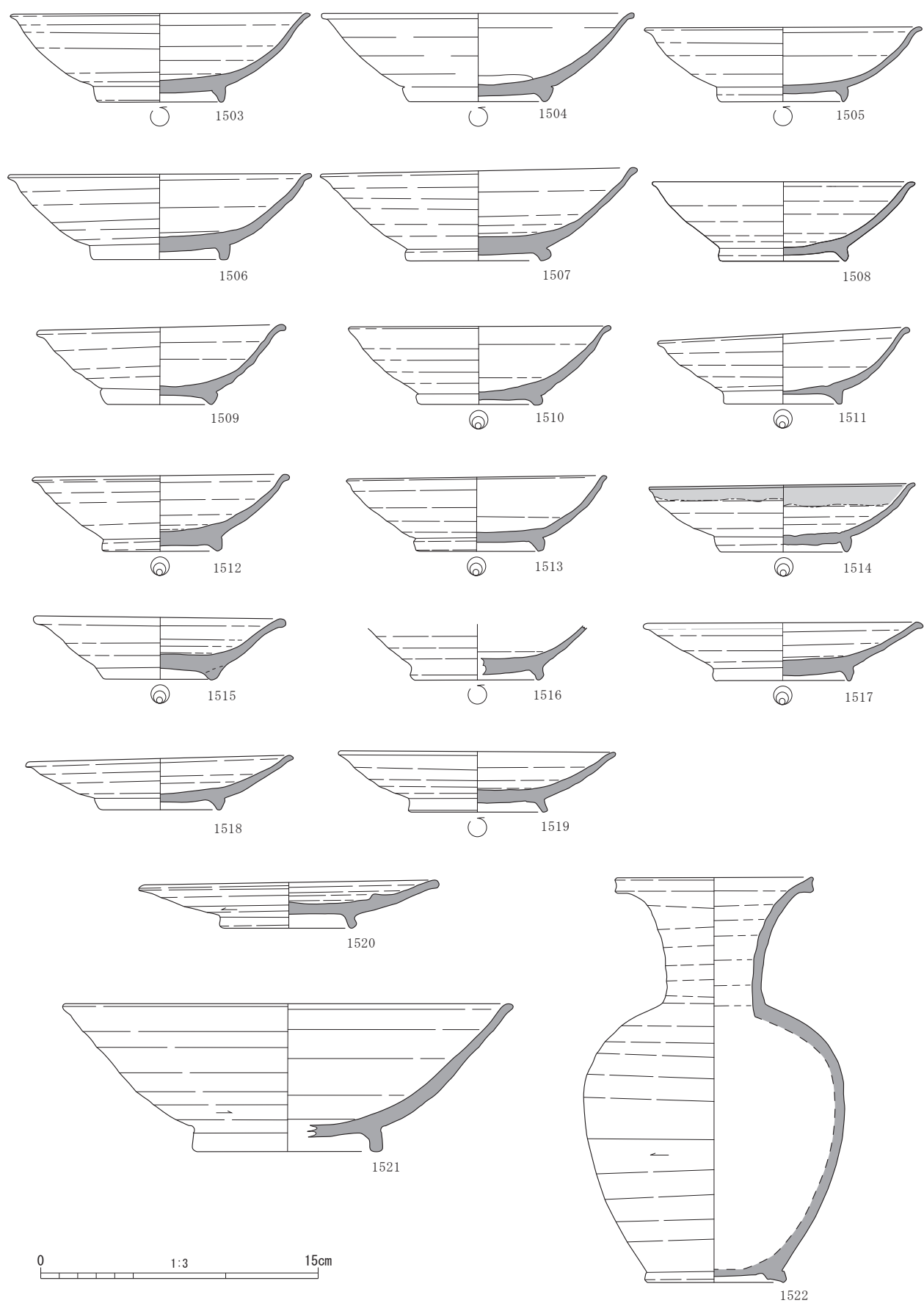


Fig. 291 IV層 出土遺物 (12)

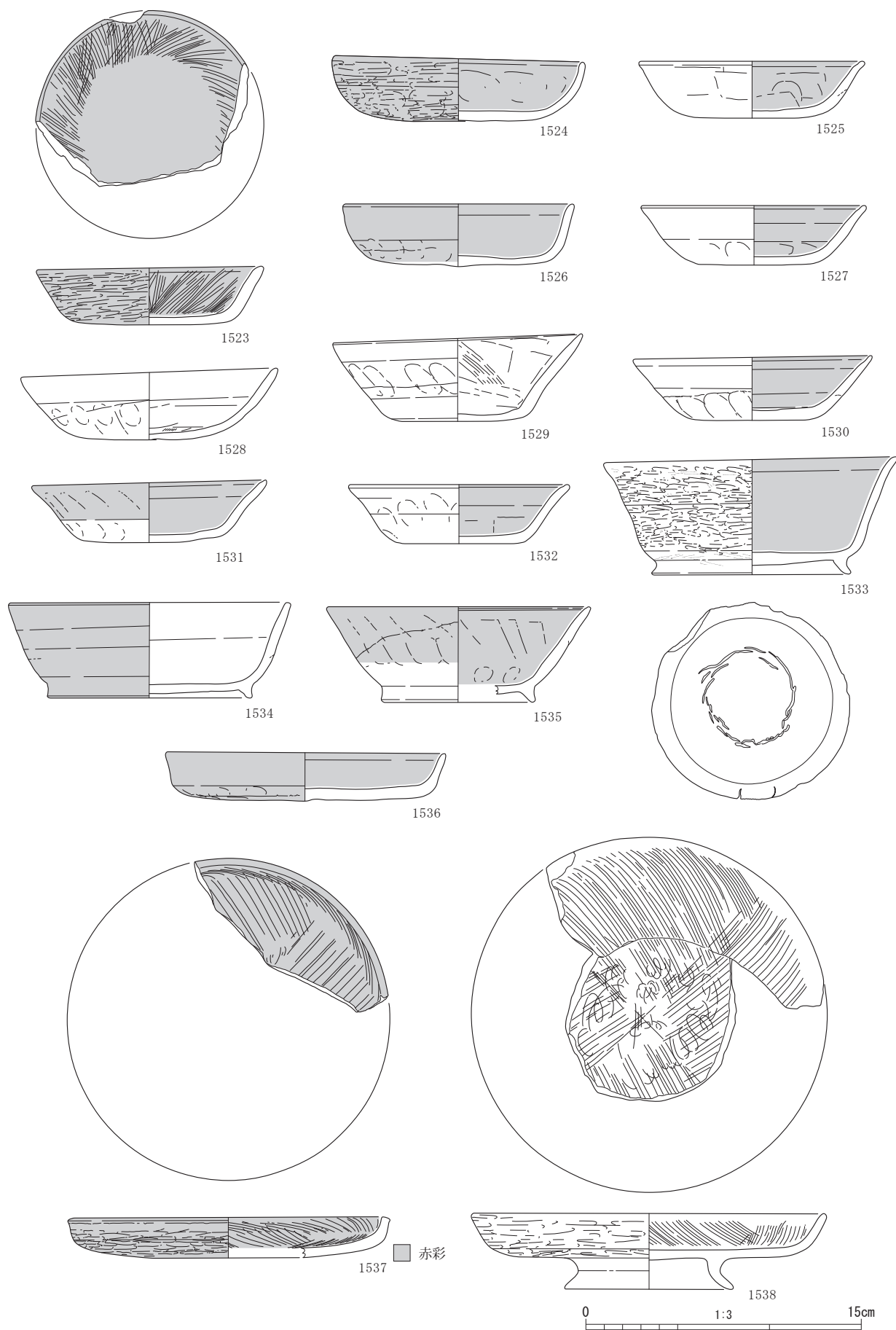


Fig. 292 IV層 出土遺物 (13)

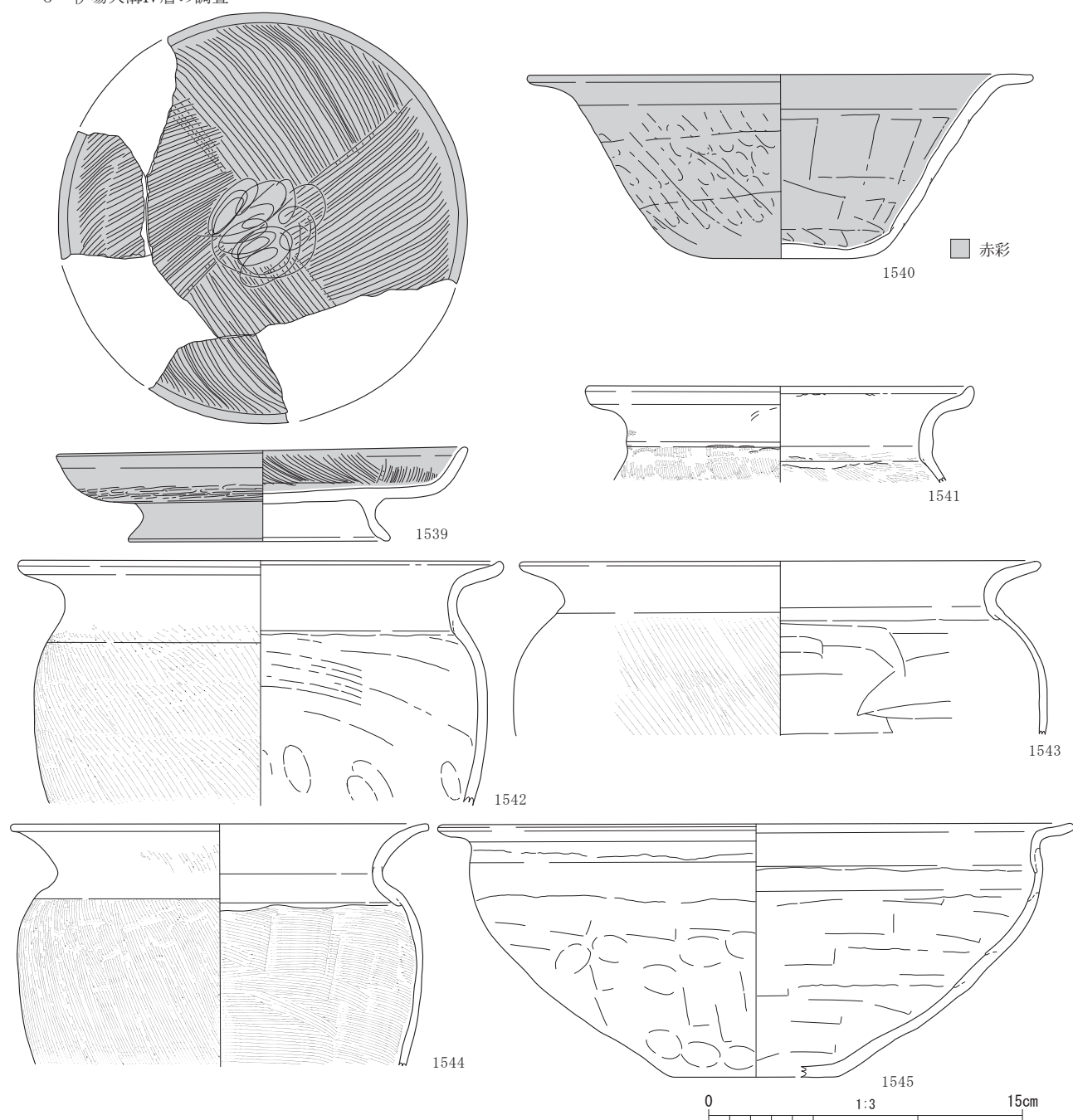


Fig. 293 IV層 出土遺物 (14)

土している。SX01に投棄された遺物は大半が灰釉陶器であり、須恵器が少ない傾向である。墨書土器も灰釉陶器の割合が高い。灰釉陶器は9世紀代、特に9世紀後半の様相を示すことから、この時期に墨書土器を集中して投棄していた可能性がある。SX01内での出土数をみると西部が最も遺物の密度が高く、東に向かうにつれ低くなることから投棄場所の中心はSX01西部付近、または調査区北西部外の可能性がある。しかしながら、本調査区西寄りでは調査がなされた梶子19次調査では、IV層は一部のみ調査されたにとどまるため全容は不明である。ただし、本調査でSX01で吉祥句とみられる一文字書きの墨書土器が大量に一括して出土していることや人面墨画など特殊な遺物が出土することから大溝南岸を中心に敷智郡家に関連する施設、またはSX01付近において祭祀が行われていたと推定される。

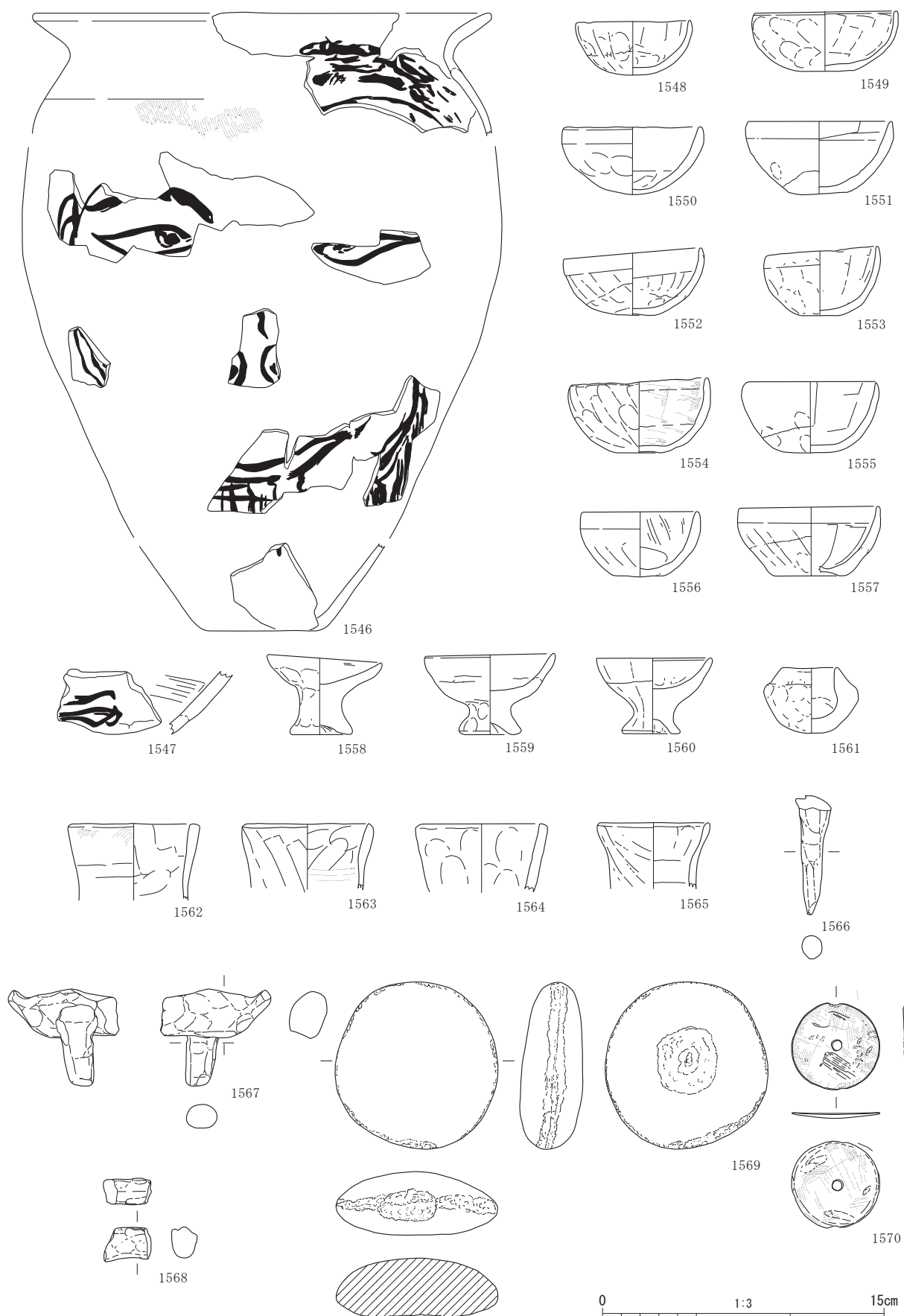


Fig. 294 IV層 出土遺物 (15)

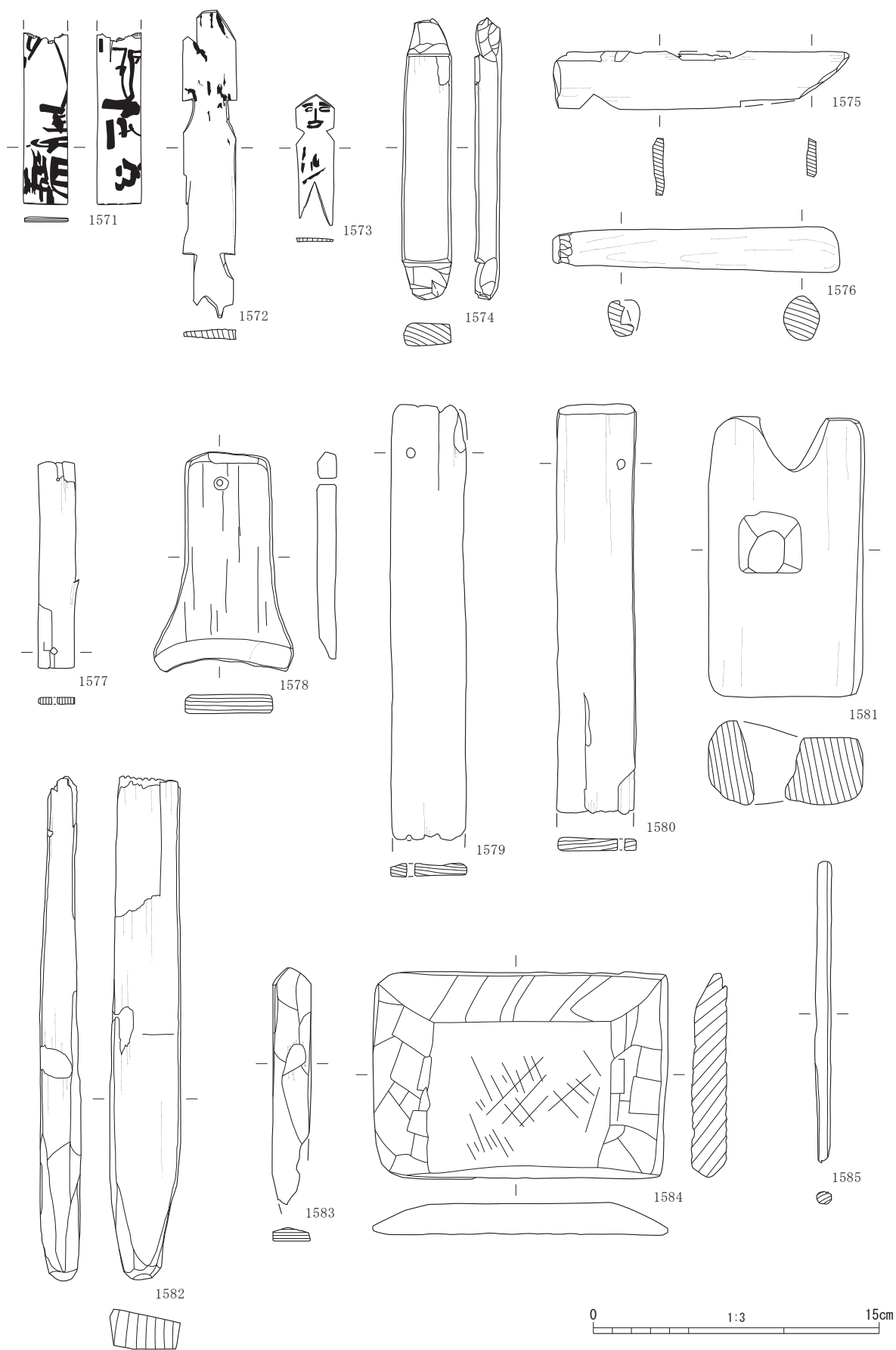


Fig. 295 IV層 出土遺物 (16)

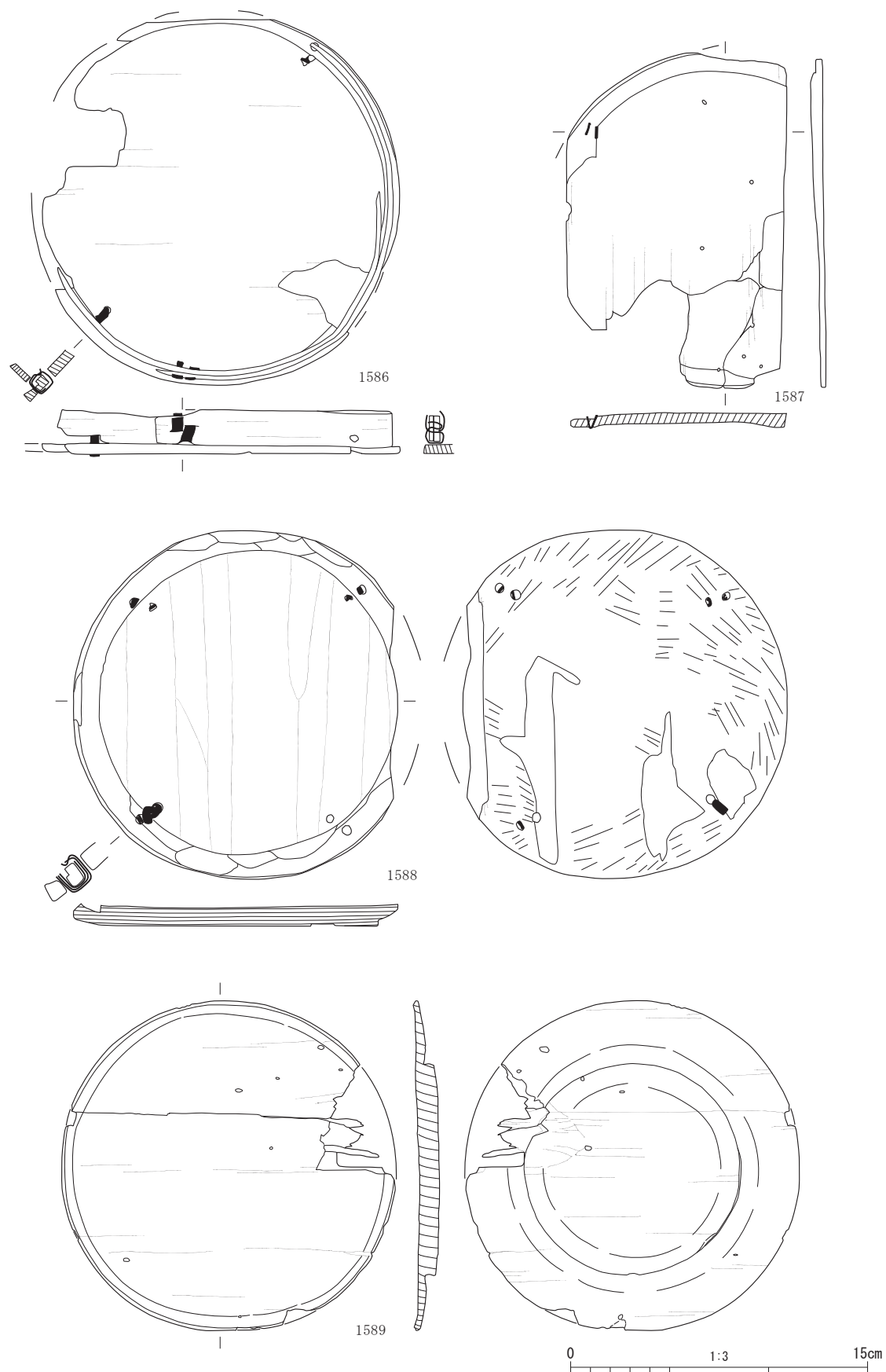


Fig. 296 IV層 出土遺物 (17)

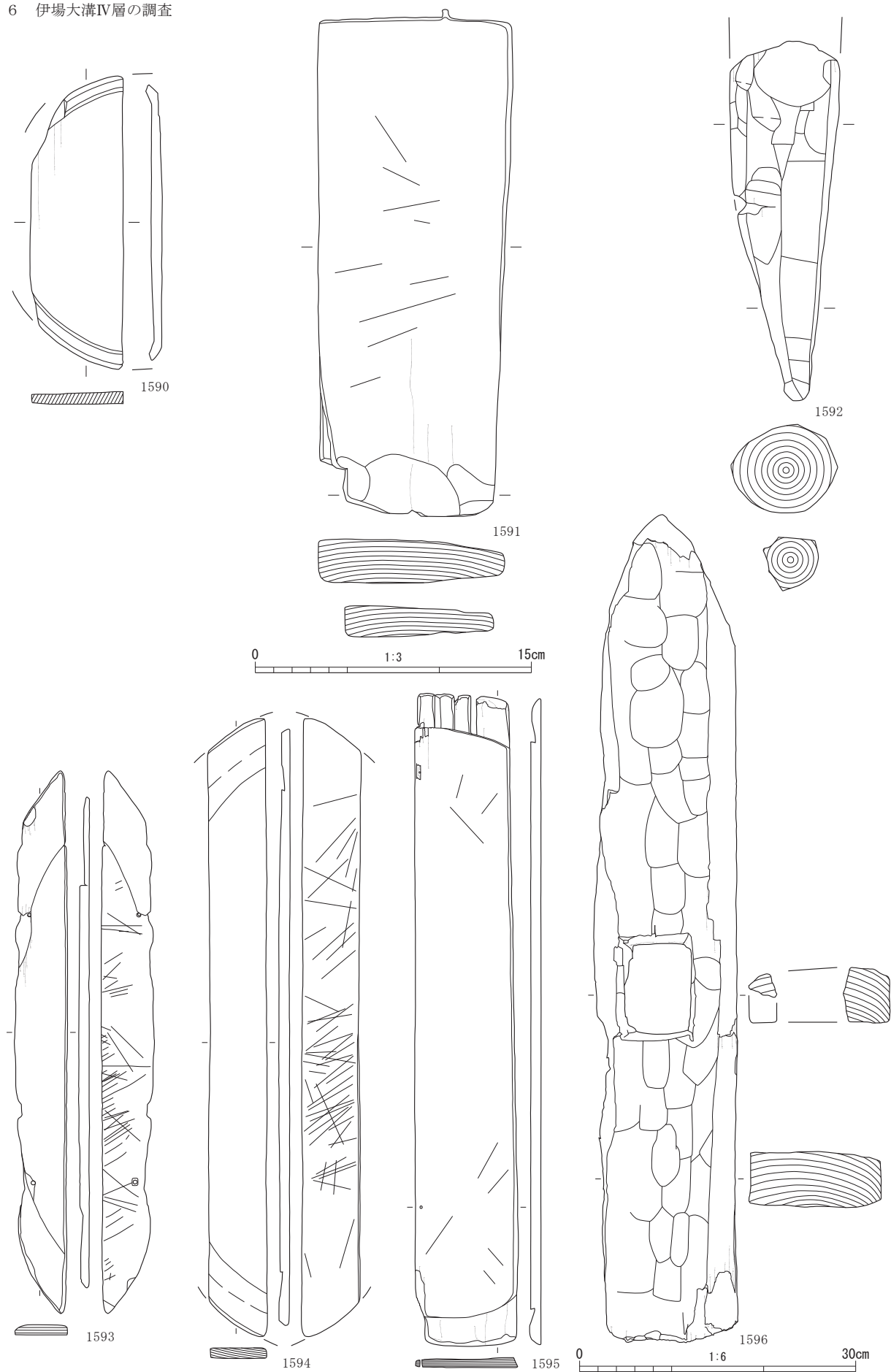


Fig. 297 IV層 出土遺物 (18)

7 伊場大溝Ⅲ層の調査

(1) 概要

Ⅲ層は、伊場大溝の最上層であり、主に中世に堆積が進んだ層とされている。堆積土は未分解の植物片を大量に含むが褐色系粘質系シルトが主体である。この段階での大溝は幅、深さともに著しく減少し、ほとんど水流のない川になっていたと考えられる。今回の調査では黒色を帯びた未分解の植物片など有機物を大量に含む褐色系粘質系シルト土の堆積とⅣ層の堆積の間に有機物を多く含む土の堆積を確認した。Ⅲ層は、木簡や墨書土器など古代の遺物は出土するが、中世の遺物をほとんど内包しないことから、今回の調査では、13次調査で分離されているⅢa層、Ⅲb層を一括してⅢ層として調査を行った。

(2) 伊場大溝の形状

Ⅲ層の大溝は、Ⅳ層の大溝と比較して幅や流路の形状は変わらないものの、さらに埋没が進み、幅は約10m、深さは0.75～0.55mほどまで減少する。底面の標高は-0.1m前後となる。褐色系粘質系シルト土の堆積の状況から、植物が大量に繁茂する環境であったと推定される。

この頃には、大溝はほぼ埋没した状態となり、ほとんど水流のない湿地のような状態になっていたと考えられる。最終的に16世紀頃までには完全に埋没し、地上から姿を消したと推定される。なお、大溝Ⅲ層と同様の堆積は、大溝本流の西側や南側まで広く堆積しており、梶子遺跡13次調査区でも同様の堆積を確認している。大溝の完全な埋没と時を同じくして、浜堤列間低地の広い範囲が湿地化していたと推定される。

(3) 遺物の出土状態

出土遺物の傾向 Ⅲ層から出土する遺物は、Ⅳ層以下と比較すると極端に少ない。遺物の分布はⅣ・Ⅴ層同様、大溝の南岸部付近に偏る傾向があるが顕著ではない。

Ⅲ層の出土品は、遺物の時期や特徴などからみて、ほとんどの遺物がⅣ層中から水流により遊離、Ⅲ層底部付近に位置したと推定される。位置的にⅢ層の出土品の多くはⅣ層SX01中にあったものが水流により移動した可能性が高い。灰釉陶器の碗に墨書を記したものの、遺物の時期や特徴から当初はSX01にあったものと推定される。このほかⅢ層中からは数は少ないが、本来の時期に相当する13世紀代の輸入陶磁器や山皿など、中世の土器が出土した。

(4) Ⅲ層出土遺物

1～10は当該時期以前の混入遺物と考えられる。11～15は、本来のⅢ層時期の出土遺物である。山皿と輸入陶磁器（青磁）のみである。

須恵器 (Fig. 300) 1は有台坏身で底部が高台よりも突出するのが特徴的である。高台が形骸化する8世紀前半の湖西窯産か。2は風字硯。東遠江産と考えられる。平底で厚手の堅牢なつくりである。いずれもⅤ層相当の混入遺物である。

土師器 (Fig. 300) 3は坏である。底部から口縁へと外反する。内面はミガキ調整。Ⅳ層相当の混入品である。

灰釉陶器 (Fig. 300) 灰釉陶器は7点が出土した。10を除きいずれも碗である。4は口縁部のみ、7・10は底部のみが遺存する。そのうち4～7には墨書が記されていた。4は下部の欠失、5は施釉で断定できないが、4・5は外側面に「得カ」の墨書が認められる。6は高台内と見込に「几吉カ」の墨書が記されている。7は外側面に墨書が認められるが上部が欠失しているため判読はできない。底部は糸切。8は内外面にハケで施釉する。底部は糸切。9は焼成が軟質である。底部は回転ヘラケズリ。10は長頸壺の底部である。底部は糸切。これらの灰釉陶器は、いずれも形状や墨書の特徴がⅣ層 SX01 出土品と類似していることから、Ⅲ層期の水流が下層であるⅣ層 SX01 を浚い浮遊した混入の可能性が高い。

中世の土器 (Fig. 300) 11～13は山皿である。概ね法量は、口径 8.0 cm 前後、器高 2.0 cm 前後である。11・12は底部糸切、13はヘラおこし。11は口縁部から内面に自然釉。13の内面には降灰が確認できる。11の底部には墨書が認められるが、判読はできない。14・15は貿易陶磁器の青磁碗である。ともに外面には鎬蓮弁文が認められるが鮮明ではない。輸入陶磁器、中国宋代の龍泉窯産か。

その他の遺物 (Fig. 301) 木製品は12点図示した。16は細長い薄い板状の木製品。その形状から斎串の可能性がある。17は切り込みを有する薄い板状で馬形か鳥形の可能性がある。18・19は刻歯式の横櫛。ともに残存長約 7 cm、幅約 4 cm、厚さ約 1 cm となる。19の歯部はほとんどが欠失している。20は曲物底板の中央に円形の穴をあけ、何かに転用されている。21は挽物皿。残存口径 15.5 cm、残存高 3.4 cm、器厚 0.3 cm。非常に薄く精緻な作りである。内面見込に径 6.5 cm の土器の高台圧痕が遺る。22は丸太を半裁したような形状に四角い孔を穿つ。木錘、部材または何かの未製品か。23は長方形の板材、3角を欠失する。径 0.3 cm 程の孔を3箇所穿つ。用途は不明である。24は端部を二股に加工した部材。端部のみが遺り、ほとんど欠失しているため、用途は不明である。25は細長い板状の加工材、両端を細く加工している。残存長は 29.4 cm、厚さ 2.4 cm。中央部は被熱で炭化している。26は棒状の加工材、両端を尖らす。長さ 109.2 cm、径 3.8 cm。27は杭状の先端部分。樹皮が遺る。

木製品の時期は不詳であるが、土器類の下層からの混入に従えば、Ⅳ・Ⅴ層の混入品が多くを占めると考えられる。

(5) 小結

Ⅲ層からの出土品は、下位のⅣ層に比べて極めて少ない。灰釉陶器は位置的にⅣ層 SX01 の出土品と類似しており、Ⅲ層出土遺物のほとんどは下層のⅣ層中からの混入品と考えられる。木製品には横櫛や形代のような祭祀系のものがあり、下層のⅣ層中から水流によりⅣ層 SX01 を浚い遊離したと考えられ、混入の可能性が高い。

Ⅲ層は、出土遺物（山皿、輸入陶磁器）から鎌倉時代（13世紀）には、ほぼ埋没した状態になり、完全に埋没した後は、ところどころが窪地状に湿地化となり、居住や田畑には適さない環境になっていたと考えられる。

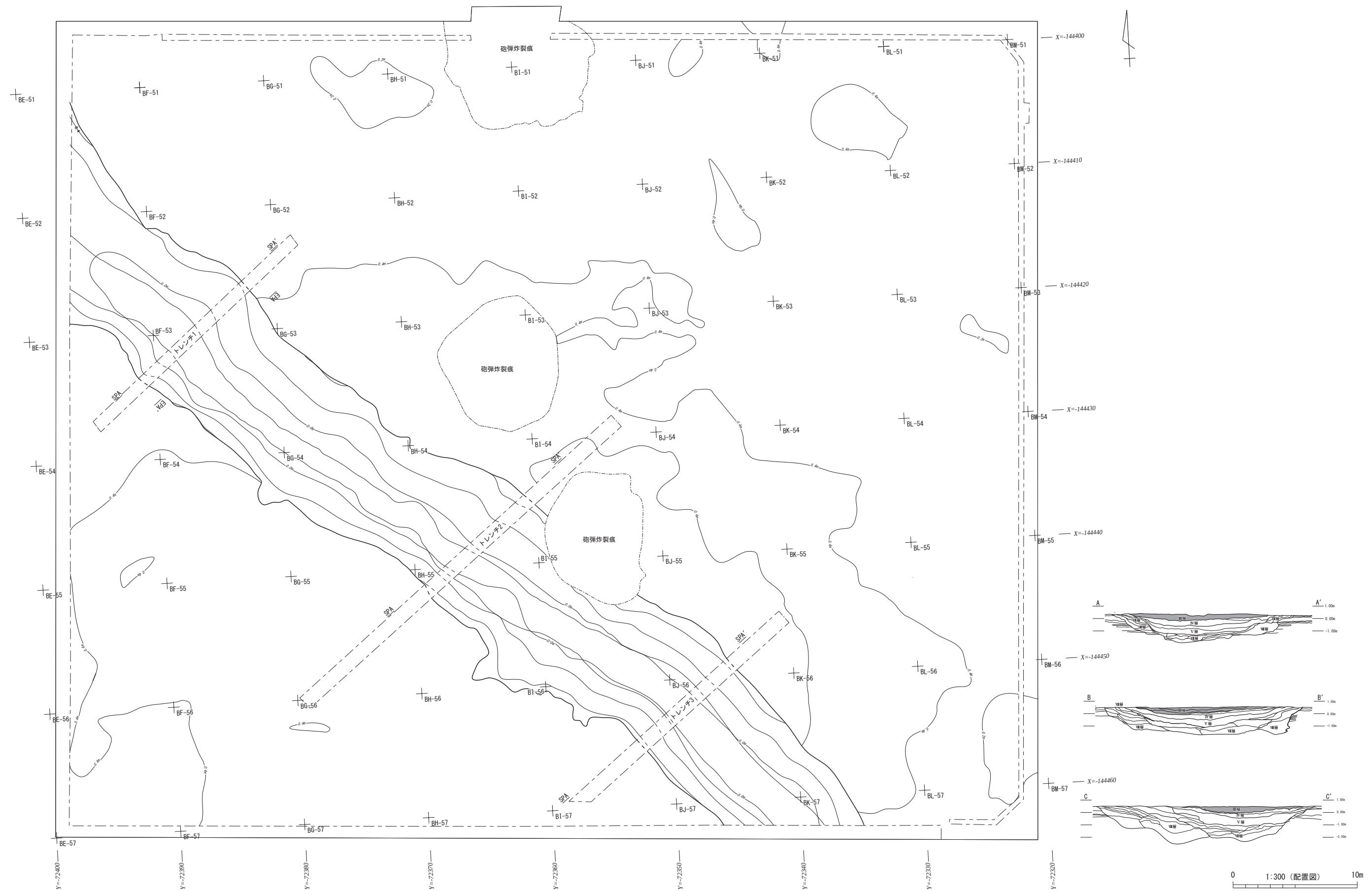


Fig. 298 D区 伊場大溝Ⅲ層

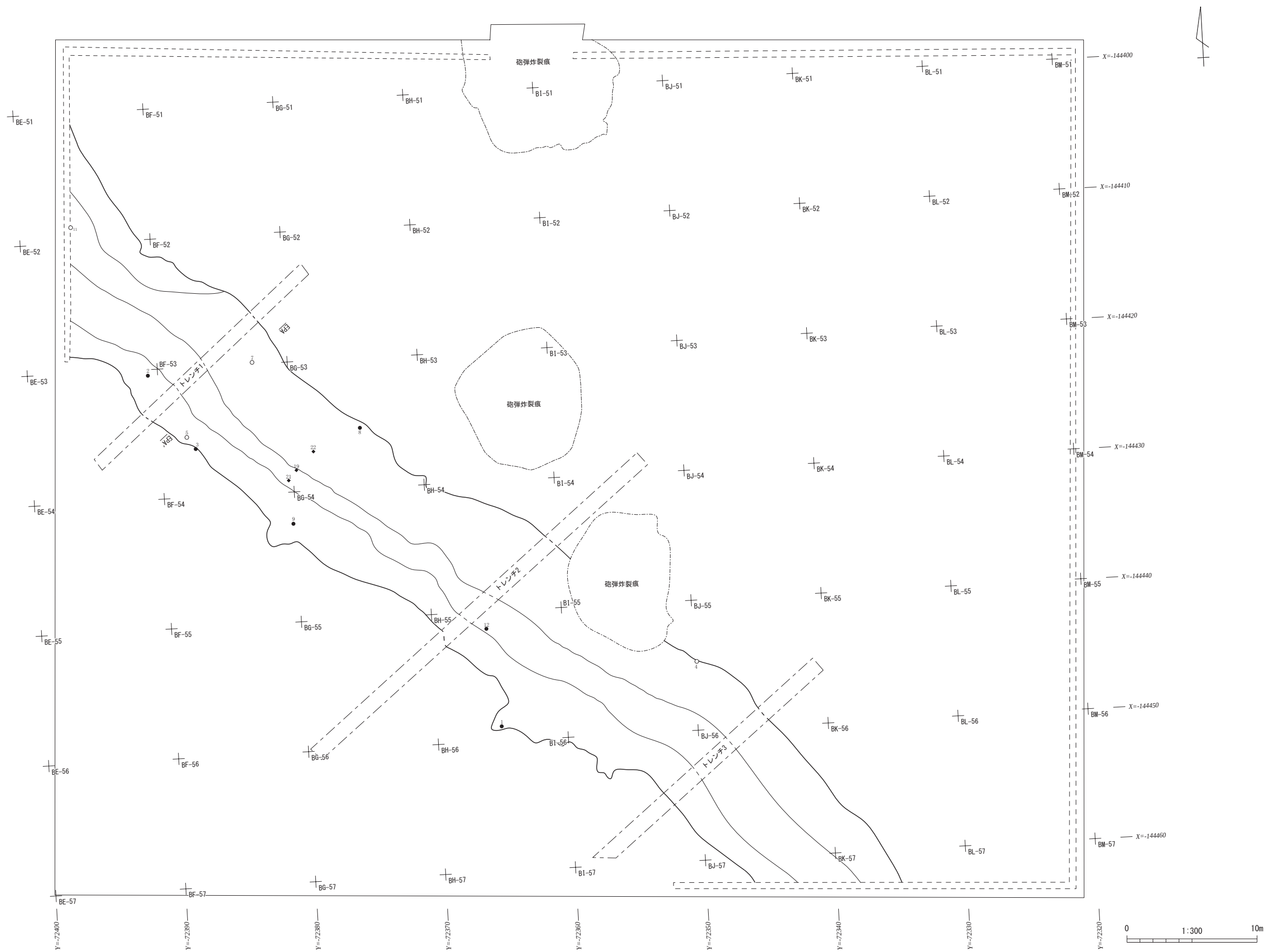


Fig. 299 D区 III層における遺物出土位置

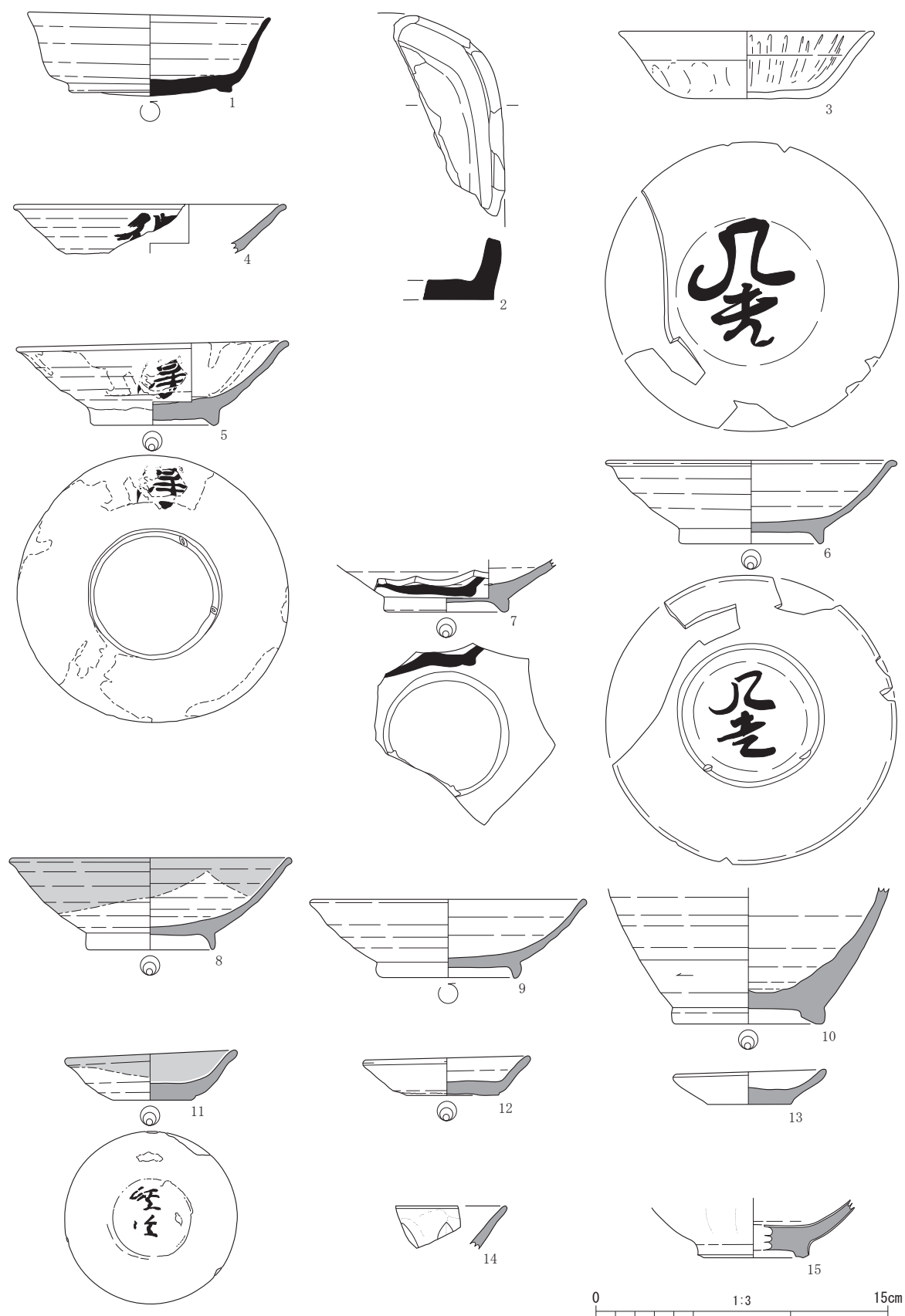


Fig. 300 Ⅲ層 出土遺物 (1)

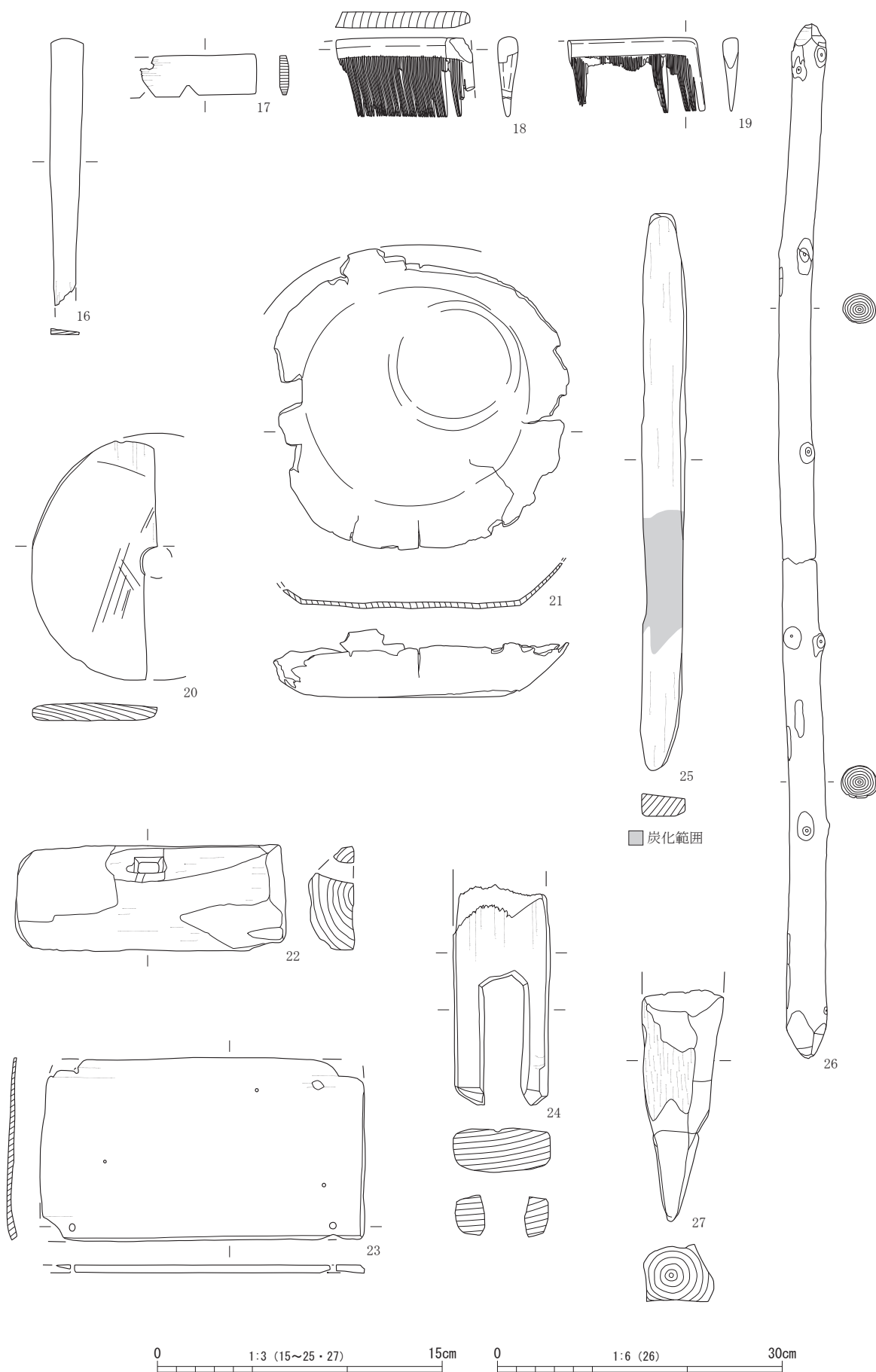


Fig. 301 Ⅲ層 出土遺物 (2)